

岩手県安代町曲田 遺跡出土の晩期縄文土器（後編）

— E — 011住居跡出土土器の再検討 —

小 林 圭 一

5 考 察

これまで、^{まがた}曲田 I 遺跡 E Ⅲ-011住居跡から出土した膨大な量の復元土器について、器種毎に解説してきた。筆者はこれ等の資料の多くが、限られた時間幅（大洞 B 2 新式～同 BC 1 式）の混在資料であるとの前提に立っており、その一括性を積極的には評価していない。

以下では、主要器種である装飾深鉢・鉢形土器と浅鉢形土器について、東北北半（青森県・岩手県・秋田県、一部東北中部を含む）の遺跡から出土した資料を渉猟し、口端の形状、（口）頸部文様、文様帯構成を中心に型式学的な検討を加えることで、大洞 B 2 式と同 BC 1 式の型式内容を考究し、筆者が当該資料を混在と見なした理由を明示していきたい。

なお、注口土器の編年的位置については、既に本文中に明記していることからここでは割愛し、また壺形土器の詳細についても、磨消文様の考察を要することから、稿を改め論じることにした。

A 口端形態の型式変化

（1）林謙作氏による大洞 B2・BC1 式の型式区分（図 19）

林謙作氏は、前記したように曲田 I 遺跡 E Ⅲ-011 住居跡出土の土器を大洞 BC 1 式の一括資料に位置付けている。林氏の言説に従うならば、大洞 BC 1 式期の馬淵川流域では、三叉文系の文様がかなりの割合で残存し、三叉文と羊歯状文の二つの系統の文様が共存しており、（口）頸部文様が型式判別の指標になり得ないことになる。また、^{さざなみ}漣状縁が三叉文のつく鉢類に、珠紋縁が羊歯状文のつく鉢類に特有の口端形態であり、晩期前葉後半（大洞 B C 式期）にはこの二つの系列が併存し、やがて小波状縁へと収斂する変遷過程が想定されており、口端形態の変化と、（口）頸部文様との相関性といった重要な指針が明確にされている（林 1993）。

更に同氏は、岩手県一戸町山井^{やまい}遺跡を報告する中で、大洞 B 2 式と同 BC 1 式の区分について、より具体的な

内容に言及している（林ほか 1995）。

即ち、三叉文系の文様で確実に大洞 B 2 式に対比できる要件として、以下の 3 点を指摘した。

- ①口端部がへら刻みの小波状となるもの（図 19-1・2）。
- ②これに萎縮した I 文様帯がともなうもの（3・5・7・8・12～15）。
- ③弁状突起^{30）}が波状縁に変化したもの（4）。

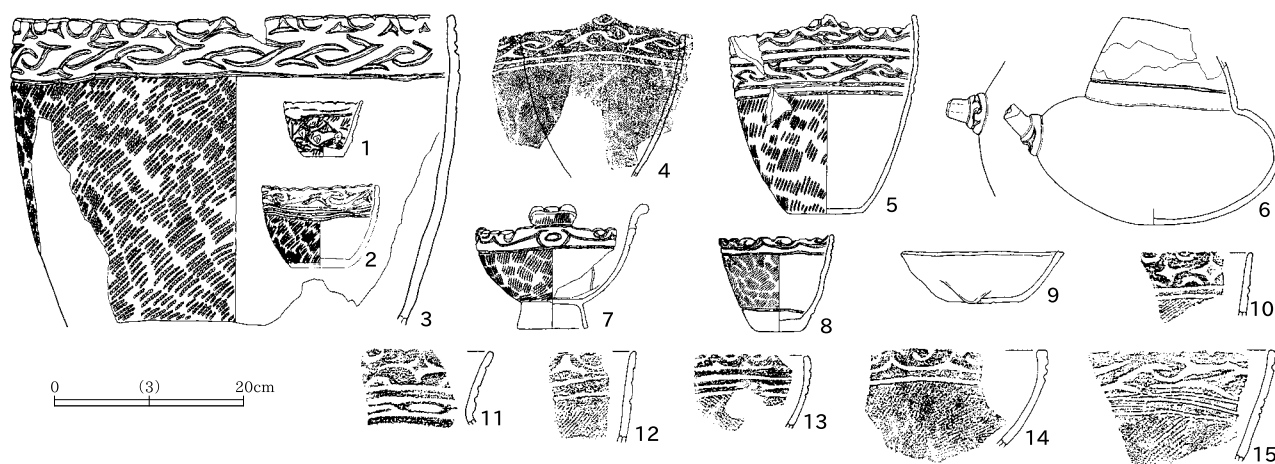
その他に大洞 B 2 式として、方形の底面の四隅が外側に膨らむ浅鉢（9）や、II c 文様帯に上下背中合わせの c 字文を描いているもの（10・11）、口頸部に沈線一条を施文しただけの注口土器（6）等が対比されている。

一方、三叉文系の文様で大洞 BC 1 式に対比される要件として、以下の 3 点を挙げている。

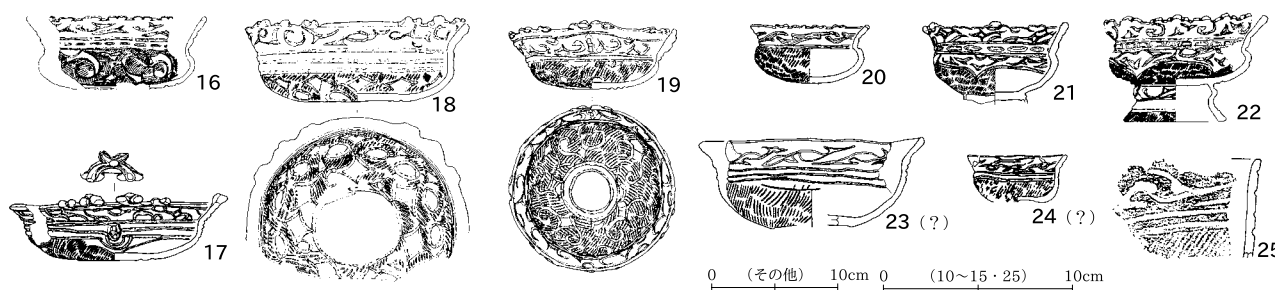
- ④口端部の小波状の突起の両側と頂部に削り込みが入るもの（16）。
- ⑤口端に、弁状突起に由来すると考えられる二対以上の B 突起を組み合わせた装飾のあるもの（17～20・25）。
- ⑥隣接する単位文様の間隔がひらき、羊歯状文・大腿骨文に類する連続した浮紋を表現しているもの（16・21・22）。

23・24 のような平縁の場合には、いずれとも判定しかねるが、文様の割り付け単位数を目安に、大洞 B 2 式では 6 単位以下が、同 BC 式に入ると 8 単位或いはそれ以上が主流を占めるとして、8 単位以上の 23・24 が、大洞 BC 1 式に比定される可能性を示した。

林氏の型式区分は、口端形態の変化に着目した点に特色がある。篋による刻み目からなる小波状縁や漣状縁（図 8）と、入組三叉文の結び付きの強いことは、同氏の指摘したところであり（林 1993）、前記したように筆者も、当該住居跡の装飾深鉢・鉢形土器を検討する中で追認している。同氏は漣状縁と小波状縁が、一連の口端の仕上げの系列に属しており、前者が古く、後者がより新



林謙作氏による大洞B2式



林謙作氏による大洞BC1式

図19 岩手県一戸町山井遺跡出土の大洞B₂・BC₁式 (林ほか1995)

しい要素で、やがて刻み目の細かな小波状縁に吸収されることを想定している。篋状工具を用いる両者の新旧の程は判断しかねるが、珠紋縁を含め刻み目の細かな小波状縁へと収斂される過程は、大洞BC2式期に顕在化すると言えるであろう。

林氏が図示した大洞B2式(図19-1~15)を見ると、概ね妥当な区分と言えよう。I文様帯の残存(3)、三山状突起の装飾鉢(4・5)、弧線文を伴う小波状縁の装飾鉢(5・7・8・12~14)は、後述するように大洞B2式の型式指標と見なせる属性である。一方林氏は、4足底部の浅鉢(9)や、IIc文様帯に弧線と菱形の文様を交互に描く装飾鉢(10・11)も、大洞B2式に位置付けたが、その根拠は判然としない。

4足の底部は、器の四隅を内側から外側に押し出すようにして、外に膨らませた手法で作出される。大洞B1新式(又は「過渡的段階」)の鉢形土器や浅鉢・皿形に現出し³¹⁾、次第に小型壺にも取り込まれ、大洞A式まで継承される。その生成に当たっては、藍胎漆器に象徴されるように、編籠類等の形状が転写された可能性が想定される。4足底部は、林氏が大洞BC1式に比定した曲田I遺跡の無文壺(図16-11・12)にも認められており、

それに先行する資料として、山井遺跡の無文浅鉢(図19-9)を位置付けたのであろうか。しかし大洞B2式のみ指標とは、認め難いように思われる。

また、上下背中合わせのc字文(図19-10・11)とは、上下で背向する弧線と菱形の交互文様を指すようである³²⁾。当該資料を大洞B2式に位置付けたのは、IIc文様帯の確立を重視したためと思われる。但し、11の外折した口頸部文様について、筆者はIIa文様帯と理解している。同様の文様は、大洞BC1式に位置付けた曲田I遺跡の浅鉢(図15-11・14)や山井遺跡(図19-21)にも認められており、同氏の見解は一貫性を欠くように受け取れる。

なお、山井遺跡出土の注口土器(図19-6)について、筆者は東北北半における注口土器B類(2段構成)の初現的な資料として、大洞B1新式又は同B2古式との「過渡的段階」に位置付けている(小林2003)。丸味を帯びた体部の形制と、口頸部文様帯の未発達が根拠となるが、口頸部正面の巴状文様成立前夜の状況にあると判断される。

林氏の大洞BC1式(図19-16~25)は、三叉文系の文様を施した例が極めて高い比率を占めており、羊歯状文

系の文様と共存する内容である。

その中で、④の指摘にあるB突起は、筆者のB突起2b類（図10-4）に相当するが、突起列への変化を示している点で、有力な型式指標と見なされよう。

⑤の指摘にあるB突起の組み合わせは、連続した突起ではなく、単位性を持った構成で正面性を有し、珊瑚状突起の系譜を引く粘土紐を貼付した例（図19-17）も含まれる。同氏の指摘するように、弁状突起に由来するのかが判然としないが、中心的な突起に付随して副次的な突起が付される構成は、注口土器の正面突起にも指摘されており（小林 前掲）、大洞B2新式以降の新しい様相であることは確かであろう。なお、図19-25が⑤に含まれているが、その理由は定かでない。

⑥の指摘にある「連続した浮紋」とは、陽刻部を意識した描出手法を表しているのであろうか。入組三叉文から羊歯状文への変化を、陰刻を主とした施文から、陽刻部の形状を意識した構成への変化と捉えるならば、十分首肯し得る内容である。

また、林氏が指摘した三叉文の単位数の増加は、文様同士の密着した在り方を意味することにもなるであろう。入組三叉文の背向する主軸線が密着し、等間隔に配されることで、挟まれた陽刻部が一定の形状を保持するようになる。単に文様単位数が増すだけではなく、その施文効果も考慮に入れる必要があらう。陽刻部の形状を意識した描出手法は、末端の咬み合う羊歯状文の成立に関わる問題である。

上記したように、山井遺跡で示した林氏の型式区分には、全面的に賛同はできない。しかし、同氏の土器研究は示唆に富む内容であり、学ぶべき点が少ない。更なる検討を加えることが、型式区分を考える上で有効であると判断される。

そこで、林氏の研究に導かれて、装飾深鉢・鉢形土器の口端形態の変化を中心として、大洞B式から同BC式への型式変化を考察してみたい。

（2）「弧線文を伴う小波状縁」の変遷

「弧線文を伴う小波状縁」とは、小波状口縁の波底部と波底部の間に弧線を配置して、その隙間を埋めるように三叉状の陰刻を加えた構成の口縁部形態である。EⅢ-011住居跡から、該当資料は出土していないが、晩期初頭の装飾深鉢・鉢形土器を特徴付ける属性であることから、

その消長を跡づけてみたい。

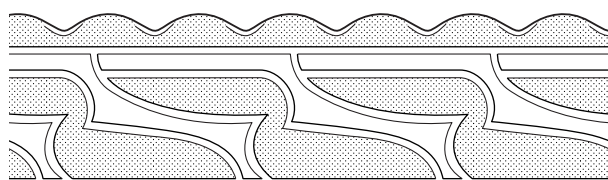
先に林氏は、口端部が鋭刻みの小波状縁で、これに萎縮したI文様帯を伴うものを大洞B2式の指標としたが、筆者の考える「弧線文を伴う小波状縁」が、これに相当する（図19-3・5・7・8・12~14）。東北地方の縄文後期後半のI文様帯は、文様としては振るわず、帯状をなしていたが、大洞B1古式になって文様と化す傾向にある³³⁾。以降、頸部文様帯との融合化を経て、大洞B2式に晩期文様帯としてのIIc又はIIa文様帯が成立したと想定される。林氏は、この口縁部の弧線文とその間を埋める三叉状の陰刻を、I文様帯の残影と見なしたことになる。

口端の小波状化は、大洞B1古式以降に顕著となるが、その変遷の過程を模式図を用いて跡づけてみたい。図20aは弧線文を伴う小波状縁の模式図、図20bは模式図の典拠となった実在資料であり、それぞれの番号は符合している。

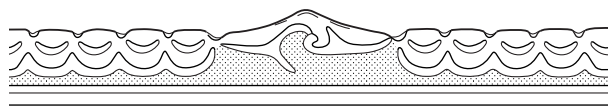
大洞B1式においては、口端が緩い波状を呈した例が多く認められる。須藤隆氏が晩期1a期（大洞B1式期）とした、岩手県前田遺跡1号竪穴住居跡3b・3c層でも、緩い波状縁の装飾深鉢（図52-2・3）が指摘されている（須藤1992）。緩い波状は、次第に間隔を密とし、連続した小波状へと変化を遂げる。このことは一括性の高い資料からも、裏付けが可能である。

筆者は注口土器の検討から、大洞B1新式の基準資料として、岩手県九戸村道地Ⅲ遺跡FⅡ-9住居址床面資料を位置付けている（小林2003）。この住居跡では床面から、台付浅鉢1点（図23-1）、浅鉢1点、台付鉢1点（図20b-1）、壺形1点、注口土器2点（図21-2）の計6点の完形土器が出土したが、その他にも、粗製深鉢・台付鉢等の底部や破片資料13点が、報告されている（種市1983）。

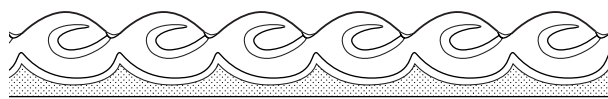
図20a・b-1・2が、当該住居跡の床面から出土した台付鉢の完形品と破片資料である。1の口縁部は、緩い波状縁で口縁直下が画され、後期以来の縄文帯（I文様帯）で構成される。頸部に6単位の入組帯状文が配されるが、IIa文様帯の下端は頸胴部界の屈折部よりも降下しており、東北北半の大洞B1新式に典型的な台付鉢となっている。2は、波頂部がやや尖った小波状縁で、波頂直下に凹点と、それを囲うように波底部を繋ぐ連続し



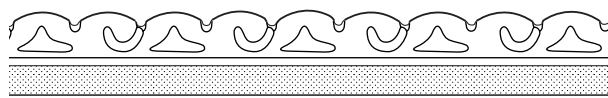
1道地Ⅲ (岩手)



4曲田Ⅰ (岩手)



6小井田Ⅳ (岩手)



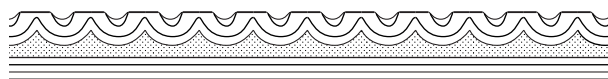
8曲田Ⅰ (岩手)



10蒔前 (岩手)



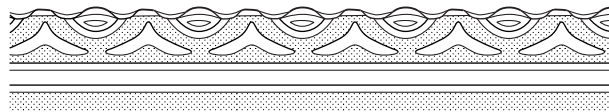
11山井 (岩手)



13上平 (岩手)



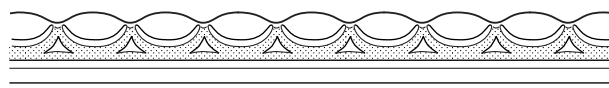
2道地Ⅲ (岩手)



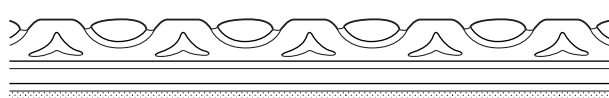
3右エ門次郎窪 (青森)



5柏木森 (秋田)



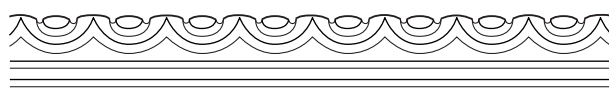
7水吉 (青森)



9小田 (岩手)



12小田 (岩手)



14上平 (岩手)

1～3：大洞B1新式、4～7：過渡的段階、8・9：過渡的段階～大洞B2古式、10～14：大洞B2式

図20a 「孤線文を伴う小波状縁」模式図

た弧線が配され、直下に平行沈線が圍繞される。但し、地文は判然としない。

以上の2例は、出土状況から同時期の所産であり、大洞B1新式の指標に置けると判断される。この前提に立つならば、大洞B1新式期には小波状縁が明確となり、波頂直下の凹点と連続した弧線文も、当該期に現出する。

図20a・b-3の口縁部には、凹点・弧線文と独立した三叉文が交互に配されており、2の構成に類似する。体部文様帯の磨消文様は、横位に連続する入組带状文の系譜を引いており、2と同様に大洞B1新式に位置付けられる。口縁部には縄文地文を有し、弧線内のみ磨り消され、頸部文様帯は縄文帯で構成される。なお3の三叉文は、先行型式の口縁部の独立した三叉文の系譜を引く可能性

が想定される。

筆者は、大洞B1新式に後続する資料として、曲田Ⅰ遺跡GⅣ-014住居跡床面資料を基準に、大洞B1新式～B2古式の過渡的段階（以下「過渡的段階」と略称する）を設定した（小林 前掲）。当該住居跡は、EⅢ-011住居跡とほぼ同規模のやや大型に相当するが、床面から鉢・深鉢・注口土器の3点の完形土器と、装飾深鉢等の破片資料4点が出土している（鈴木隆英1985）。「過渡的段階」は、注口土器の磨消縄文の文様に特徴付けられるが、当該住居跡の出土状況により、装飾鉢を規定することも可能となろう。

図20a・b-4が、当該住居跡出土の装飾鉢である。正面性を有する一山状突起の直下に、入組三叉文1c類を

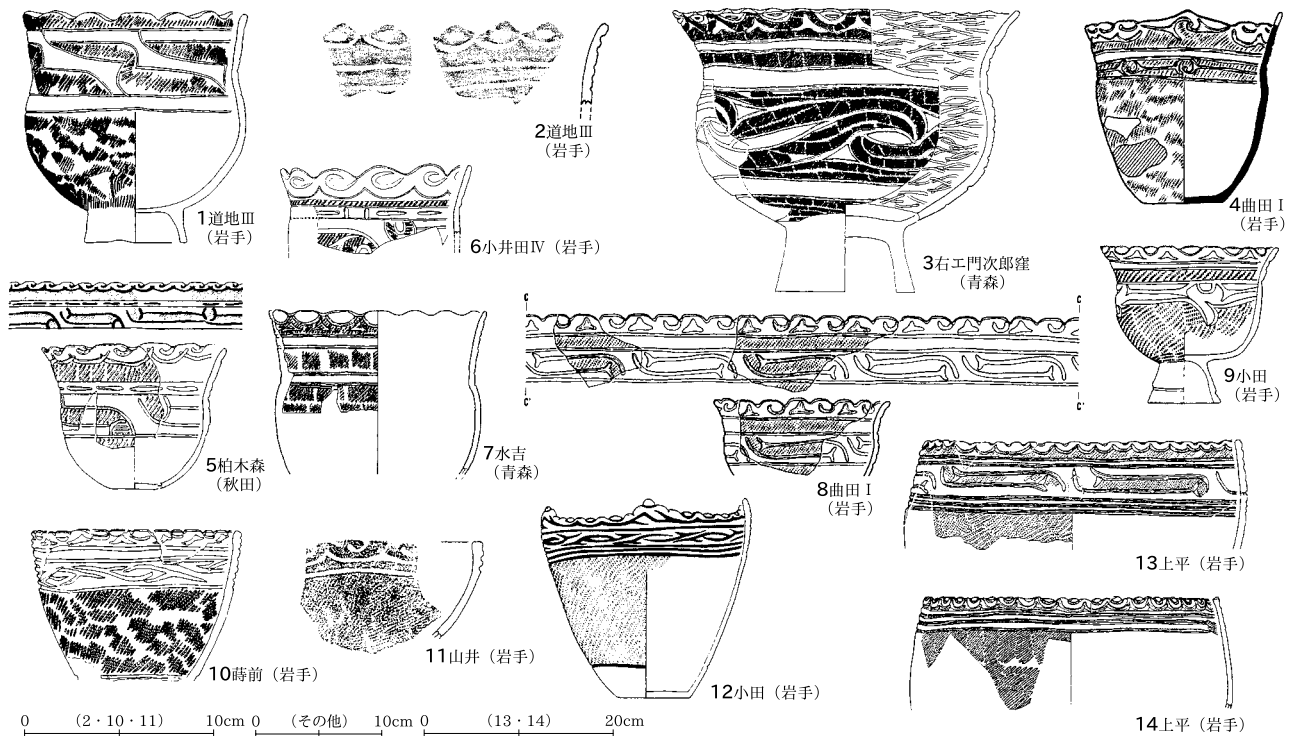


図20b 「弧線文を伴う小波状縁」土器

1 単位配し、その周囲は小波状縁をなし、波底部を結ぶように二重の弧線文が巡らされる。下段の弧線は連結し、その直下に縄文地文が施される。口唇部からは、縄文が消失するものの、口頸部文様帯には、まだ地文を残しており、晩期Ⅱa文様帯への過渡的様相を呈している。4 の下段の弧線文は、3 の独立した三叉文が連結することによって生じたと見ることもできよう。

4 の口縁部の構成を基準に、類似資料を渉猟すると、幾つかのバリエーションが認められる。5 は、下段の弧線が波頂部直下で連結するが、上段は右側波底部から伸びた J 字状の短沈線で構成される。6 は、上段の J 字状短沈線が強調された例である。

上記から、弧線文を伴う小波状縁の内、口唇部が磨り消された弧線文（類似文様を含む）とその直下に縄文地文を有する構成が、「過渡的段階」の特徴として抽出できそうである。上段の弧線は、J 字状の短沈線に取って代わる場合もあるが、口縁部から縄文地文が抜ける過渡的な段階として位置付けられよう。なお 7 は、3 の系譜を引き、9 に連なることから、当該期に比定したが、大洞 B1 新式に位置する可能性も想定される。

以上、図20a・b-1・2 と 4 を基準にして、口端形態の変化を型式学的に跡づけてみた。4 に後続すると考えられるのが、8・9 である。共に口縁部直下が横線で区

画され、頸部は幅狭の縄文帯をなしており、口縁部からは縄文地文が消失する。8 は、J 字状短沈線と三叉文が交互に配され、体部には入組帯状文を残している。9 は小波状縁の下端を縁取る弧線文が、三叉文と交互に加えられるが、筆者は「ノ字文」の分析から、大洞 B2 古式に位置付けている（小林2004）。

10～14 は、大洞 B2 式に位置付けられる A 類の装飾深鉢・鉢形土器である。大洞 B2 式以前の弧線文を伴う小波状縁は、屈折部を持つ B 類に卓越したのに対し、当該期には A 類も多く認められており、また（口）頸部から、縄文地文が消失する。

10 の口端は、篋状工具によって刻まれた小波状縁（漣状縁）で、口縁部には弧線と三叉文が交互に配され、頸部文様帯には入組三叉文が施される。口縁部文様の下端は区画されており、I 文様帯の残影であることが窺える。11 は、J 字状短沈線と連結した弧線文を交互に配したもので、5 からの発展が想定される。12 は、小波状縁の下縁を縁取った弧線と、連結した弧線文を交互に配したもので、4 単位の三山状突起の直下は、連弧文から伸びた入組三叉文 1 c 類で構成される。14 も、小波状縁の下縁を縁取った弧線文と連弧文を交互に配しており、13 は、連弧文のみであるが、直下に古的様相である縄文地文が施される。

上記したように、筆者は緩い波状口縁から、次第に間隔を密にした小波状縁（漣状縁）への変化を想定している。当初口縁部に存した縄文地文も、次第に下方に垂下し姿を消すと共に、小波状縁の下縁が縁取られ、突起状に作出される傾向が看取される。上記の変化は、大洞B2式期に顕在化すると言えるであろう。

弧線文を伴う小波状縁は、後続する大洞BC1式に存する可能性も否定できない。しかし同式では、珠紋縁（図8-3）やB突起4b類（図10-10）、三山状突起3b類（図9-6）のように、口端から削り込まれた形態が卓越するため、弧線文は同化されてしまうのが実情であろう（図12-87）。以降小波状縁は、更に細かな刻み目として、大洞BC2式に至ると想定される。

弧線文を伴う小波状縁は、三叉文を残す系列と連弧文の系列とに大別される。系列毎の変遷を見てみると、前者は3→7→8・9→10、また後者は2→4・5→11～14の変遷過程が想定される。

弧線文を伴う小波状縁は、上記したように大洞B1式～B2式に限定された属性であり、大洞BC1式には直接継承されない。当初は緩い波状であったが、次第に間隔が密となり、篋状工具による刻み目となり、口端を縁取るような構成へと変化を遂げる。更に大洞BC1式では、従来の形状を維持することなく、珠紋縁に収斂される。このような系統立った変遷が想定されることから、弧線文を伴う小波状縁は、型式を区分する上での指標と見なし得ると判断される。従って、先に示した林謙作氏の大洞B2式の指摘は概ね妥当であり、図19-7・8はやや古相を呈するものの、図19-3・5・12～14は、大洞B2式に位置付けられる。

曲田I遺跡EⅢ-011住居跡では、弧線文を伴う小波状縁は認められない。僅かに、小波状縁の下縁が縁取られた装飾深鉢（図11-2）や、二重弧線文を施した装飾鉢（図13-93）、珠紋縁の装飾鉢（図12-87）を類似例として指摘するに留まる。このことは、当該住居跡が大洞B2新式～BC1式に限定された内容の傍証となる一方で、大洞BC1式の型式内容を示している、と評価することも可能であろう。

（3）B突起の変遷

二つの高まりからなるB突起の種別と口頸部文様との関係については、曲田I遺跡を紹介する中で、既に言及

してきた。B突起は、刻み目の加え方により、4種10類（図10）に分類される。当初間隔を置いて配されるが、次第に間隔が密となり、突起列に至る過程が想定される。また、装飾性の乏しい形状から、装飾が加味される過程が想定される。この理解に立つならば、間隔を置いて配され、装飾性に乏しい1a・1b類や2a類は古的様相、一方連続的に配され、刻み目が加えられる2b・4a類は、新しい様相と見なすことができるであろう。

上記のことは、曲田I遺跡出土の装飾鉢の口頸部文様との結び付きからも裏付けられる。即ち、1a・1b類や2a類には、三叉文系の文様が卓越する。一方2b・4aは、少数であるが双方の文様が認められる（表3）。

B突起の型式学的な展開を考えた場合、裾が広がる山形の1a・1b類は、後期末葉の二山状の台形突起に起因すると考えられる。更に、突起中央や両端が刻み込まれ、下縁を縁取るような短沈線が加えられる、といった変遷過程が想定される。突起の間隔が縮まることで、沈線は右隣の突起にも及んでおり、4b類のような珠紋縁と結び付いた大洞BC式特有の形態に変化する。

従って、1a・1b・2a類→3a・3b・3c・3d類→2b・4a・4b類の変遷が想定される。B突起は大洞B2式以降に明確化しており、この推移は大洞B2式～BC1式にかけての変化として捉えられる。但し、段階を踏んで変化する訳ではなく、古的様相も残存しており、4b類を除き明確な型式指標とは見なし難いのが実情であり、3c・3d類や2b・4a類は、大洞BC1式のみならず、同BC2式～C1式にも認められる。

また、口端形態との関係で見てみると、1a・1b類や3a・3b・3d類は平縁や小波状縁・漣状縁、4b類は珠紋縁との結び付きが強い。しかし、連続的に配される2b類や4a類は、所謂「疎大な截痕」が加えられることはなく、突起列の様相を呈しており、両閉じ区画が卓越する。また3c類も、連続的に配される傾向にある。

上記したように、B突起から型式区分を求めることは、容易ではない。しかし、変化の過程を考慮することで、ある程度の指針が得られるものと想定される。

（4）三山状突起の変遷

三つの高まりからなる三山状突起についても前述したが、入組三叉文との結び付きが強く（表3）、大洞B2式～BC1式にかけて顕著に認められる。林謙作氏は、山

井遺跡の三山状突起を配した裝飾鉢を大洞B2式（図19－4・5）に位置付けたが、旧稿（林1993）では「A－B突起」として、三叉文系土器の口端裝飾の中でも新しい要素と見なしていた³⁴⁾。

三山状突起は、刻み目の加え方により、3種6類（図9）に分類されるが、裝飾が少なく単独又は間隔を置いて配された突起が古い様相であり、B突起と同様に次第に裝飾が加味され、間隔が密になる傾向が指摘される。

三山状突起は、注口土器口縁部の正面にも認められ、系統立った変遷が想定される（小林2003）。裝飾深鉢・鉢形土器とも相関性を有していたと見なされるため、まずは、注口土器の三山状突起の消長を跡づけることで、鉢類の三山状突起の型式変化を考究する上での、参考に供してみたい。

注口土器の正面突起（図21） 注口土器口縁部の正面には、山形に盛り上がった突起（正面突起）が屢々付される。図21は、大洞B1新式～B2式終末の型式までの、各階梯の注口土器A類（3段構成）を配列したものである。

大洞B1新式（図21－1・2）では、口縁部正面に突起が付されるようになる。それ以前の注口土器は、壺形の形制を踏襲する無文のものが主体であったが、当該期に壺形とは異なった独立した器種として、注口土器の確立を見る。まだ無文の例が多数を占めているが、口縁部正面に一山状の突起が現出するのと軌を一にして、その直下に三叉文系の文様を施す例も現れる。

「過渡的段階」（図21－3・4）にも、一山状突起は継承されるが、突起直下には、口唇部の三叉文から垂下したノ字状の文様が施される。このノ字状の文様は、後続型式の巴状文様に発展すると想定され、当該期の口唇部には、縄文地文が認められる³⁵⁾。

大洞B2古式（図21－5・6）では、三山状突起が明確になる。扇形の三つの高まりが作出されるが、その間の刻み目はそれ程明瞭ではない。突起の直下には、ノ字状文様や一筆書きの巴状文様が施され、口唇部には三叉文系の文様が残存する。しかし、縄文地文は消失する。

大洞B2新式（図21－7・8）では、三山状突起の左右にB突起が配されるようになり、刻みや短沈線による裝飾も加味される。口縁部の菱形文様の一端が突起間で露出すると共に、口唇部上端の沈線も突起の裝飾に参入しており、突起と口縁部文様が一体化する。7はJ字状に

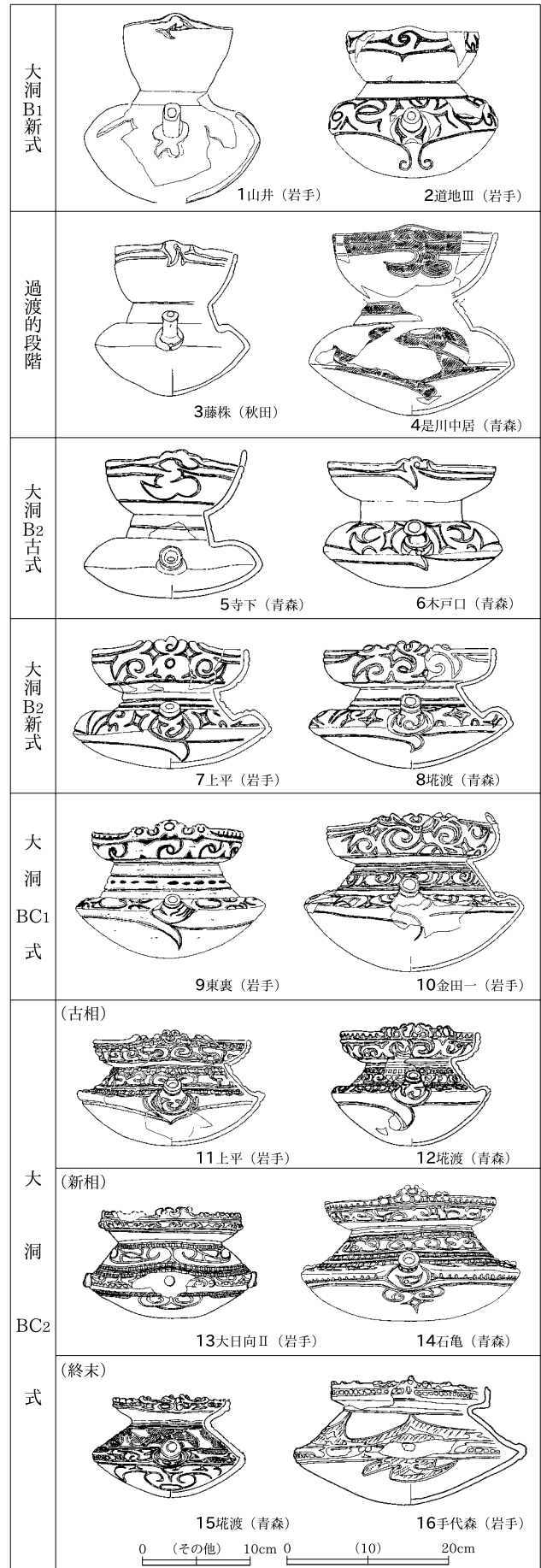


図21 注口土器（A類）の正面突起変遷図

渦巻く短沈線、8は頂部が分割され半円の陰刻が施される。特に前者は、当該期に特有の装飾であり、後者は大洞BC2式(新相)まで継承される。

大洞BC1式(図21-9・10)では、口縁部文様の繁縷化に同調して、突起の装飾は華美となり、三山状突起は形骸化の過程にある。先行型式と同様に、突起と口縁部文様の一体化が通例であるが、口唇部が画され、口縁部文様帯が二分された例(9)も現出する。9は三山状突起の面影を残すものの、三つの高まりが更に二分されている。10は8の系譜を引くが、頂部が分割された中央の突起が強調され、三山状突起の形状は失われつつある。当該期は、頸部文様帯の生成と、肩部文様帯の全周化に特徴付けられるが、口縁部文様は、全周展開しない例(10)も多く認められる。

大洞BC2式では、口縁部文様帯が全周展開すると共に、口唇部が分離される。口縁部は退縮の方向にあり、口縁部器高の狭小化とは対照的に、正面突起が相対的に際立つようになる。

筆者は、大洞BC2式の注口土器を3細分している(小林 前掲)。「古相」段階(図21-11・12)や「新相」段階(13)には、8の系譜を引く三山状突起の痕跡を看取することができる。しかし、「終末」段階になると、口縁部の退縮が著しく、中途で内屈して稜を持ち、直立気味に立ち上がる形制となる。従来の口縁部下半の文様帯は消失し、刻み目帯や截痕列からなる口部装飾帯のみの構成で、口端にB突起が圍繞され、正面には縦長のB突起が付される(15・16)。「終末」の段階は、A類よりも寧ろB類(2段構成)に正面突起の発達が著しく、A突起風的大型突起と、その周囲にB突起が配される。

上記したように、注口土器の三山状突起は、大洞B2古式~BC1式にほぼ限定され、以降形骸化の過程を辿る。この変遷が、装飾深鉢・鉢形土器にそのまま適合するとは、必ずしも断言できないが、相関性を有していたことは確かであり、鉢類の型式区分を行う上で、参考に資することができると思われる。

装飾深鉢・鉢形土器の三山状突起 図22は、口端に三山状突起を配した装飾深鉢・浅鉢等を集成したものである。前記したように、入組三叉文との緊密性が認められるが、C字文(18・31・33)や入組帯状文(22~24)、羊歯状文・截痕列(25~34)が施された鉢類も存在する。

先に注口土器では、一山状突起からの変化として、大洞B2古式に三山状突起の成立を指摘したが、装飾深鉢では、大洞B1新式にその萌芽を認めることができる(図22-1・2)。このことは、装飾深鉢・鉢形土器の三山状突起が、注口土器の正面突起からの影響で成立したのではなく、装飾深鉢独自の系譜が存した可能性を窺わせる。1は頂部に二つの刻み目を持つ台形突起、2は刻み目が弱く、注口土器と同様に一山状の突起に起因することが、想定されよう。

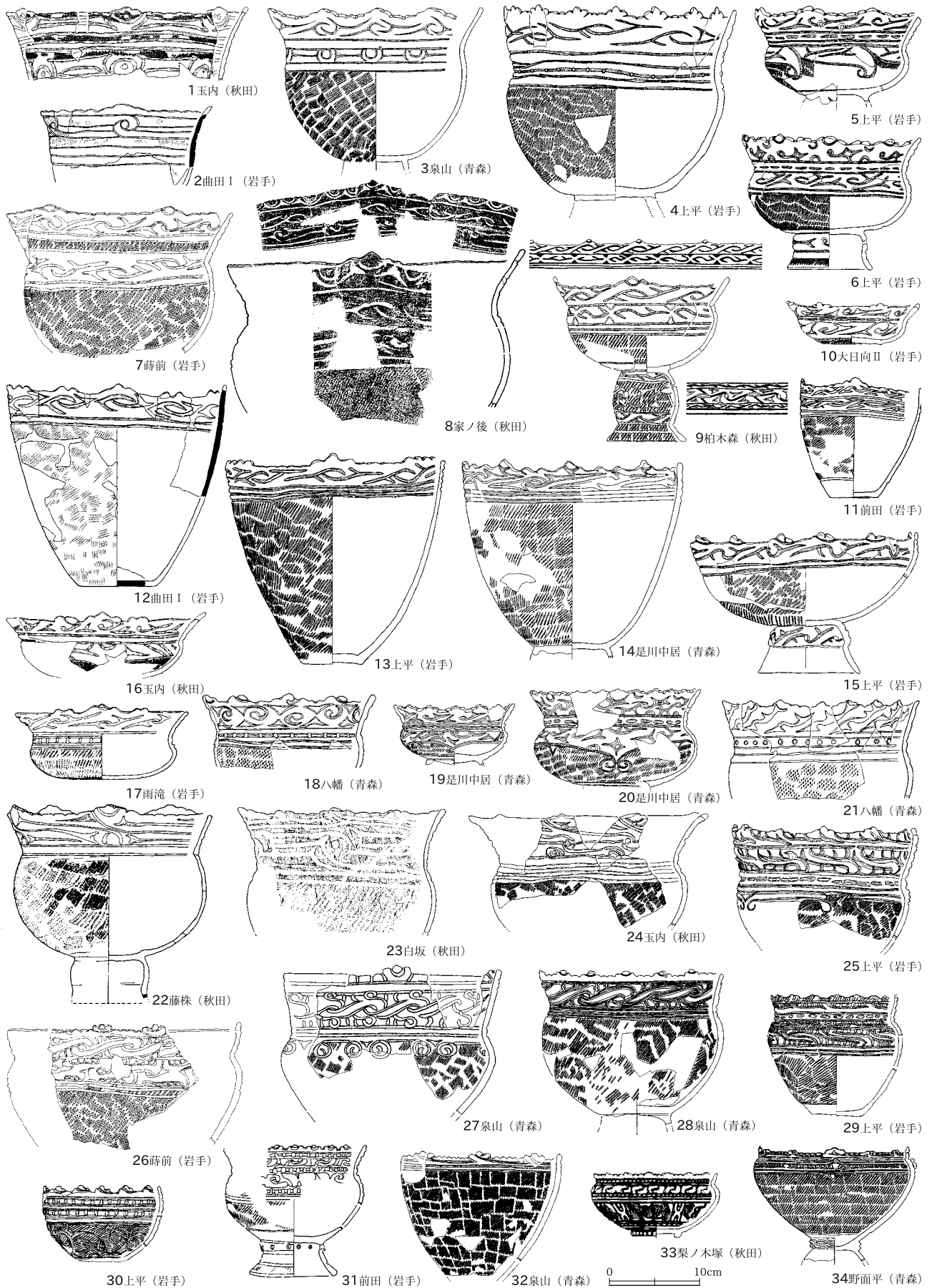
鉢類の三山状突起の初出例は、注口土器に先んじて認められるが、盛行したのは同じく大洞B2式期であり、A・B両類の器形に認めることができる。

図22-3~5・10~13は、三山状突起1a・1b類(図9-1・2)に相当する。いずれも入組三叉文が施され、装飾性に乏しく、突起も間隔を置いて配される。突起間は小波状縁・漣状縁で構成されており、古い様相を留めている。

図22-6~9・14は、三山状突起2a類(図9-3)に相当する。2a類は中間の高まりの下縁が縁取られるが、1類と同様に入組三叉文との結び付きが強い。7は頸部に縄文帯が配され、8は口縁部が画された弧線文を伴う小波状縁の例である。先に述べたように、いずれも古の様相であり、大洞B2式でも古く位置付けられよう。一方、14の入組三叉文は、背向する主軸線が近接し、突起直下の弧線と連結した短沈線が付加されることから、新しい様相を帯びている。

図22-16・17は、注口土器の正面突起に類似し、三山状突起の両脇にB突起が副次的に配される。注口土器では大洞B2新式以降の特徴であることから、本例も同様の位置付けが想定される。但し、17の屈折部は、截痕列風に作出されており、大洞BC1式との過渡的な様相を示している。18の三山状突起には、注口土器の三山状突起に顕著なJ字状の短沈線が認められており、大洞B2新式に相当する。

図22-19~21は、三山状突起が連続的に配された構成で、新しい様相を窺わせる。19は突起間が平坦に削平され、20・21は連続的又は小波状縁が介される。19の突起間は、B突起2b類(図10-4)に共通した在り方である。19・20の体部文様帯には、台付鉢の体部に特有の半円を囲う魚眼状三叉文4b類(図25-8)が施されるが、筆



1・2：大洞B₁新式、3～24：大洞B₂式（但し14・15・17・20・21は保留）、25～31：大洞BC₁式、32～34：大洞BC₂式

図22 装飾深鉢・鉢形土器の三山状突起集成図

者は大洞B2新式に多用されることを指摘している(小林2004)。

図22-22~24は、(口)頸部文様帯に入組帯状文を配した台付の装飾鉢である。後期後葉の装飾深鉢の系統にあるが、縄文地文を欠き、モチーフも崩れており、入組帯状文の形跡を留めるに過ぎない。いずれも、秋田県内の米代川流域から出土しており、該域に特有の台付鉢であったことが想定される。入組帯状文は、三山状突起との結び付きが強く、縄文地文を有する台付鉢にも屢々認められる(小林 前掲)。このことは、三山状突起が古様の相である傍証の一つと見なすことができるであろう。なお類似した台付鉢は、曲田Ⅰ遺跡からも出土している(図13-90)。

大洞BC1式に相当する三山状突起の例は、図22-25~31である。量的には非常に少なくなるが、A類(30)とB類(25~29・31)の双方の器形が認められ、後者が卓越する。突起自体に刻み目等の装飾が加味され、また低く作出されるため、珠紋縁やB突起等との判別が困難な場合も想定される。先に三山状突起3a・3b類(図9-5・6)が、大洞BC1式に相当することを指摘した。3a類は櫛状に沈線が加えられた例³⁶⁾(図22-25・30)、3b類は突起の下縁が二重に縁取られ、両端の高まりが迫り上がって肩の張った例(図22-26・27)である。突起の加飾は、口端の珠紋縁や頸部文様帯の羊歯状文・截痕列の発達に、連動するものであろう。羊歯状文は陰刻に磨きを加えることにより、陽刻部の形状を明確にする構成であるが、突起においても刻み目や縁取りを明瞭に加えることで、突出部を浮き出させる傾向にある。また、29の口縁部には、縄文帯が形成されている。曲田Ⅰ遺跡の入組三叉文の装飾鉢(図12-62)にも認められており、I文様帯の残影として、一脈通じるものがあったのだろうか。

大洞BC2式にも、僅かに三山状突起が認められる。図22-33は、口縁部が短く外折しており、新生Ⅱc文様帯で構成された台付の浅鉢である。三山状突起と小波状縁が交互に配され、頸部文様帯にはC字文、体部文様帯には縦位区画の磨消文様が施される³⁷⁾。34も口縁部が外折した台付鉢で、三山状突起が4単位、その間にB突起が2個ずつ配され、口部装飾の起点となっており、三山状突起直下には三叉状の陰刻が加えられる。32は三山状突

起3a類が配され、突起間は細かな刻み目による小波状縁をなしており、当該期に比定されるものであろう。三山状突起は、大洞BC2式までの存在は確認できるが、それ以降は確認できない。

上記したように、三山状突起は型式を区分する上での重要な指標と見なされる。特に、装飾性に乏しい三山状突起1・2類は、大洞B2式を規定する属性である。大洞BC1式では沈線により加飾される傾向が看取され、辛うじて同BC2式まで存続する。従って、林謙作氏が大洞BC1式に比定した図19-21・22は、筆者の理解では大洞B2新式に位置付けられるであろう。

(5) 浅鉢形土器の珊瑚状突起について

珊瑚状突起³⁸⁾とは、B突起の集合体として著しい高まりを形成した大型の装飾突起のことであり、1単位のみ正面性を有し、主に浅鉢・鉢形土器に付される。突起は1~3個の大きな高まりで構成され、同数の透かしが穿たれるのが通例であり、外面には縄文地文、内面には隆線文様の施された例が、多く認められる。

曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡からは、浅鉢2点(図15-3・4)、台付鉢1点(図12-71)の計3点の珊瑚状突起が出土している。その内、図15-4は完形で出土している。珊瑚状突起を持つ浅鉢等は、精巧な造作から珍重されたものと推察され、一つの住居跡から3例(台付鉢含む)出土したという事例は、かなり特異と言えるかもしれない。

図23・24は、珊瑚状突起を配した土器を集成したものである。多くは屈折する浅鉢(台付を含む)であるが、屈折しない浅鉢(図23-9・16、図24-18・19)や、台付鉢(図23-2・3、図24-17)も認められる。口頸部文様では、入組三叉文、菱形(矩形)文、羊歯状文(截痕列)、C字文が施されるが、無文の例(図23-4)も存在する。入組三叉文が卓越するように思われるが、他の文様もある程度存しており、特定の文様との緊密性を指摘することはできない。但し、上記以外の文様の施された例も、確認できない。

図23-1・2は、珊瑚状突起の母体と考えられる大洞B1新式の大型の装飾突起である。

1は、岩手県九戸村道地Ⅲ遺跡FⅡ-9住居址床面から出土した台付浅鉢であるが、当該住居跡が大洞B1新式の基準資料であることは、前記した通りである(種市

1983)。大型突起は、頂部の刻み目により三つの高まりをなしており、左右の形状は非対称で、内面には半楕円文・渦巻文・半円文、外面には円文・矩形文・半遮光器文と、それぞれ異なった文様が施されている。内外面両端の半円形の文様は、人面の眼部を表現したようにも受け取れる。類似資料としては、岩手県大洞貝塚出土のリボン状突起（図23-12）が挙げられるが、顔面を表した珊瑚状突起は、図23-4・13に指摘することができる。珊瑚状突起を配した土器の一部には、人面付土器としての系列が存した可能性が想定されよう³⁹⁾。

2は、岩手県平泉町泉屋^{いずみや}遺跡出土の台付鉢である。泉屋遺跡は、瘤付土器第Ⅲ段階～大洞B1新式が主体の遺跡で、大洞B1式以降の土器（同C2式～A式を僅かに含む）を殆ど含まず、大洞B1式の型式内容を規定する上で、重要な遺跡となっている（濱田ほか2003）。2の大型突起も、非対称で肉厚に作出され、内外面とも彫刻的な陰刻により曲線文様が施され、内面には巴状の陽刻部が2個、外面には1個作出される。口縁部直下には沈線、屈折部には点列帯が圍繞され、体部文様帯には円文又は楕円文と、対向する棘状陰刻が交互に施される。これは後述するように、C字文の成立に関わる文様であり、大洞B1新式に位置付けられると判断される。なお、巴状を形取った突起は、当該期の台付鉢・浅鉢に屢々散見される（図24-21）。

また、やや後出するが、「過渡的段階」～大洞B2古式の例として、山井遺跡の台付浅鉢（図19-7）を指摘することができる。大型突起の外面には縄文地文を有し、頂部は三分される。

上記した大型の装飾突起が発展して、大洞B2式に珊瑚状突起が成立したと想定される。

図23-3は、岩手県軽米町水吉^{みずよし}VI遺跡縄文第3号竪穴状遺構から出土した台付の装飾鉢である。当該遺構は、大洞B2式の一括性の高い資料と判断される⁴⁰⁾。3は突起の頂部が欠損し、全体の形状を窺うことはできないが、透かしの数から三山の珊瑚状突起と推定され、内面には連結した3個の弧状の隆線文が施される。

4は、器面が無文であるため、型式は判然としないが、口端に配された突起は、大洞B1古式の弁状突起⁴¹⁾の形状を留めており、古く位置するものと推察される。正面は、緩い高まりにB突起が3個？配されたのみで、筆者

の定義する珊瑚状突起の要件は、満たしていない。しかしその直下の内面には、顔面を表現したと思われる隆線文様、更にその左右に、菱形の透かしが穿たれており、珊瑚状突起の一種と見なすことができるであろう。

以上の2例が、珊瑚状突起の初出例として、大洞B2古式に位置するものと考えられる。

珊瑚状突起はその高まりと透かしの数から、三つの形態に分類することが可能であろう。

一山珊瑚状突起 一つの高まりから構成されたもので、図23-8・9・13・16?、図24-19が相当する。三角形の透かしが穿たれる例（図23-8・9）が多く見られるが、小さな穿孔のみの例（図23-13、図24-19）も存在する。

二山珊瑚状突起 二つの高まりから構成されたもので、図23-10・15、図24-17・18が相当するが、曲田I遺跡例（図12-71、図15-4）も含まれる。円形透かしが通例であるが、透かしを持たない例（図12-71、図23-15、図24-18）も存在する。

三山珊瑚状突起 三つの高まりから構成されたもので、図23-5～7・11・14が相当するが、曲田I遺跡例（図15-3）も含まれる。円形や三角形の透かしが穿たれるが、三日月形（図15-3）や中央のみの穿孔（図23-14）も見られる。三つの高まりからなるため、B突起が多数配置され、珊瑚状突起の中では最も華美となる。

珊瑚状突起を発展的に捉えるならば、一山→二山→三山と、次第に数を増して行く過程が想定される。しかし母体となる大型の装飾突起に、既に三つの高まりが存しており（図19-7、図23-1）、図式的な発展段階を認めることはできないであろう。

その成立においては、晩期初頭の装飾突起だけではなく、三山状突起やB突起等からの発展も想定される。図24-22は、大洞B2式の台付浅鉢であるが、先に注口土器で見たように、三山状突起の中央が分割されたような大振りのB突起が一对、更にその両脇にも副次的なB突起が配される。このような三山状突起又はB突起等が誇張されることで、珊瑚状突起に至る系統の存在も想定されよう。

また、大洞B1新式には、正面性を持った突起が穿孔された装飾鉢（図24-20）や台付浅鉢（図24-21）が、屢々認められる。この突起が大型化し、装飾が加えられるこ

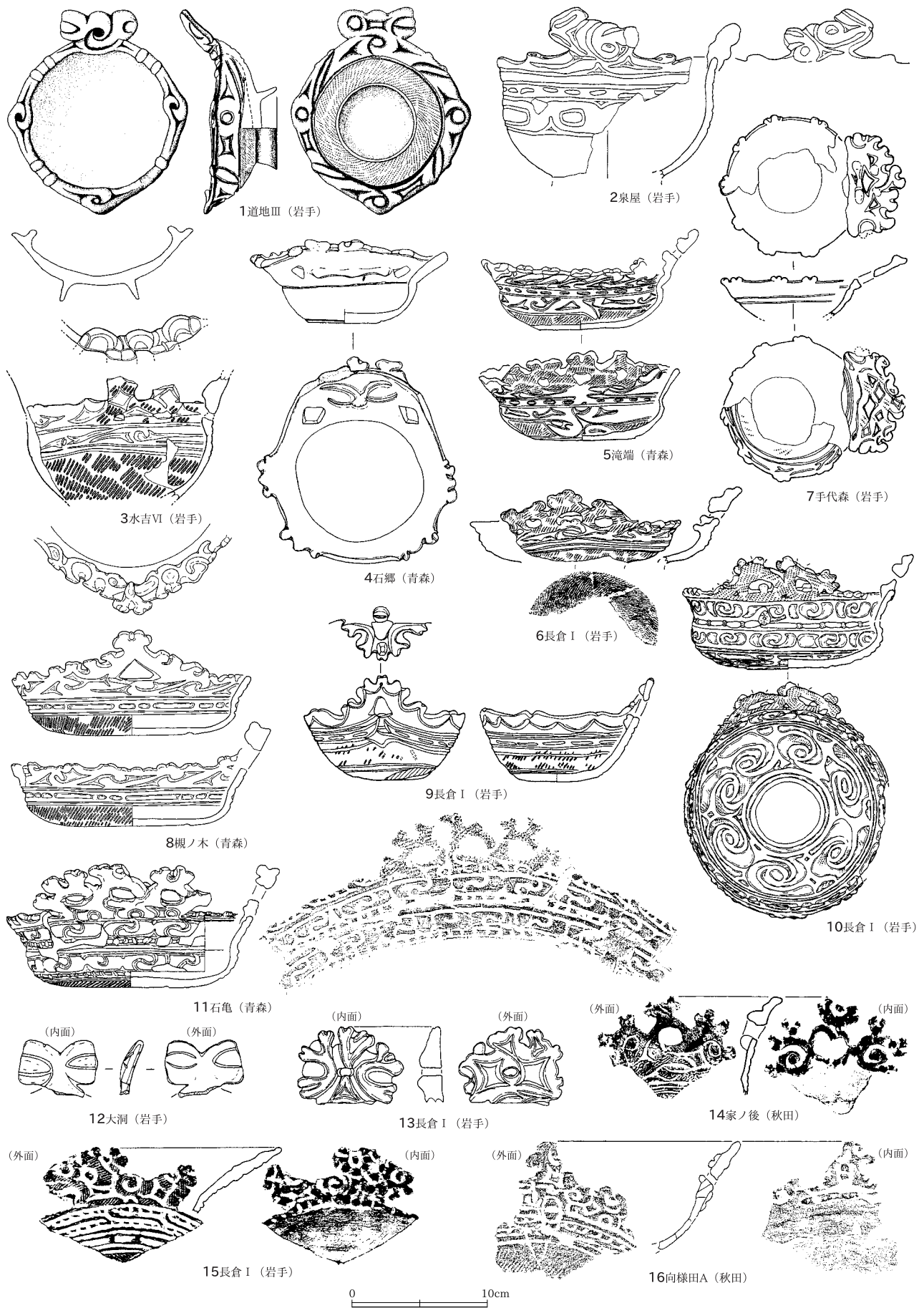


図23 珊瑚状突起集成図 (1)

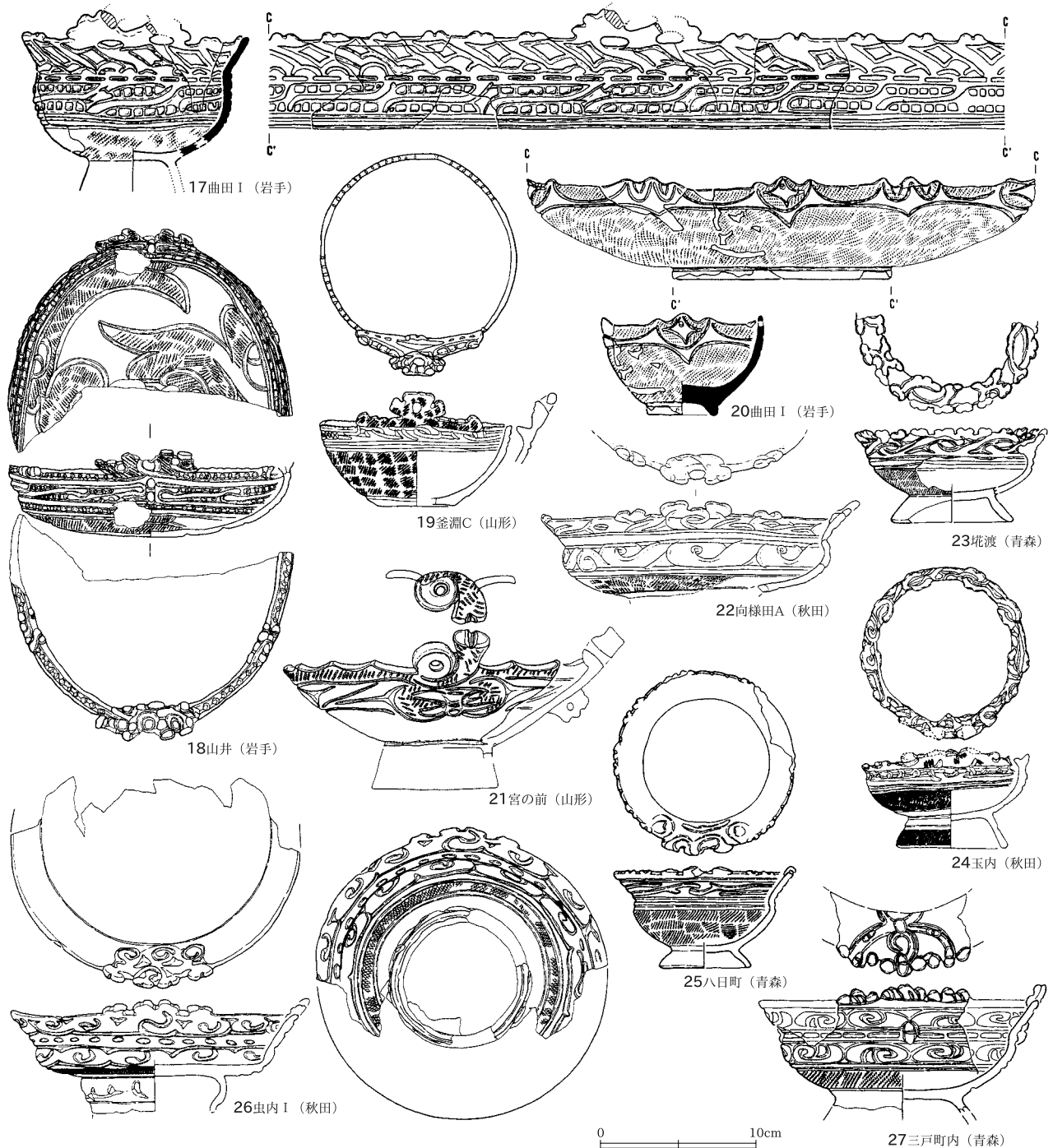


図24 珊瑚状突起集成図（2）

とで、珊瑚状突起に発展した可能性も否定できない。珊瑚状突起には、小さな穿孔を伴う例（図23-13、図24-19）も存しており、小さな穿孔の系譜は、脈々と受け継がれていたことが想定される。小さな穿孔は、図37b-9の大洞B2新式の台付浅鉢の正面突起にも、認められる。

上記したように、珊瑚状突起は一つの系統から成立したのではなく、幾つかの装飾要素が結び付くことで急速に発達を遂げた、と見なすべきかもしれない。

珊瑚状突起の外面には、縄文地文を施した例が多く見られる。縄文地文のみの例（図15-4、図23-5・6・10、図24-19）も存するが、菱形・矩形文様の例（図15-3、図23-3・7・14・15）が卓越する。縄文地文は、後期以来のI文様帯の痕跡を珊瑚状突起に留めた、と見なされるのかもしれない。

珊瑚状突起の内面は、隆線と陰刻による曲線的な文様で構成される例が多い。口内に粘土紐を貼付した文様は、大洞B2式～BC2式の台付浅鉢に屢々散見される。図

24-25は、正面性を有する大振りのB突起の内面を連結する弧状の隆線で構成される。図24-22も、突起内面が肉厚に作出される。いずれも、筆者の珊瑚状突起の定義には該当しないが、関連を有する可能性が高く、図19-17、図24-26・27も同様と言えるであろう。

また、口端が厚く作出され、粘土紐による文様が全周展開する例（図24-23・24）も存在する。これ等は、晩期初頭の台付浅鉢（図23-1）の系譜を引くもので、珊瑚状突起が付される可能性が極めて高い⁴²⁾。

このように口内に付された隆線文様は、正面性を有する突起に付随するものであり、珊瑚状突起との緊密さが指摘され、珊瑚状突起が外面よりも、上面からの視点を意識して製作された器種であることの証左になるものと推察される。曲田Ⅰ遺跡でも、口内に粘土紐の文様を施した台付浅鉢（図15-13）が出土しているが、珊瑚状突起とは近縁の関係にあったと見なすべきである。

珊瑚状突起は1単位の構成であり、その周囲にB突起を圍繞した例が多く存する。B突起の種類は、1a・2a類（図23-5・7～9、図24-17）が多く、3b類（図15-3・4）も認められるが、頸部に入組三叉文や菱形（矩形）文様を施した浅鉢のB突起は、概して装飾性に乏しく、古の様相を有している。しかし、B突起4b類で構成された例（図23-11）や、細かな刻み目による小波状縁（図24-18・19）も存しており、これ等は大洞BC式に位置付けられる。

珊瑚状突起は、比較的器高の低い鉢類に多く付されており、台付浅鉢や底径の大きな平底の浅鉢が殆どであるが、特に口頸部が外傾する屈折した器形に多い。平底では、体部が強く内彎した浅鉢が顕著で、体部の下端が底部に入り込む例（図23-8・10・11）も認められる。また台付浅鉢では、高台の付け根直下の凸彎はあまり発達せず、他の台付浅鉢よりも装飾性に乏しい傾向にある。前記したように、側面性よりも上面性を意識した器種であることに由来するのであろうか。

曲田Ⅰ遺跡でも言及したが、珊瑚状突起を配した鉢類には、縦長のB突起の貼付が屢々認められる。外面においては、屈折する器形に限定され、珊瑚状突起直下の屈折部に、1単位のみ付される（図12-71、図15-4、図23-10・16、図24-27）。珊瑚状突起の内面中央の頂部に付された例（図15-3・4、図23-8・9・16、図24-

27）も多く、双方に認められる例（図15-4、図23-16、図24-27）も存在する。屈折部に付された縦長の突起は、後続の大洞BC2式～C1式の台付鉢（図38-大洞C1下段）に継承されると想定され、大洞BC1式の注口土器の肩部や、壺形の頸・肩部の貼瘤に先んじて、大洞B2新式の浅鉢に生成したと考えられる。珊瑚状突起との緊密性を有する属性として特記されるが、その遡源は、大洞B1式の正面突起直下の横位穿孔の瘤状突起（図24-21）に、求められるように思われる。

先に珊瑚状突起の初現が、大洞B2古式に相当することを指摘した（図23-3・4）。図23-5～8は、口頸部に入組三叉文が施されており、これ等に後続する大洞B2新式に比定されると考えられる。形制の低平化とは対照的に、珊瑚状突起の発達を見ており、突起内面の隆線文様は弧状や渦巻状で構成され、口端のB突起は装飾性に乏しい。5の体部文様帯は、巴状文様とノ字文で構成されており、筆者は大洞B2新式に位置付けている（小林2004）。図23-9・13・14も、同様に位置付けられるであろう。

図23-10・11は、C字文を施した珊瑚状突起の浅鉢であるが、11の口端はB突起4b類で構成されており、大洞BC1式に相当する。10も、体部下半にC字文の磨消文様（後述の「Ⅲ文様帯」）が施されており、文様帯の多帯化が著しい。対向する棘状の陰刻が連結し、文様の繁縷化が認められることから、同じく大洞BC1式に位置付けられよう。

図24-17は、口頸部に矩形文様、体部に羊歯状文が施される。羊歯状文の截痕の陰刻は十分でなく、連結しない部分が存し、後述するように祖型的な様相を留めており、大洞BC1式に相当する。図23-15・16、図24-24も、同様に位置付けられよう。

図24-18・19は、共に屈折部を持たないA類の器形で、大洞BC2式に位置するものと考えられる。18は体部の磨消文様、19は口端の細かな刻み目や頸部文様帯の截痕列が根拠となる。大洞BC2式には大きな透かしは、ほぼ姿を消し、珊瑚状突起は衰退に向かい、一対の大型の突起や口内の隆線文様に、その痕跡を留めるようになる。

以上のように、珊瑚状突起は大洞B2新式～同BC1式に発達を遂げた装飾突起である。大きな高まりと透かしの数から、三つに分類され、その系譜は、晩期初頭の大型

の装飾突起に辿ることができる。しかし、正面性を有する突起類からの系譜も考えられ、複数の装飾要素が結び付くことで、成立したと想定される。B突起の集合体としての珊瑚状突起の在り方は、遮光器土偶頭頂の橋状部⁴³⁾や、香炉形土器頂部の装飾突起との相関性も考えられる。また透かしの手法は、香炉形土器や台付鉢・浅鉢の高台の透かしの手法とも、無関係ではなかったと推察される。

（6）小 結

これまで林謙作氏の研究に導かれて、口端形態や突起の消長を跡づけてきた。口端の篋状工具による小波状縁・漣状縁は、大洞B2式に盛行するが、大洞BC1式では珠紋縁が卓越し、やがて刻み目の細かな小波状縁に収斂する過程が想定される。

晩期初頭（大洞B1式～B2式）の装飾深鉢・鉢形土器には、弧線文を伴う小波状縁の独自の系譜が存在する。口端の緩い波状から、次第に間隔が密となり、篋状工具による刻み目、更に口端を縁取る構成へと変化し、大洞BC1式には、珠紋縁等に同化される過程が想定される。またこの変化に連動して、縄文地文が消失する過程も看取されることから、型式区分の指標として有用であると判断される。

また、晩期前葉の装飾深鉢・鉢形土器の口端には、B突起や三山状突起が屢々認められるが、その変化をある程度跡づけることが可能である。

B突起は大洞B2式に現出するが、当初は間隔を置いて配され、装飾性に乏しい在り方から、次第に装飾が加味されるようになり、連続的な2b・4a類や、珠紋縁と同化した大洞BC式特有の4b類への変化が想定される。

三山状突起は大洞B1新式に現出するが、注口土器正面突起との相関性を有し、段階的な変遷が看取される。B突起と同様に間隔を置いて配され、装飾性に乏しい形態から、連続的で装飾が加味された形態への変化が看取され、特に入組三叉文や入組帯状文との結び付きが強く、型式区分を行う上での指標となる属性である。

また珊瑚状突起は、浅鉢や台付鉢に固有の突起で、大洞B2古式～BC2式にかけて存在するが、大洞B2新式～BC1式に盛行する。隆盛を極める時期が限定され、口頸部文様の入組三叉文・C字文・羊歯状文・菱形(矩形)文との結び付きが強い属性である。

以上のように、口端の形態の消長を考察することで、型式区分のある程度の手掛かりが得られることを確認してきた。しかし口端の形態だけでは、型式を明確に規定するには至っておらず、他の属性との組み合わせから、型式判別が求められよう。

B 入組三叉文の種類とその消長

入組三叉文は、大洞B式に特徴的な文様であり、山内清男氏の模型図（図38）にも表されている。しかしこれまで指摘してきたように、大洞BC1式にも確実に存しており、型式を規定するメルクマールとはなり得ず、大洞B・BC式の型式区分は、困難を極めているのが実情である。このことから、型式判別に際しては出土状況が重視される傾向にあり、型式学的な検討は十分になされてきたとは言いがたいのが実情である。しかし、弁別は本当に困難なのであろうか。ここではその見通しについて、型式学的な検討を加えてみたい。

（1）入組三叉文の種類（図25）

三叉文は、その名が示すように三筋に分かれた形の沈刻文様で、東日本の縄文中期と晩期に、それぞれ独自の発展を遂げている。その形状は、曲線的な二等辺三角形又はY字状を基本とするが、正三角形や棘状等多岐にわたり、三叉文相互又は他の文様との組み合わせによって構成された例が多い。

亀ヶ岡式土器においては、その初頭に主体的な文様として確立し、晩期の開幕を告げる文様として重要視されている（山内1966）。その成立は後期後葉の瘤付土器第Ⅲ段階（金剛寺2a式）に認められるが、後期では入り組んだ構図を取ることは稀で、対置して配されるのが通例であり、晩期の三叉文へと継承される（小林1999）。

入組三叉文は、前記したように山内清男氏の1930年の模型図（図38）の中に登場する。但し、文章では「所謂入組文の一部」（山内1930）と表記されており、三叉文の呼称は用いられていない⁴⁴⁾。大洞B式の模型図資料は入り組んだ構図をなしており、大洞BC式の末端の咬み合う羊歯状文が並列されている。恰も入り組んだ三叉文を基調に、羊歯状文が成立する型式変化を考慮したかのような配列となっているが、この点について山内氏は何ら明言していない。

対置した三叉文としては、玉抱き三叉文、魚眼状三叉文、入組三叉文の呼称が存在する。しかし、研究者に

よって指示する内容が異なるため、類型化されていないのが実情であり、論議を深める上で、種別を明確にすることが求められる。ここでは、東北北半の大洞B2式の三叉文に限って類型化を試み、今後研究を進める際の指標に位置付けたいと考える。

大洞B2式に施された三叉文は、山内氏模型図資料に象徴されるように、向かい合って入り組む構図が主である。後期の三叉文は、入組帯状文等の連繫部、頸部文様帯の背向する弧線文間、また七宝繫状文様の間に挿入されるため、複数の三叉文が向かい合って配置される。円文や貼瘤状突起を挟んで対置した構図が多数を占めるが、鈴木克彦氏は、このような円文を中に置き挟んだ三叉文を「魚眼状文」と呼称し、三叉文でも古相に位置付けている(鈴木克彦1981)。

また玉抱き三叉文とは、通常玉を抱くようにして玉の左右に三叉状の文様を配置したものを指す。魚眼状が円文であるのに対し、玉抱きは円形刺突を囲うといった差異が存するが、魚眼状と同様に対置して配されたものや、円形刺突を巻き込んだものも含まれており、特に後者では、入組三叉文との区分が不明瞭である。

そこで筆者は、東北北半の大洞B2式の三叉文を「入組三叉文」、「魚眼状三叉文」、「波状三叉文」に三分し、更にそれぞれを細別することにした。なお細別に当たっては、煩雑となるため三叉文全体を通して類別番号を付与している。

入組三叉文 対向する三叉文の一端が中央で入り組んで、ほぼ点対称に展開するもので、咬合部は接着(1類)と未接着(2類)とに二分される。前者では、円形・楕円形・円形刺突を巻き込む形態と反転のみの形態が見られ、後者にも、一方のみ円形刺突を巻き込む形態が存する。なお、単一の三叉文だけではなく、複数の種類が組み合わされた例も存在する。

1類：左右の三叉文が、咬合部で接着したもの。

1 a類：咬合部が円文を巻き込んだ構成で、楕円文と交互に配された例もある(図25-1・2)。

1 b類：咬合部が楕円形に巻き込んだ構成で、2 a類と近縁の関係にある。山内氏模型図資料が典型となる(図29-1)。

1 c類：咬合部が反転した構成であるが、円形刺突を巻き込んだものも同類と見なされる(図25-4)。

2類：左右の三叉文が、咬合部で接着しないもの。

2 a類：咬合部が接着せずに入り組む構成で、咬合部が楕円形を呈する場合もある(図25-3)。

2 b類：一方のみの三叉文(通常右側)が円形刺突を巻き込む(図25-5)。円形刺突ではなく、一方のみの三叉文の下端が反転したり、渦巻くものも含まれる。

入組三叉文では、円文を巻き込む形態が古く位置付けられる。大洞B1新式においては、魚眼状三叉文と共に、円形を巻き込む入組三叉文が看取される(図21-2、図23-1)。図25-1のように円文と楕円文の交互の配置は、入組帯状文の系譜を引くものである。この円文が次第に円形刺突に収斂し、咬合部が反転した1 c類(図25-4)に変化したことが想定される。また咬合部が離れることで、2 b類(5)の成立に至る過程も考えられる。

曲田I遺跡EⅢ-011住居跡を見ると、1 c・2 a・2 b類に相当する三叉文で占められており、1 a類は一切認められない。このことは、入組三叉文1 c・2 a・2 b類(図25-3~5)が、三叉文の中でも新しい様相であることを示唆しており、大洞B2新式では定型化が進行する。

魚眼状三叉文 円文・円形刺突・円文に類する文様の左右に、三叉文が対称に配されたもので、中心文様を囲うように配され、三叉文の末端が中央文様に接することは稀である⁴⁵⁾。また、両端の開いた三叉文や鼓形モチーフが向き合った例も含まれる。

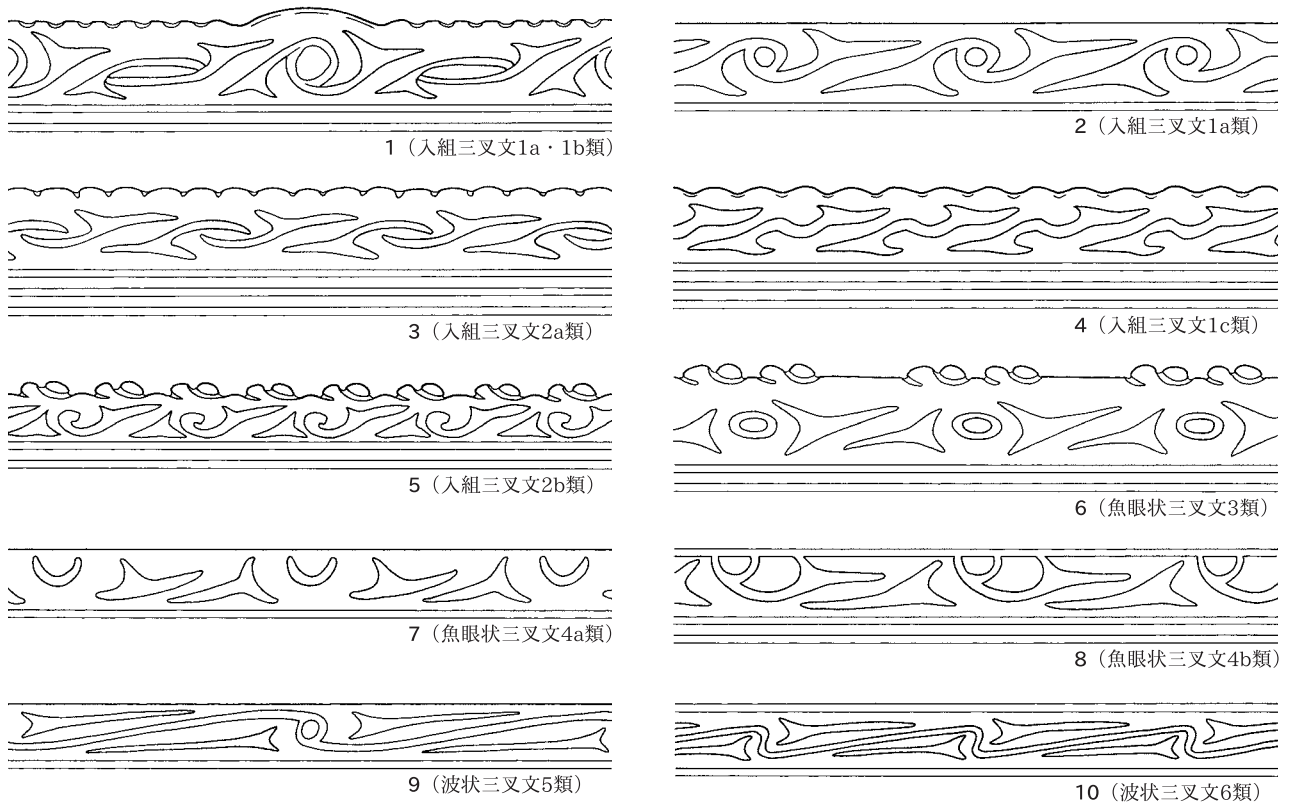
3類：中心文様が円文で、それを囲うように三叉文が配置される(図25-6)。中心文様が楕円文の場合も存する。

4類：中心文様が半円文で、それを囲うように三叉文が配置される。三叉文の末端の接着の有無で、二分される。

4 a類：下閉じの半円文を囲うように三叉文が配置されるが、三叉文は通常左下がりである(図25-7)。

4 b類：下閉じの半円文を囲うように三叉文が配置されるが、右側の三叉文の下端が伸びて半円文に接する。三叉文は通常左下がりで、屈折する装飾鉢・浅鉢の体部文様帯に施される(図25-8)。

魚眼状三叉文の円文は、先行型式の入組帯状文の連繫部に相当する。従って、上下から入り組む弧線文(左右からの場合も)や渦巻文を囲う三叉文も、同類と見なさ



1：屋敷台（岩手）、2・6：泉山（青森）、3・4・7：曲田Ⅰ（岩手）、5：是川中居（青森）、8：滝端（青森）、9：道地Ⅲ（岩手）、10：八幡（青森）

図25 大洞B₂式における三叉文の種類

れ、鈴木克彦氏が指摘したように古の様相に位置付けられる。円文の在り方は、入組三叉文の1a類とも共通しており、近縁の関係にあったと推察される。従ってその消長は、軌を一にしているように思われる。

4類とした半円文を囲う三叉文は、大洞B1新式の台付浅鉢等にも認められる。しかし、三叉文は沈刻でなく、幅を有し、磨消文様となる。大洞B2式の4a類は、この系譜を引くと考えられるが、大洞B2新式では屈折する鉢類の体部に多く認められ、特に4b類は、体部のノ字文又は連弧文との緊密性を有している（小林2004）。曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡では、台付鉢（図12-77～79）や浅鉢（図15-2・11）に認められる。

波状三叉文 横位に連続する入組帯状文の系譜を引くもので、連繫部を中心に上下に対向した三叉文が施される。入組帯状文は形骸化しており、その区画沈線が1条のみで構成され、右上がりの波状となることから、「波状三叉文」と呼称した。その系統を辿るならば、魚眼状三叉文と同類に行き着くことになる。

5類：入り組む波状文の波頭部を囲うように、三叉文が配される（図25-9）。

6類：入り組まずに反転する波状文の波頭部を囲うよ

うに、三叉文が配される（図25-10）。

波状三叉文は、横位連繫の入組帯状文（横S字状文）の系譜を引いており、斜線は本来2本の構成である。しかし形骸化が進み、1本の波状の沈線で描出されるが、連繫部を残す1類が古く、波頭部が反転する2類は新しい様相と見なされる。しかし、東北北半には類例が少なく、曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡には認められない。

当然、上記以外の形態の三叉文も存在する。しかし、東北北半に限って見た場合その数は少なく、これ等の変種として捉えられるものが殆どである。

上記したように、大きな円文を中心とした配置が古の様相であり、円文から円形刺突への推移が想定され、大洞B2新式の入組三叉文では、1b・1c・2a・2b類にほぼ収斂される。この内1b類と1c類が、後述するように末端の咬み合う羊歯状文へと変化を遂げる。

（2）大洞BC1式の入組三叉文（図26）

入組三叉文が、羊歯状文とある時期併存の関係にあったことは、前記した曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡出土の装飾鉢（図12-84・85）からも確実である。筆者は、入組三叉文と羊歯状文が併存の関係にあった時期を大洞BC1式に位置付けている。

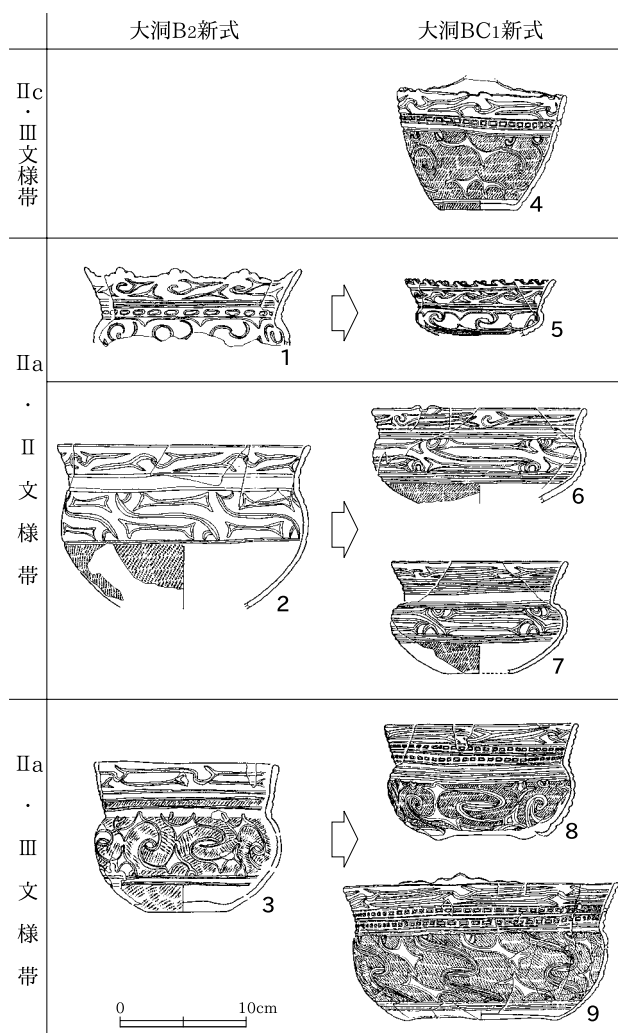


図26 青森県八戸市八幡遺跡出土装飾鉢の型式変化

先に林謙作氏は、大洞BC1式の三叉文の特徴として、単位数の増加を指摘した。単位数の増加は、文様同士の密着した在り方を意味しており、三叉文においては、背向する主軸線が近接して、等間隔に配される傾向になる。その結果、挟まれた陽刻部が一定の形状を保持するようになり、文様の浮文化とも一体の関係にある。この文様の浮文化は、羊歯状文の成立と密接に関わってくる。

大洞B2新式の入組三叉文は、1b・1c・2a・2b類(図25)にほぼ収斂されるが、この内、咬合部が接着する1b類と1c類は、短沈線等が付加されることにより、末端の咬み合う羊歯状文へと変化を遂げる(図29)。しかし、両類の全てが羊歯状文に変化する訳ではなく、従来の形状を保持したまま、大洞BC1式に至る例も存在する(図12-85)。従って、大洞BC1式においても、入組三叉文は先行型式と同様に、1b・1c・2a・2b類にほぼ限られることが想定される。

魚眼状三叉文は、本来古の様相であり、衰退の一途にあると見なされる。しかし、4類とした半円文を囲う類型は、屈折部を持つ装飾鉢の体部文様として、また羊歯状文2類に連なる鉤爪状モチーフとして、当該期に継承される。また、台付鉢・浅鉢の高台の透かし文様として、特定部位に残存する可能性も指摘される。

波状三叉文については、波頂部が反転する6類のみが、大洞BC1式に継承され、波頂部が入り組む5類は、姿を消す。三叉文は伸長化が著しく、密着して配される傾向にあり、波頭部で対向した三叉文が入り組む場合もある(図26-9)。

青森県八戸市八幡遺跡^{やわた}の資料(藤田ほか1988)を基に、大洞B2新式～同BC1式への型式変化を具体的に見てみたい。

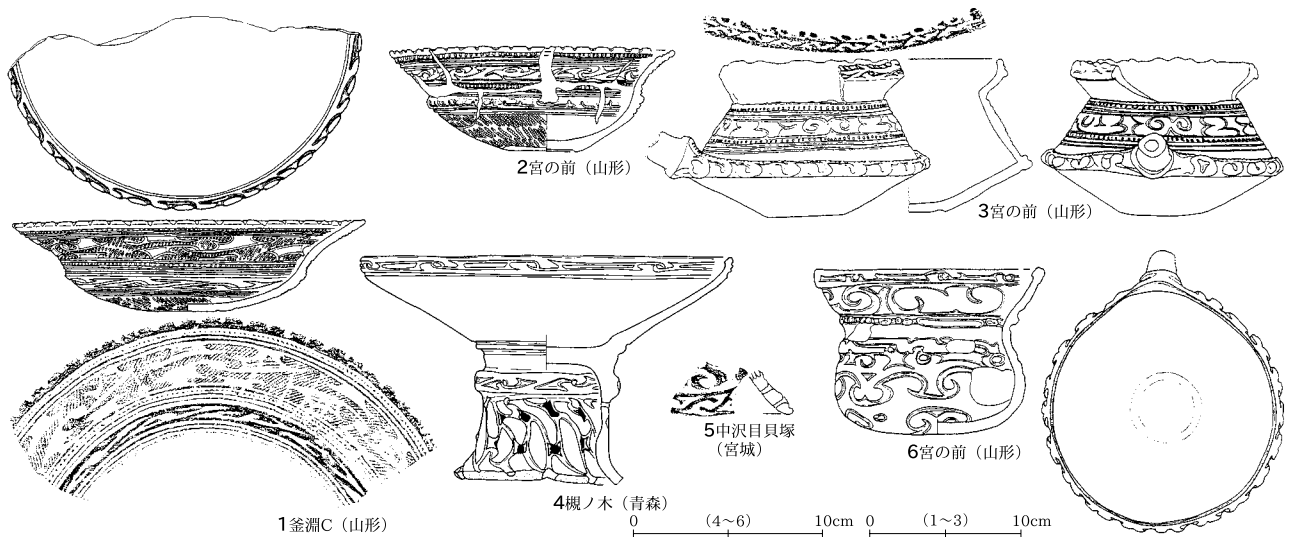
図26が、八幡遺跡捨て場から出土した装飾鉢である。同遺跡の捨て場出土の土器については、曲田I遺跡と同様に一括性を評価する研究者が大勢を占めるが、後述するように、筆者は大洞B2新式～BC1式を主体とした混在資料と見なしている。

図26は、類似した文様で構成された土器を型式別に配列したものであるが、筆者は、1→5、2→6・7、3→8・9の型式変化を想定している⁴⁶⁾。

1と5は、(口)頸部に入組三叉文、体部にC字文が施された台付鉢である。1は、口端の三山状突起と体部の上下から大きく巻き込むC字文の構成から、大洞B2新式に位置付けられる。一方5は、口端のB突起4a類、頸部の密着した入組三叉文、体部のX字状の浮文を意識した施文手法から、大洞BC1式に比定され、型式変化が指摘される。

2と6・7は、口頸部に入組三叉文、体部に入組帯状文が施された装飾鉢である。2から6・7への変化を文様の繁縷化として捉えられ、6・7の文様は圧縮された在り方を示しており、7の体部文様は文様同士が連結する。体部の入組帯状文は、縄文地文が消失し形骸化が進行しており、横S字状の沈線と起・終点の半円文、それを囲う両端の開いた三叉状の文様を配することで、入組帯状文の形跡を留めている。入組帯状文が、大洞BC1式まで残存する証左となろう。

3と8・9は、口頸部に入組(波状)三叉文、体部に矩形を基調とした磨消文様(III文様帯)が施された装飾

図27 大洞BC₂式の入組三叉文

鉢である。3の口頸部の三叉文は、波状三叉文の変型で、連続する波状文ではなく、三叉文の尻が伸長して連結する。大洞BC1式では、体部の磨消文様が圧縮され、繁縷化が進行し、矩形文様の一端も連結する(8)。3の屈折部は縄文帯が巡らされるのに対し、8・9では截痕列となっており、型式変化が指摘される。文様の繁縷化の現象は、屈折部を持たない4でも確認できる。

上記したように、大洞B2新式から同BC1式への変化として、文様の繁縷化・密着化が指摘されよう。この現象は、注口土器の口縁部や肩部文様にも認められており(小林2003)、当該期土器に通有の変化であったことが推察される。口頸部に施された三叉文もその一環にあり、伸長化と密着化の傾向が看取される。

入組三叉文の同様の变化は、仙台湾～宮城県北部(北上川下流域)にも散見され⁴⁷⁾、東北北半における共通した事象であった可能性が想定される。三叉文の密着化は、羊歯状文の成立にも密接に関わる要件であり、陽刻部を意識した施文手法への変化は、漸次的ではあるが大洞B2式～BC1式にかけて進行したことが、指摘されるであろう。

確かに先学が指摘したように、大洞B2式と同BC1式の三叉文の判別は困難である。しかし、三叉文に対する付加的な要素や、三叉文の主軸線の伸長化・平行化・密着化といった特徴は、新しい様相と見なすことができる。また、三叉文の種類も限定される。口端形態や体部文様からの分析とを結び付けることで、型式判別がある程度可能になるものと考えられる。

(3) 大洞BC₂式の入組三叉文(図27)

単位文様⁴⁸⁾としての入組三叉文は、大洞BC1式を以て殆ど姿を消す。しかし、単体としての入組三叉文は、大洞BC2式の注口土器の注口基部直下に残存する⁴⁹⁾(小林2003)。

また地域的には、東北中部(山形県北半・宮城県北半)に限って、単位文様としての入組三叉文を認めることができる。図27が、東北中部の入組三叉文が施された大洞BC2式の例である。

1・2は屈折する平底の浅鉢で、口頸部は外反気味に開いて立ち上がる。頸部と体部に文様帯が形成され、1はⅡ文様帯に入組三叉文1c類、2はⅡa文様帯に入組三叉文1b・2a類が施される。いずれも、背向する三叉文の主軸線が近接し、一定の間隔で配置されるため、挟まれた陽刻部は、Z字状又は横S字状を呈している。

3は注口土器A類(3段構成)で、口縁部の退縮が著しく、途中で内屈して稜を持ち、内傾気味に立ち上がる。口端のB突起列の直下に、背向する主軸線を近接させた短小の入組三叉文1c類が施される。肩部も突起列と化しており、大洞BC2式でも新しい段階に相当する。

4は、青森県平内町概ノ木遺跡で出土した高坏(台付浅鉢)である。須藤隆氏によって「高坏(C₂類型)」とされた例に相当する(須藤1984)。

「高坏(C₂類型)」は、浅鉢に太くて高い台を付し、口縁部がくの字に内屈する器形で、口縁部の狭小な文様帯に、伸長した入組三叉文が施される。須藤氏はこの類型が、北上川下流域・迫川流域の仙北湖沼地帯に分布が限

定されることから、該域固有の型式として、地域色の表徴と見なしている⁵⁰⁾。4は須藤氏の言説に従うならば、仙北湖沼地帯から青森県まで、直接もたらされたことになる。夏泊半島の付け根に位置する槻ノ木遺跡は、故地である仙北湖沼地帯からは、約250mの距離にあり、亀ヶ岡文化圏内における地域間の交流を物語る好適な資料として、評価されている(小林2001)。

4の内屈した狭小の口縁部には、一端が入り組む矩形文様が施されるが、伸長した入組三叉文の在り方と共通している。また、高台の付け根直下の凸彎部にも、円形刺突を巻き込む入組三叉文1c類が施される。

5も「台付鉢C₂類型」の高台と思われるが、その下端(裾部)に、穿孔を巻き込む入組三叉文1c類が施される。

6は丸底の屈折する装飾鉢であるが、狭小な口縁部に両端の開いた入組三叉文が配される。4の口縁部の矩形モチーフが圧縮され、陰刻化したものと見なされよう。

当該期の入組三叉文は、注口土器の口唇部や高台の裾部のような特定部位に、残存が確認できる。しかし、いずれも三叉文の形状を留めるものの、横位に等間隔に配置されるのみで、陽刻部を形成するための従属的な陰刻にし過ぎない。狭隘な区画内に等間隔に配され、Z字状又は横S字状の陽刻部を浮き出させた描出手法は、大洞B2式の陰刻主体の文様からは変質しており、寧ろ羊歯状文の一種と見なすべきかもしれない。

(4) 小 結

入組三叉文と羊歯状文が、一時期併存していたことは確かであろう。しかし三叉文を詳細に検討してみると、大まかではあるが、ある程度の新旧の特徴を指摘することも可能である。

魚眼状三叉文や入組三叉文では、円文を囲う類型が古い様相であり、大洞B2新式では4種類の入組三叉文と、2種類の魚眼状三叉文にほぼ収斂される。

また、大洞B2新式～BC1式にかけては、背向する三叉文の主軸線が密着する傾向にあり、陽刻部が強調されると共に、短沈線等の付加的要素も加味され、入組三叉文1c類は羊歯状文へと発展する。しかし、大洞BC1式においても入組三叉文は併存しており、三叉文の主軸線の伸長化・平行化・密着化の傾向が指摘される。

大洞BC2式では、入組三叉文は注口土器の注口基部直下に限定される。一部の地域(東北中部)では、単位文

様として残存する。しかし、陽刻部を描出するための副次的な役割へと変化を遂げる。

C 羊歯状文の成立について

羊歯状文は、シダ類植物に類似した構成から、その名が付されている(杉山編1928a)。山内清男氏は、亀ヶ岡式土器の6細別を提示した際、「所謂羊歯状文」が大洞BC式に固有の文様であることを明かにしている(山内1930)。従って筆者は、羊歯状文の存続する期間を大洞BC式の範囲と規定しており、その文様の成立期を大洞BC1式と見なしている。

以下では、羊歯状文の成立の過程を種類別に検討することで、大洞BC1式における羊歯状文の在り方を明確に行きたい。

(1) 芹沢長介氏の系統観

1960年に刊行された『石器時代の日本』の中で、芹沢長介氏は大洞B式と同BC式を統合して、「雨滝式」^{あまたき}を提唱した(芹沢1960)。「雨滝式」設定の経緯や内容については、高橋龍三郎氏(高橋龍三郎1981・99)や金子昭彦氏(金子1992b)の論考に詳しいので、詳細は割愛するが、その根拠は、以下の3点に集約されよう。

- ①層位的に三叉文と羊歯状文の共存→同一層位
- ②つねに結合された形で発見→単純遺跡の欠如
- ③文様系統の違い→後期末の入組文からの系統

山内清男氏が、1930年に亀ヶ岡式土器の6型式を設定した際、大洞BC式(未命名の一型式、大洞B-C中間の型式)は、層位的に確認された訳ではなかった。当該資料が大洞貝塚に僅少であったため、当時良好な資料が得られていた、秋田県藤株遺跡や青森県是川中居遺跡の資料を参考に、大洞貝塚B地点の土器と同C地点の土器との中間的な位置を持つ土器として、型式学的に導出された経緯があった。

①は、型式設定における層位的裏付けの欠如から、岩手県雨滝遺跡(1958年第2次調査)で、大洞B式と同BC式が同一層から出土した調査所見を踏まえて発せられた疑義であった。②は、両型式が常に結合された形で発見され、単独の遺跡から別々に発見された例がないことが根拠となった。そして③は、「三叉状入組文が羊歯状文に変化する」(芹沢 前掲, p.206)という系統観を否定し、両者の文様の系統が異なることから、三叉文と羊歯状文は同じ時期に別々の器形に描かれた一組の文様であると

結論づけられた。

羊歯状文には、末端の咬み合うものと、咬み合わないものの二種類が存在する。大洞BC式を設定した山内清男氏は、入組三叉文から前者の羊歯状文への系統的な変化を想定したことは、模式図（図38）の配列からも自明であろう。一方、芹沢氏はその系統観を否定し、後期末の入組帯状文からの系統を求めた⁵¹⁾。

今日的知見では、入組三叉文と羊歯状文が、ある時期併存していたことは確実である。また、咬み合わない羊歯状文については、芹沢氏の系統観を支持する研究者が多数を占めるが、咬み合う羊歯状文は、後述するように入組三叉文を基礎として成立したことに、疑問の余地はない。大洞B・BC式を巡る近年の研究の動向は、芹沢氏の意図した統合化の歩みとは裏腹に、細分化を指向しており、否定的な見解が大勢であると言えるであろう。しかし、「雨滝式」が投じた①～③の波紋は、未だ解決には至っておらず、今日の課題として残されている。

果たして、芹沢氏が「雨滝式」の根拠の一端に置いた後期末の入組帯状文からの系統観は、肯定できるものなのだろうか。筆者は懐疑的に受け止めているが、以下では、それぞれの羊歯状文の成立過程について、検討を加えてみたい。

（2）羊歯状文の種類と特徴

三叉文は、陰刻部が基本的な意匠となる構成であるのに対し、羊歯状文は、陰刻によって浮き出された陽刻部の形状を基本的な意匠とした構成である。この差異から、芹沢氏は「影と影とによってあたらしい文様が生ずるということは考えにくい」として、ネガ文様である三叉文が、そのままポジ文様である羊歯状文に移行すると捉えた系統観に対し異議を唱え、両者を系統の差と見なした（芹沢1960）。

羊歯状文には、末端の咬み合うもの（**羊歯状文1類**）と、咬み合わないもの（**羊歯状文2類**）の2種類が存在することは、前記した通りである。前者は、横S字状のモチーフが入り組んで連続して配されており、左傾が通例である。一方後者は、横S字状のモチーフが並列して連続的に配されており、右傾が通例となる。いずれも狭小な文様帯が形成され、横位に連続して展開する性格を持ち、横帯区画線と横S字状の主軸線との間に、刻み目が加えられる。なお前者には、珠文状の装飾を伴うZ字状

又はK字状の文様（Z字文・K字文）も含まれており、上記以外の羊歯状文については、鈴木克彦氏の論考に詳しい⁵²⁾（鈴木克彦1980）

村田章人氏による羊歯状文の施文原則 羊歯状文の施文原則については、村田章人氏の詳細な研究がある（村田2000）。村田氏は「羊歯状文系の文様が入組三叉文系の文様と決定的に異なる点は、羊歯状文ではすべての沈線（陰刻部分）が、何らかの形で他の沈線（陰刻部分）と連結する」という点である」ことを前提に、羊歯状文の三つの施文原則を明らかにしている。

①**施文要素の連結原則（連結原則）**：羊歯状文系モチーフでは、文様主軸線並びに付加的要素を構成するすべての沈線が、何らかの形で他の沈線に連結する。これにより陽刻部の形状が閉塞され、単位性を持つようになり、また珠文状の陽刻部が完成する。

②**施文要素の等間隔配置原則（等間隔配置原則）**：入組三叉文を基調とする陰刻部分の空間的な位置関係を一定に保つことで、陽刻部の形状を一定に保つことが可能になる。

③**陽刻部形状の保持原則**：羊歯状文系モチーフを器面上に安定的に展開する場合、陽刻部の形状を一定に保ち、陽刻部を等間隔に配置することが必要になる。それには陰刻後の「磨き」や「潰し」の手法が必須となる。

上記した①～③は、羊歯状文系モチーフの陽刻部が単位性を持ち、関与性を帯びるために欠かせない一体の関係にある。これ等の原則を適用することで、羊歯状文の成立過程を説明することが容易となり、村田氏は羊歯状文成立期における地域的な差異に言及した。

即ち、東北北部の「祖型的」な羊歯状文には「連結原則」が弱く（若しくは認められず）、「等間隔配置原則」が強くは働いていない。一方仙台湾～気仙沼周辺では、「連結原則」と「等間隔配置原則」が発達しており、付加的要素として矩形モチーフが多用される。上記の結果から、羊歯状文系モチーフは多角的に成立し、極めて短期間のうちに東北一円に融合する形で確立したことが、想定されている。

羊歯状文の施文における諸要素が、概念化されたことにより、地域的・時間的変異を比較する上での有効な分析手段となっている。特に①と③の原則は、東北北半の

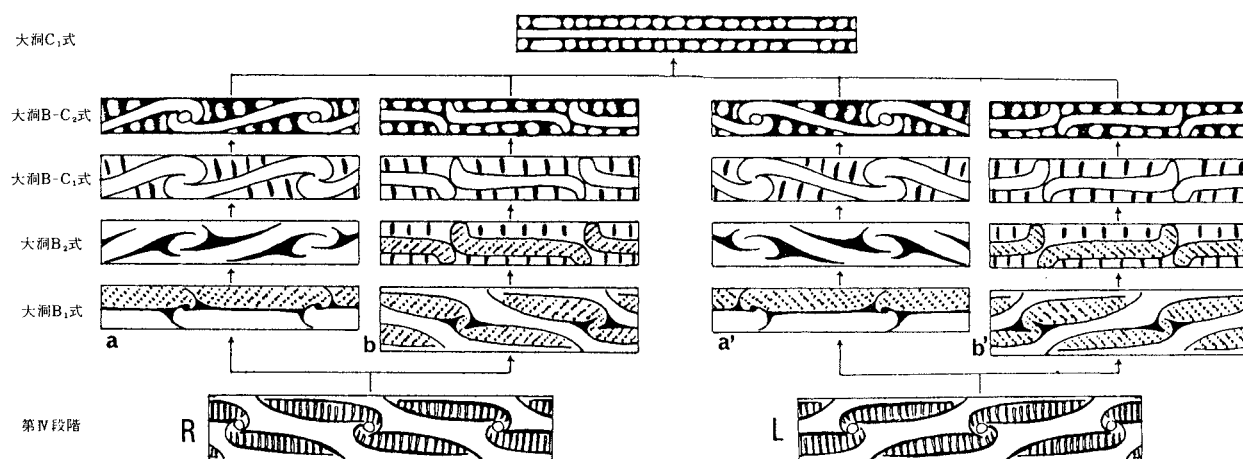


図28 安孫子昭二氏による羊歯状文の種類と変遷 (安孫子1980)

大洞BC1式の型式内容を規定する上で、重要な指標と見なせるものであり、筆者の大洞BC式の細分は、同氏の研究に負うところが大きい。

安孫子昭二氏による羊歯状文の成立過程 羊歯状文の成立過程については、安孫子昭二氏の研究が著名である(安孫子1980・82)。安孫子氏は末端の咬み合う羊歯状文と、咬み合わない羊歯状文の両系列とも、後期末の入組帯状文から分派し、それぞれ独自に変化したことを模式図を用いて解説した(図28)。

末端の咬み合う羊歯状文については、入組帯状文から派生した玉抱き・入組三叉文に、点列状の刻み込みが加えられることで羊歯状文に至るプロセス(図28-a)、一方咬み合わない羊歯状文については、入組帯状文が密着し、縄文地文が消失して、刻み込みが加えられることで羊歯状文に至るプロセス(図28-b)が、それぞれ明示された。いずれも右傾の入組帯状文を基本的なモチーフとして、当初は刻み目も粗く不細工な構成から、器形的小型化に伴い洗練された構成への変化、そして最終的には「珠子文」に収斂される過程が想定されている。

安孫子氏の示した変遷図は、芹沢長介氏の系統観を具体的に図式化したと評価されるものであろう。芹沢氏は、羊歯状文の種類を特定することはなかったが、安孫子氏は、両類共に入組帯状文の系統にあることを例示した。安孫子氏は、大洞B・BC式の細分案をいち早く提示し(安孫子1969・80)、「雨滝式」に対して懐疑的な見解を表明した研究者であったが、皮肉にも芹沢氏の系統観の具体的な検証に寄与したと言えるであろう。安孫子氏の示した変遷観は、今日においても研究者の支持を得ており、影響力を行使している(鈴木克彦1980、金子1992b、

大塚1999)。

(3) 末端の咬み合う「羊歯状文1類」の系統

末端の咬み合う羊歯状文は、鈴木克彦氏の「羊歯状文A類(波状羊歯状文)」(鈴木克彦1980)、安孫子昭二氏の「羊歯状文a類」(安孫子1980)、須藤隆氏の「羊歯状文1類」(須藤ほか1995)、村田章人氏の「入組む羊歯状文」(村田2000)に相当する。筆者は、須藤氏に倣って「羊歯状文1類」と呼称する。

その成立については、山内清男氏は具体的に述べていないが、模型図の配列から入組三叉文からの系統的な変化を意図していたと想定される。この系統性は、既に1928年刊行の『日本原始工芸』の文様模式図の配列から、編者の杉山寿栄男氏が暗示していた、と読み取る指摘もなされている(鈴木克彦1980)。杉山氏にプライオリティーがあったのか、両者が別個に独立して考えるに至ったのか、今となつてはその経緯を明らかにすべくもないが、いずれにせよその系統観が、以降の研究者に踏襲されてきた経過は、芹沢氏の反論からも窺うことができる(芹沢1960)。

今日においては、羊歯状文1類を入組三叉文からの発展として捉えることが、研究者間の共通理解となっており、当該文様に限って言えば、大洞B・BC式が系統的に異なるという「雨滝式」の根拠の一端は、否定されている(高橋龍三郎1999)。

図29は、先行研究を踏まえて羊歯状文の成立過程を模式化したものである。左列は咬合部が楕円形を呈する「入組三叉文1b類」、右列は咬合部が円形刺突又は反転する「入組三叉文1c類」の系統である。1・2が大洞B2新式、3・4が大洞BC1式、5・6が大洞BC1式～BC2

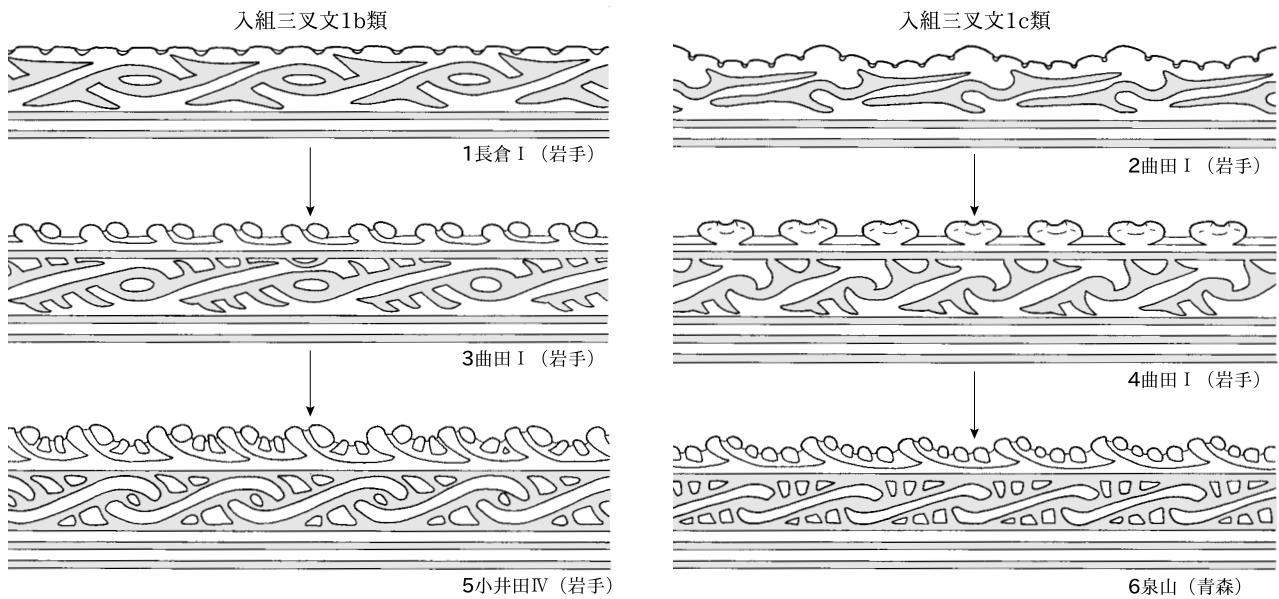


図29 羊歯状文1類の変遷模式図

式に相当する。

図29-3・4は、いずれも曲田I遺跡EⅢ-011住居跡から出土した例（図11-35、図12-84）であるが、入組三叉文に付加的な沈線が加えられ、三叉文の一端と同化している。先の村田章人氏の施文原則を適用するならば、「等間隔配置原則」は認められるものの、「連結原則」と「陽刻部形状の保持原則」は遵守されず、陰刻が上下端の区画沈線と連結せずに、文様帯の中を浮遊する形をなしている。

図29-5・6はその発展形態で、陰刻部が区画沈線と連結し、陽刻部の形状が一定に保たれ、単位性を持つことで、羊歯状文の成立に至る。村田氏の施文原則が、遵守された結果である。

図30には、祖型的な羊歯状文1類を施した装飾深鉢・鉢形土器を集成した。

図30-1・2は、入組三叉文2類の上端に刻み目が付加された例である。口端に刻み目が加えられ、一部は三叉文の主軸線と連結している。羊歯状文1類の最も原始的な形態を取るもので、大洞B2新式～BC1式にかけての過渡的様相を呈する。

図30-3・4は、入組三叉文の上下端に刻み目が付加された例である。3の口端には連続した三山状突起が配され、4は口端の刻み目と主軸線が連結して珠紋縁を呈しており、いずれも刻まれる陰刻が細く、陽刻部が大きく作出される。大洞BC1式に比定されるであろう。

図30-6～8は、入組三叉文の上下端に更に刻み目が

付加され、三叉文の一端と刻み目が同化して、羊歯状文の形状を整えつつある。刻み目は細く、磨きや潰しが顕著でなく、陽刻部が大きく作出される。

図30-5は、入組三叉文の末端に矩形モチーフが付加された例で、一方の主軸線の末端は、下端の区画線と連結する。矩形モチーフは東北中部以南に盛行するが、本例には「等間隔配置原則」が強く働いておらず、陽刻部の形状は一定に保たれていない。

図30-9・12・13は、羊歯状文1類と同2類が同居した例である。9・13はⅡa文様帯に羊歯状文1類、Ⅱ文様帯に同2類、12は口縁部に同1類、頸部に同2類を配している。口頸部の文様は、いずれも入組三叉文に矩形モチーフを付加した在り方で、口端の刻み目と同化し、9はZ字文の初現的形態を呈している。これ等の資料から、羊歯状文1類と同2類が、ほぼ同時期に成立していたことが推測される。

図30-10は、Ⅱa文様帯に羊歯状文2類、Ⅱ文様帯に入組三叉文を共有した装飾鉢である。体部の入組三叉文は1c類で、文様帯の上下端（上端は無文帯が介在）には、截痕列が圍繞される。文様の詳細は判然としないが、三叉文の背向する主軸線は、短く密着しているようにも窺える。

図30-14～16は、Z字文（K字文）を施した初現的な例である。14は、図22-27と同一個体と思われる。大洞BC1式に特有の三山状突起3b類を配し、Ⅱa文様帯には、入組三叉文に横S字状沈線と短沈線を付加すること

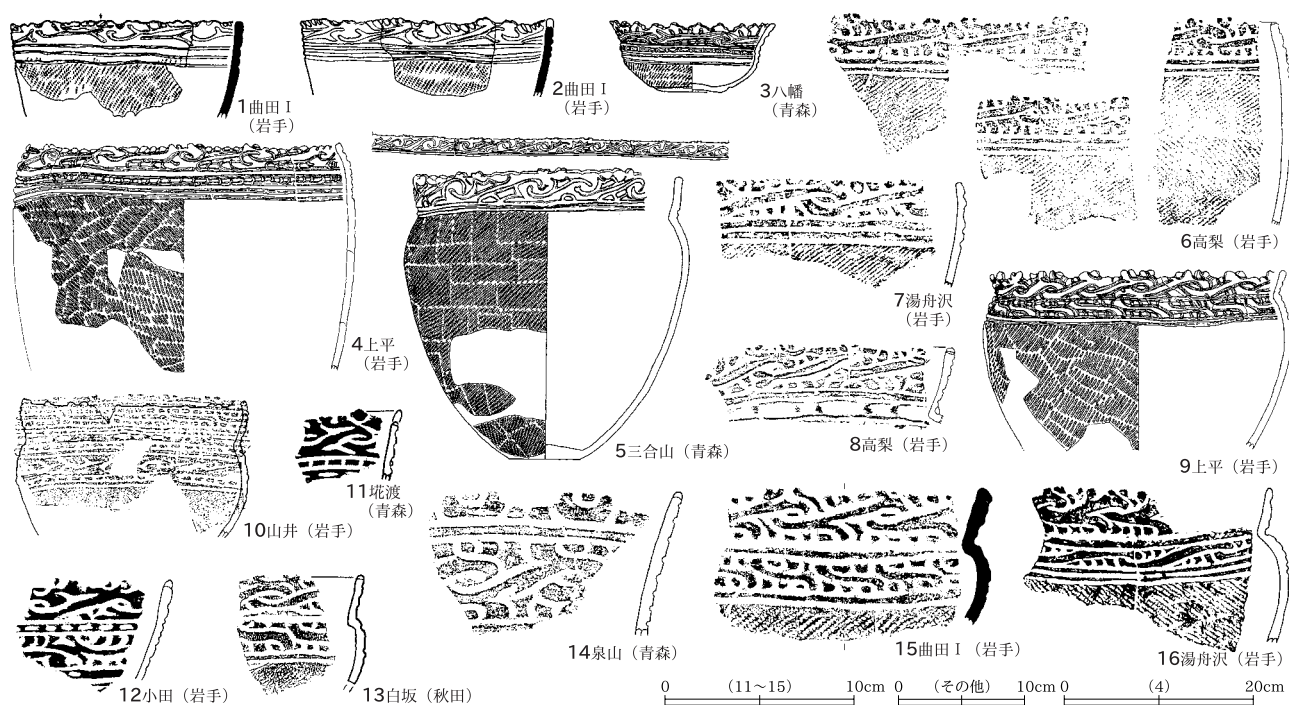


図30 末端の咬み合う祖型的な羊歯状文（羊歯状文1類）

で、寸詰まりのZ字文の陽刻部が形成される。15・16は、入組三叉文の上半は口端の刻み目と連結し、下半のみ横S字状沈線と短沈線が付加され、L字状の陽刻部が形成される。15の体部には羊歯状文2類、16の体部には同1類が施される。いずれも入組三叉文の形状を留めており、大洞BC1式に位置付けられよう。

図22-26も、Z字文の初現的形態である。口端の三山状突起は、泉山遺跡例（図22-27、図30-14）と同様に3b類であるが、Ⅱa文様帯に羊歯状文1類、Ⅱ文様帯にZ字文が配される。

上記の事例から、羊歯状文の成立期にZ字文が現出していたことは、明白であろう。Z字文（K字文）は大洞BC2式、中でも終末期の注口土器に顕著な文様である（小林2003）。しかし、屈折部を持つ装飾深鉢・鉢形土器の（口）頸部文様として、羊歯状文の初期の段階に成立していたことは、注意されよう⁵³⁾。

祖型的な羊歯状文1類を見てみると、下閉じ区画が通例であり、文様は口端に露出しており、羊歯状文上半の刻み目は、口端の装飾と一体化している。但し曲田I遺跡例（図29-3・4）は、口端に突起間が平坦に削平されるB突起2b・4a類が配されるため、文様の上端は区画される。初現的な羊歯状文1類に、上端の開放された例が多く認められることは、入組三叉文の系譜を引く傍証と見なされるであろう。

羊歯状文1類の初期においては、刻まれる陰刻の数が少なく、また、村田氏の指摘した「連結原則」と「陽刻部形状の保持原則」が遵守されず、刻み目は細く、連結しない傾向が看取される。羊歯状文の主軸線も太く作出されており、「等間隔配置原則」の規制も弱かったと判断される。

曲田I遺跡EⅢ-011住居跡では、羊歯状文1類の僅少性が指摘される。僅かに、入組三叉文の形跡を色濃く残した模式図の2例（図11-35、図12-84、図29-3・4）に留まっている。入組三叉文と羊歯状文1類が、系統的に連なることが明白である以上、1類がもっと多く出土しても然るべきであるが、羊歯状文2類が卓越するということは、何を意味するのであろうか。

一つには、地域的差異に帰することができるかもしれない。東北北半部に羊歯状文1類の祖型的資料が少ないことは、図30に示した通りである。資料を広く渉猟してみたが、図示できた例は非常に限られる。矩形モチーフが卓越する東北中部以南に、その主体があった可能性も想定される。

二つ目には、羊歯状文1類と同2類の成立時期に、若干の差が存した可能性も想定される。曲田I遺跡の羊歯状文2類には、後述するように祖型的な資料が多く含まれるが、同1類よりも陰刻後の磨き等は丁寧に加えられている。図30-9・12・13の在り方も、上記の見解を支

持するように受け取れる。しかし、両類の施文手法は、先に村田氏が示したように共通するものであり、時期的な差として捉えることは、適切とは言えないように思われる。

（４）末端の咬み合わない「羊歯状文２類」の系統

末端の咬み合わない羊歯状文は、鈴木克彦氏の「羊歯状文B類（带状羊歯状文）」（鈴木克彦1980）、安孫子昭二氏の「羊歯状文b類」（安孫子1980）、須藤隆氏の「羊歯状文２類」（須藤ほか1995）、村田章人氏の「入組まない羊歯状文」（村田2000）に相当する。筆者は、須藤氏に倣って「羊歯状文２類」と呼称する。

芹沢長介氏が、後期末の扁平化した入組带状文の系譜を想定していたことは前記したが、安孫子昭二氏をはじめ、鈴木克彦（鈴木克彦1980）・金子昭彦（金子1992b）・大塚達朗（大塚1999）の各氏も同調している。一方須藤隆氏は、羊歯状文２類の成立を入組三叉文からの変化として捉えている⁵⁴⁾（須藤ほか1995）。筆者は、入組带状文に連ならない別の系譜を想定している。

図31が、筆者の想定する羊歯状文２類の変遷模式図である。但し、1→2→3と一方向に段階を踏んで変化した訳ではなく、飽くまで変化の方向性を示したに過ぎないものである。

大洞B2新式～BC1式には、図31-1に示したように右方向に突き出た幅広の鉤爪状の区画が屢々散見される。半円文を囲う魚眼状三叉文4b類（図25-8）の系譜を引くものと推測され、起点は半円形を呈し、突出部には隣接する半円文を囲うように、弧状の沈線が添えられる。また、区画内には半円文と同じ方向の弧状の沈線が付加され、矩形の大きな陽刻部が作出される。

この幅広の鉤爪状の区画が反転して、対向するように配置されたのが、図31-2である。区画内の刻み目は細く、珠文状の陽刻部の数が増すが、鉤爪状の突出部は貫通しない。この突出部同士が連結することで、図31-3に至ると想定される。

上記したように、筆者は幅広の鉤爪状の区画を点対称に反転させることで、羊歯状文２類のモチーフが出現したと想定している。この鉤爪状の区画は、B突起4b類（図10-10）にも共通し、口端の刻み目手法（珠紋縁）とも密接に関わっており、これ等と結び付くことで、急速に発展を遂げたと考えられる。以下では、具体的資料か

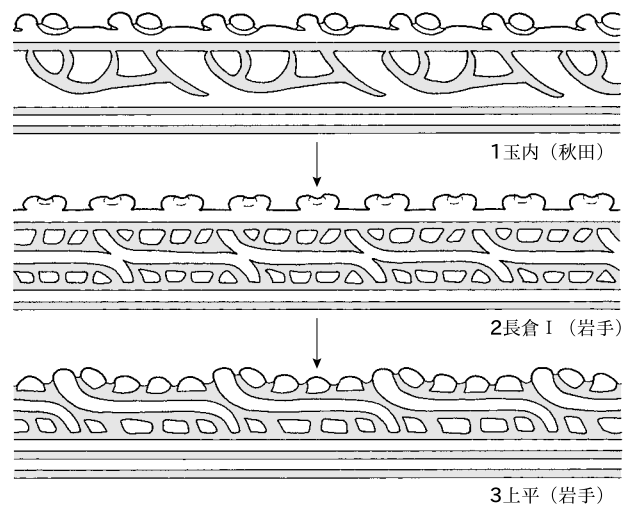


図31 羊歯状文2類の変遷模式図

ら更に解説を加えてみたい。

図32には、祖型的な羊歯状文２類を施した装飾深鉢・鉢形土器を集成した。

図32-1～6は、図31-1に相当する片側のみの鉤爪状区画の例である。1・2が大洞B2式、3～6が同BC1式に比定される。

図32-1は、青森県是川中居遺跡から出土した体部に入組带状文を施した台付の装飾鉢であるが、拓影図中央下半に、下端の区画線から右上方向に伸びた鉤爪状の区画を見ることができる。本来は入組带状文の起・終点を囲うように魚眼状三叉文が配置されるが、拓影図中央下半のみ鉤爪状と矩形の区画が、対向するように配置される。1の入組带状文のモチーフは、図26-2の体部文様に継承されると想定されるが、鉤爪状区画の初出となるもので、魚眼状三叉文との関連を窺わせる事例として重要である。

図32-2は、口端から右下方向に伸びた鉤爪状のモチーフが連続して施される。半円を囲う魚眼状三叉文4b類の形跡を留めており、体部のC字文やノ字文の在り方からも、大洞B2新式に位置付けられる。

図32-3・4・6は、1・2よりも鉤爪状区画の横幅が狭まり、単位数を増すと共に、矩形の陽刻部も小さく作出され、新しい様相を帯びている。4の口頸部文様は、口端の刻み目と結び付きつつあり、体部も幅広ではあるが、同様のモチーフで構成される。6の頸部文様帯下段には、大洞BC1式に特有の伸長化・密着化した入組三叉文が施される。羊歯状文の初現的な文様と、入組三叉文を共有した事例として重要である。いずれも、「等

間隔配置原則」や「陽刻部形状の保持原則」が弱い点で、共通する。

図32-5は、注口土器B類(2段構成)であるが、頸部文様帯に上記の鉤爪状区画を上下で対向させて配置した例である。区画内の陽刻部は3個のみで、大きく作出され、陰刻部の刻み目は細い。上下で鉤爪状区画の数に違いが存するため、対向する突出部の組み合わせが合致しないのは、「等間隔配置原則」が遵守されていない証左となるものであろう。

片側のみの幅広の鉤爪状区画内は、刻まれる陰刻の数が二つのみで、一つは半円文を形成し、残りも同一方向の弧状に加えられる。この構成は、魚眼状三叉文4b類の形跡を色濃く残すものであり、同文様と鉤爪状区画との緊密性を暗示していると言えるであろう。

図32-7は、口端突起の脇から右下向きに沈線が伸びて、鉤爪状区画が作出され、区画内は口端からの刻み目で充填される。B突起4b類に相当するが、口頸部文様帯をなしており、Ⅱa文様帯と見なされる。これに対向して鉤爪状区画が下段にも配された例が、図32-11である。従って、口端に露出した羊歯状文2類の生成に当たっては、B突起4b類や珠紋縁の確立と軌を一にするものであったことが指摘されよう。

図32-8~15が、点対称の鉤爪状区画が配された例である。片側のみの例に比べると、刻み目の数が増し、羊歯状文の形状を整えつつあるが、「連結原則」と「陽刻部の保持原則」は弱く、羊歯状文2類の確立には至っていない。

図32-16~25は、刻まれた陰刻が細く、陽刻部が大きく作出された例である。いずれも村田氏が指摘した施文原則は強く作用しておらず、稚拙な羊歯状文となっている。16~18・23~25は、隣接する羊歯状文との間に隙間が存しており、三叉状の陰刻(25)や矩形・五角形の陽刻部(17・18)の介在する例も散見される。

図32-26~29は、羊歯状文の主軸線の陽刻部に縄文地文を有する例である。安孫子昭二氏は、入組帯状文から羊歯状文への変遷過程において、縄文地文を有する羊歯状文の段階を想定したことは前記した(図28)。しかし資料を渉獵してみると、該当する資料の数は極めて少ないのが実情である。横S字状の主軸線や珠文状の陽刻部が太く作出されており、縄文地文を持つ例が、古的様相で

あることは確かである。しかし段階を設定するには、あまりにも資料が薄弱であるように思われる。

図32-30~34は、一見すると定型的な羊歯状文2類のように窺える。しかし、村田氏の施文原則を適用するならば、「連結原則」や「陽刻部形状の保持原則」が弱く、古的様相を留めている。30は、Ⅱa文様帯が発達した台付深鉢であるが、「連結原則」が遵守されていない。31~34は、珠文状の陽刻部が大きく作出されており、34はその数が3個と少ない。31・32・34のように、口端に露出した羊歯状文の場合、大洞BC2式との判別は困難であるが、珠文状の陽刻部の形状やその数も、判断材料になり得ることが想定される。

祖型的な羊歯状文2類には、主軸線の陽刻部の横幅が短く、刻まれる陰刻の数の少なさが指摘されよう。その初期においては、区画内に刻まれる陰刻は2~3個に過ぎず、鉤爪状区画の伸長に伴い、刻み目も増える傾向が看取される。主軸線の短小化は、羊歯状文1類を共有した資料からも裏付けられる(図30-9・13・15)。羊歯状文2類の祖型は、刻み目が細く、陽刻部が大きく作出され、その形状も一定ではなく、羊歯状文1類と共通した描出手法となっている。

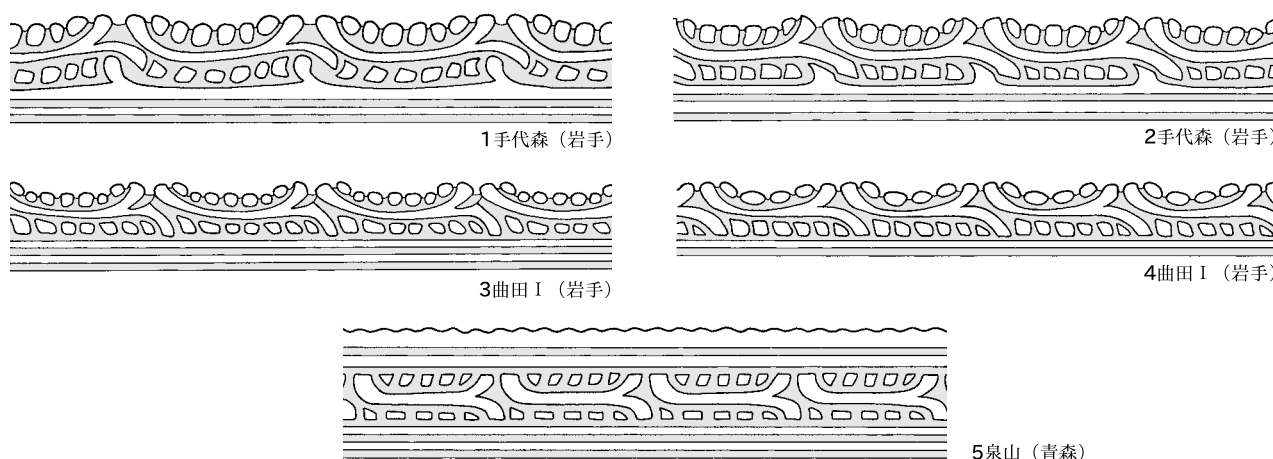
祖型的な羊歯状文2類が施された深鉢・鉢形土器の器形を見ると、Ⅱa文様帯で構成された、屈折部を持つB類が卓越する。一方、口縁部が短く外折した例(後述する新生Ⅱc文様帯)は認められない。羊歯状文1類においても同様であり、大洞BC1式にはⅡa文様帯の発達が、特徴として指摘される。

また羊歯状文2類には、口端に露出した下閉じ区画も多く存するが、両閉じ区画が顕著に認められる。下閉じ区画の場合、羊歯状文2類は口端の珠紋縁やB突起4b類と一体と化す。一方両閉じ区画の場合は、口端が珠紋縁で構成された例(図32-22)も存するが、B突起が圍繞された例が多く、B突起2b類(図32-9・27)、同3b・3c類(図32-3・6・26)、同3d類(図32-17)同4a類(図32-33)が認められる。

大洞BC式の中には、鍵の手状と珠文状の陽刻部で構成された、即ち羊歯状文2類の上半のみの構成が存在する。当該文様が、大洞C1式の碗形や台付鉢に多く認められることから、羊歯状文の退化型式と見なされている(安孫子1980、鈴木克彦1980)。しかしその系譜は、鉤爪



図32 末端の咬み合わない祖型的な羊歯状文（羊歯状文2類）



1・2：羊歯状文手代森型1類、3・4：羊歯状文手代森型2類

図33 「羊歯状文手代森型」の文様模式図

状の区画や、B突起4b類に求めることができ、大洞BC1式の中にも認められる(図11-49・83、図32-7・22)。その初期においては、鉤爪状区画の横幅が短く、粗大な珠文の構成が通例であり、入組帯状文の系譜に連ならないものと判断される。当該文様を施した土器の存在は、筆者の系統観を補強するものであろう。

祖型的な羊歯状文2類には、羊歯状文起点の右脇や終点の左脇が半円形に作出された例が、多く認められる。入組帯状文の系譜を想定すれば、入組帯状文の起・終点の形骸化と解釈することも可能である。一方、入組帯状文の系譜を直接引かないまでも、図26-2→6・7の型式変化で指摘したように、文様の繁縷化による陰刻文様の連結の可能性もない訳ではない。

筆者はこれまで説明してきたように、鉤爪状区画からの系譜を想定している。それには、隣り合う羊歯状文の起点と終点が、沈線のみで画されることが、必要条件となる。但し少数ではあるが、前記したように間隙が介在する例も存している。起・終点を持つ入組帯状文は間隔を置いて配置され、右傾となる例が殆どである。また入組帯状文は、大洞BC1式まで残存する(図26)。上記から、羊歯状文2類に入組帯状文の影響が皆無であったとは、断言できない。しかし、入組帯状文は大振りな構成が通例であり、その系統を明確に示す資料の存在も、認め難いのが実情である。入組帯状文の間接的な影響関係の存した可能性は否定できないが、羊歯状文2類に直接連なることはなかった、と筆者は理解している。

筆者が想定する羊歯状文2類の系統は、芹沢長介氏の系統観を否定するものである。筆者は鉤爪状の区画にそ

の系譜を求めたが、遡源は魚眼状三叉文に辿り着くことになり、羊歯状文1・2類共に、三叉文の系譜にあることを指摘したことになる。両類の系譜を三叉文に求めた点では、内容的には異なっているが、須藤隆氏の見解を支持したとも言えるかもしれない。

(4)「羊歯状文手代森型」について

曲田I遺跡のEⅢ-011住居跡では、末端の咬み合わない二叉の特徴的な羊歯状文の装飾深鉢が出土している(図11-9・10・12)。その特徴は、口端に2個1対のB突起が配され、各B突起の中央から伸びた弧状の陰刻が連結され、区画の上端が刻まれることで、珠紋縁が形成される。また二叉の主軸線を作成するため、B突起間の谷部に三角状の陰刻、そして弧状の主軸線の下段にも、左上方向に突出した鉤爪状の区画が彫り込まれ、それ等の一端が連結することで、末端の咬み合わない二叉の特徴的な羊歯状文が形成される。上記した羊歯状文は、岩手県盛岡市手代森遺跡(佐々木ほか1986)に顕著に認められることから、筆者は「**羊歯状文手代森型**」と呼称している。

図33が、羊歯状文手代森型並びにその関連資料の模式図である。1・2が「羊歯状文手代森型1類」、3・4が「羊歯状文手代森型2類」であるが、手代森遺跡では1類、曲田I遺跡では2類が主に出土している。その差異は、B突起間の直下で、主軸線の陽刻部が入り組むかどうかにある。即ち、1類が入り組む又は巻き込むのに対し、2類は入り組まない。この差異が地域的なものなのか、時期差を表しているのか判然としないが、入組部の有無を除くと、類似した描出手法であることから一括し

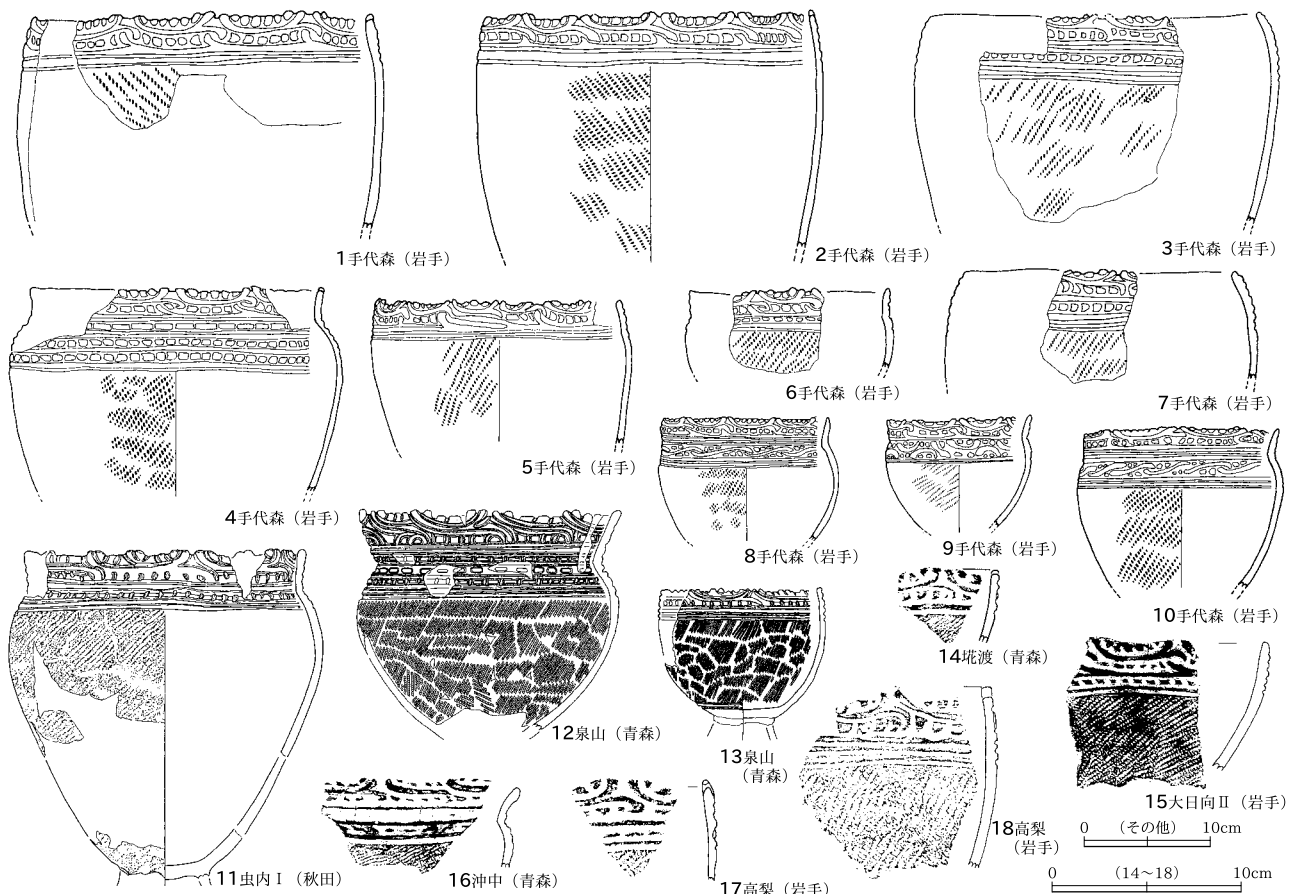


図34 「羊歯状文手代森型」集成図

ている。しかし、先に定義した「末端の咬み合わない二又」という表記は、1類には不適切となろう。

図34が、羊歯状文手代森型の集成図である。1～10が手代森遺跡出土の資料であるが、1～6・8・9には入り組みが認められ、羊歯状文手代森型1類に相当する。口頸部が直上したA類の器形だけではなく、屈折したB類にも存している。同1類に相当する例は、手代森遺跡以外では、僅かに曲田I遺跡(図11-10)や岩手県大日向II遺跡(図34-15)、同前田遺跡(図53-47)に認められるに過ぎず、その他の資料は、羊歯状文手代森型2類に相当する。曲田I遺跡の2類は、全てA類の器形であったが、1類と同様にA・B両類の器形が存在する。

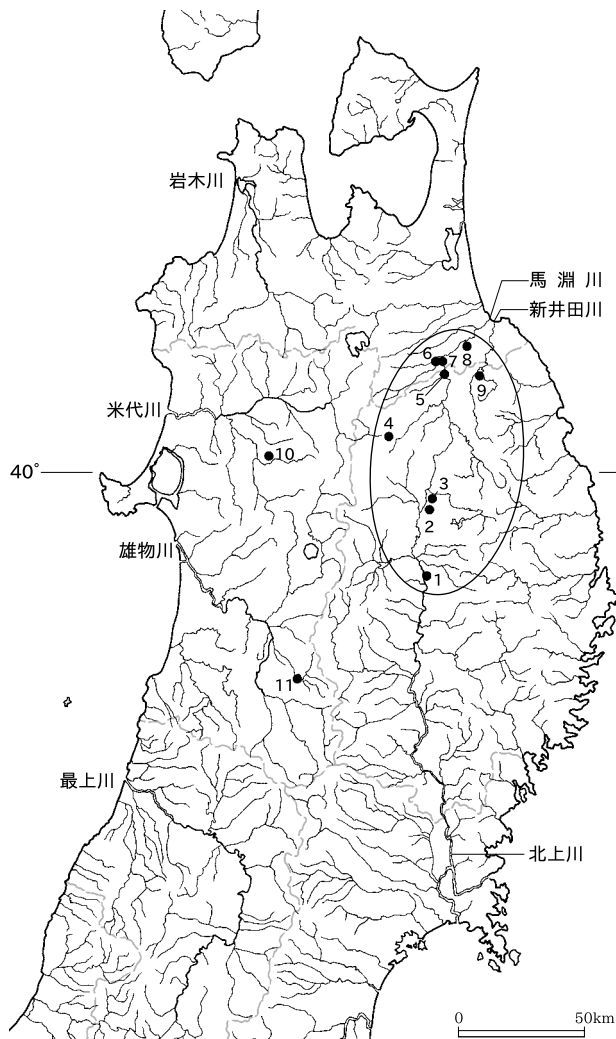
図34には、大洞BC1式～BC2式の資料が含まれている。この内11・12・18は、刻まれた陰刻が細く、陽刻部が大きく作出されることから、大洞BC1式に比定されよう。11・12には、IIa文様帯が発達しており、屈折部に結節沈線が囲繞され、体部文様帯は持たないか又は無文帯のみとなる。11は「連結原則」と「陽刻部形状の保持原則」が弱く、12は主軸線下端の右側に、半円形の陽刻部が作出されており、古の様相と見なされる。手代森遺

跡例(4)は、羊歯状文手代森型1類で、体部に截痕列を巡らすB類の装飾深鉢であるが、11・12と同様に屈折部に点列を巡らせており、大洞BC1式に比定される可能性も否めない。

図32-36は、突起中央の谷部に三角状の陰刻が加えられ、鉤爪状の区画と連結しており、羊歯状文手代森型に類似した構成をなしている。刻まれた陰刻は細く、数も少ないことから、大洞BC1式に位置付けられる。

図32-35は、口端にB突起4b類、口頸部の下段に入り組んだ矩形文様が配されるが、矩形の区画内が刻まれる。口端がB突起4b類で、末端が隣接する突起の直下に及ぶため、主軸線の末端は二又状をなさないが、羊歯状文手代森型1類の生成に関連を持つ資料として、指摘しておきたい。本例は、村田氏の施文原則が遵守されておらず、大洞BC1式に比定される。

上記したように、羊歯状文手代森型2類は、既に大洞BC1式段階に確立していたと見なされる。同1類も存していたものと想定されるが、今のところ明確な資料を見出すことはできない。恐らく図34の内、4?・11・12・18を除く資料は、大洞BC2式に位置付けられるであらう。



1: 手代森、2: 前田、3: 高梨、4: 曲田Ⅰ、5: 雨滝、6: 沖中、
7: 泉山、8: 埤渡、9: 大日向Ⅱ、10: 向様田A、11: 虫内Ⅰ

図35 「羊歯状文手代森型」の出土遺跡分布図

う。曲田Ⅰ遺跡例(図11-9・10・12)は、珠文状の陽刻部が大きく作出されており、大洞BC1式に比定されると思われるが、大型の器形のためか、刻み目は多く加えられる。

羊歯状文手代森型は、口端に露出した下閉じ区画が原則である。口端の装飾が一体となり、下段の鉤爪状区画が結び付くことで生成した文様である。従って当該文様は、入組带状文の系譜を引くものではないと考えられる。仮に、上端が画された両閉じ区画の場合には、図33-5の文様が想定され、羊歯状文手代森型とは近縁の関係にあったと見なされるであろう。

図35は、羊歯状文手代森型を施文した土器を出土した遺跡の分布図である。秋田県虫内Ⅰ遺跡を除くと、北上川中～上流域(手代森・高梨・前田遺跡)、馬淵川下～上流域(埤渡・沖中・泉山・雨滝・曲田Ⅰ遺跡)、新井田川

中流域(大日向Ⅱ遺跡)の比較的規模の大きな遺跡で出土しており、岩手県北部～青森県東南部にかけた地域が、主な分布域であったと推察される。手代森遺跡に際立っているが、多量の大洞BC式が報告された曲田Ⅰ遺跡では、EⅢ-011住居跡の3例の他に、もう1例を加えるのみである⁵⁵⁾。

上記したように、羊歯状文手代森型は地域的に限定された文様である。大洞BC1式～BC2式に認められており、文様モチーフだけで型式を特定することは困難である。しかし、極めて特徴的な羊歯状文であることから、型式名を付与して、注意を喚起しておきたい。

(5) 彎曲部に特有の羊歯状文

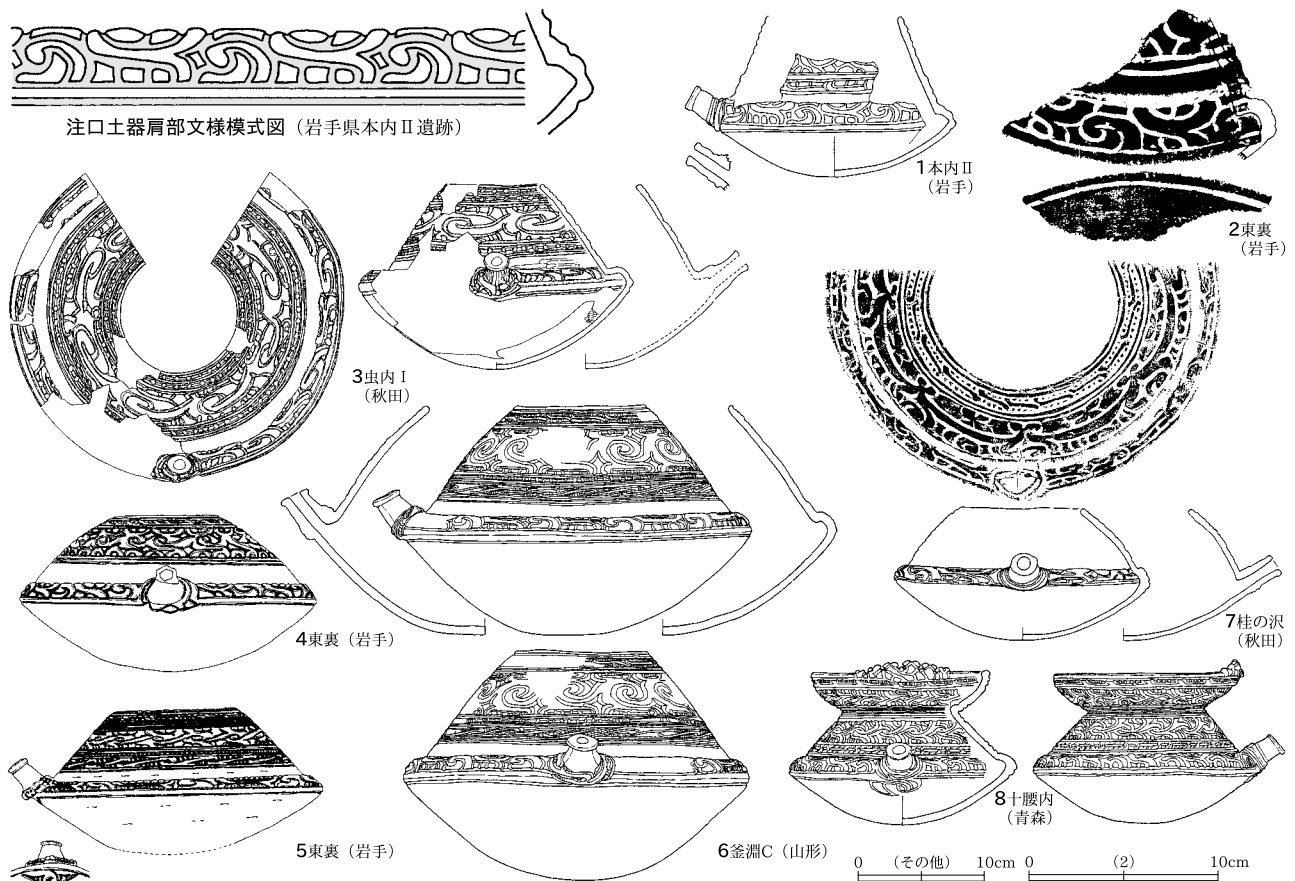
前項で紹介した末端が二叉に分岐した「羊歯状文手代森型」に関連して、彎曲部に特有の羊歯状文を指摘したい。主に注口土器の肩部に施された文様であるが、大洞BC1式～BC2式に認められる。

図36が、彎曲部に特有の末端が二叉に分岐した羊歯状文の模式図並びにその集成図である。下閉じの弧状の区画と左上に突出した鉤爪状の区画が、上下で対向して配され、主軸線の末端が二叉となるように、右隣に矩形(菱形)の区画が配される。矩形文様の右端からは、下から上に巻き込んで反転して再び下に戻る構図の陰刻が加えられ、入り組んだ弧状の陽刻部が作出される。対向した弧状と鉤爪状の区画内には、陰刻が刻まれるが、全体的に陰刻は深く彫り込まれ連結し、丁寧に磨かれるため、陽刻部は立体的に浮き出ている(図36)。

上記の文様は、大洞BC1式の注口土器(図36-1・2)に、既に認められる。大洞BC1式では肩部文様帯が上下で幅を持つため、文様は上下に広く、刻まれた陰刻は細く、陽刻部は幅広に作出される。また矩形文様の反転部の上端にも、矩形の陽刻部が描出される。

大洞BC2式では、肩部文様帯の狭小化に呼応して文様も圧縮され、矩形文様の反転部上端の矩形の区画は消失する(図36-3・7)。矩形文様の反転部が深く陰刻され、囲まれた陽刻部が横位のB突起風の高まりとして表現される場合もあり、肩部の突起列の前駆の様相をなすことになる(小林2003)。

当該文様は、曲田Ⅰ遺跡の装飾鉢(図12-83)の体部にも認められる。曲田Ⅰ遺跡例は屈折部直下の体部上半の狭小な内彎した区画内に、上記の羊歯状文が施されて



1・2：大洞BC1新式、3～8：大洞BC2式

図36 注口土器肩部に特徴的な羊歯状文

いる。陰刻部は細く、陽刻部が大きく作出され、形状も一定でないことから、「等間隔配置原則」と「陽刻部形状の保持原則」が遵守されていない。大洞BC1式の注口土器に、既に当該文様が確立していることから、本例も大洞BC1式に位置付けられよう。なお、曲田Ⅰ遺跡例の矩形文様の反転部上端には、大洞BC1式の注口土器に指摘した矩形区画が認められる。また大洞BC2式の例になるが、雨滝遺跡の装飾鉢（図40-4）の体部にも、類似した二又の羊歯状文が施されている。

上記したように、彎曲の顕著な注口土器の肩部に特有の二又の羊歯状文は、内彎する装飾鉢の体部にも写し込まれている。注口土器の肩部と装飾鉢の体部との相関性を示す事例として、指摘しておきたい。

（6）小 結

大洞BC式は、羊歯状文によって規定されており、羊歯状文の存続した期間が、同式の範囲と見なされるであろう。羊歯状文は祖型的な構成から、次第に洗練された丁寧な作出、そしてその終末期には、斜線直線化した構成に至る過程が、想定されている⁵⁶⁾。これ等の内、祖型的

な羊歯状文が認められる段階が、大洞BC1式に相当すると思われる。祖型的な羊歯状文については、村田章人氏によって概念化された「羊歯状文の施文原則」を適用することが有効であり、筆者はこの原則を満たさない資料を祖型的な羊歯状文と見なし、大洞BC1式に位置付けている。

羊歯状文は、末端が咬み合う羊歯状文1類と、咬み合わない羊歯状文2類とに二分される。前者の系統については、入組三又文の系譜を引くことで、研究者間の共通理解が得られている。一方後者については、芹沢長介氏以来、後期末の入組带状文に系譜を求める見解が、根強く支持されてきている。しかし筆者は、鉤爪状の区画や口端の装飾からの系譜を私考しており、更には、その遡源が魚眼状三又文に辿れる可能性を提示した。従って、芹沢氏が「雨滝式」の根拠の一端に置いた文様系統は、否定される公算が高いように思われる。

大洞BC1式においては、先の二種の羊歯状文の他にも、複雑化した羊歯状文の萌芽を認めることができる。Z字文は、羊歯状文1類と緊密な関係にある。また、地域

的に限定される「羊歯状文手代森型」や、注口土器の肩部に特徴的な末端が二又となる羊歯状文も、大洞BC1式期に既に認められており、これ等の文様は曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡の資料にも、見出すことができる。

同じ土器の中に、入組三又文と羊歯状文が施された例は、極めて少ない。曲田Ⅰ遺跡例(図12-85)が著名であるが、山井遺跡例(図30-10)や、三又文の上・下端に截痕列を巡らせた例(図30-11)を指摘するに留まっており、羊歯状文2類が同居した場合、入組三又文には短沈線乃至は矩形モチーフが付加されるのが通例である(図30-9・12・13)。このことは、羊歯状文1類が入組三又文を出自とした文様であり、同じ文様帯の中で系統的に発展したことを窺わせる証左、と指摘されるであろう。

村田章人氏は、羊歯状文1類に関連を持つ矩形モチーフが付加された例が、仙台湾～気仙沼湾周辺に顕著に見られることから、羊歯状文のモチーフが多角的に成立した可能性を指摘している(村田2000)。東北北部の祖型的な羊歯状文を見た場合、「等間隔配置原則」が羊歯状文1類に強く作用するのに対し、羊歯状文2類には弱い傾向が看取される。村田氏が指摘したように、施文原則に関わる差異を地域の変異に帰するならば、両類が異なった地域で出自したと見なすことも可能であろう。東北北部における祖型的な羊歯状文1類の僅少性も、暗示的である。しかし図30に示したように、東北北半部にも系統的に連続する資料が存しており、その評価は今後の課題として保留しておきたい。

曲田Ⅰ遺跡を報告した鈴木隆英氏は、同遺跡出土の羊歯状文施文の土器に対して、以下の特徴を指摘していた(鈴木隆英1985)。

- ①口唇そのものが羊歯状文を構成する要素として重視されている。
- ②齒列(筆者の截痕列)や羊歯状文の列は、概して粗い。
- ③葉脈部分が幅広で水平に延びてから両端で強く曲がった形態のことが多い。

鈴木氏は、岩手県内の^{まくまえ}蒔前遺跡や^{こだ}小田遺跡との比較から、曲田Ⅰ遺跡例が「重厚でいかにも粗形的な印象をうける」として、古い要素を留めていることを指摘した。大洞B式から同BC式への変遷を漸移的と捉えており、

大洞BC式の細分を示唆した内容とも受け取れる。口端への露出が顕著なこと、刻まれる陰刻が細いこと、主軸線が幅広に作出されるといった特徴は、前述してきたように大洞BC1式の羊歯状文の特徴であり、正鵠を射た指摘であったと評価されるものであろう。

D C字文の系統について

「C字文」は、上下で対向する棘状・三角状陰刻と、渦巻文や上下で入り組む弧線文等が交互に配置された文様を指すもので、陰刻によって縁取られた陽刻部が、C字状又はX字状を呈する⁵⁷⁾。大洞B2式～BC2式にかけて盛行する文様で、特に装飾鉢や注口土器、壺形に多用される。曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡でも、C字文が施された装飾鉢・浅鉢が9点(表1、図11・12・15)、注口土器が2点(図17・18)出土している。入組三又文や羊歯状文と並んで、晩期前葉を象徴する文様装飾であるが、その消長や種類等に言及した先行研究は見当たらず、分析が進んでいないのが実情である。

当該文様に対しては、既に「X字文」という呼称が用いられている(須藤ほか1995、村田2000)。しかし、大洞C1式の磨消手法の文様にも、「X字文(x字文)」の呼称が存しており(芹沢1960、須藤1996b)、紛らわしいことから、筆者は旧稿で、「C字文」の呼称を用いた経緯がある(小林2003)。本稿でも、これに倣うことにしたい。

C字文は大洞B1新式に生成して、同BC2式まで継承されるが、以下では、その変遷の過程を模式図を用いて跡づけてみたい。図37aはC字文の模式図、図37bは模式図の典拠となった实在資料であり、それぞれの番号は符合する。

(1) C字文の種類

C字文は、上下限が画され、それぞれの区画線から対向するように彫り込まれた棘状・三角状の陰刻と、渦巻状の沈線を交互に配置した構成を基本とする⁵⁸⁾。対向した棘状陰刻を基点として、陰刻によって縁取られた陽刻部を見ると、X字状の浮文をなすが、渦巻く沈線の種類によって、X字状の末端の形状に差異が存する。多くは巴状の文様が反転した構図を取るため、筆者は芹沢長介氏に倣って、「C字文」(芹沢1960)と呼称している。

渦巻状の沈線には、上下の区画線から弧線が伸びて入り組むもの(C字文1類)と、一方の区画沈線から伸びた沈線が渦を巻くもの(C字文2類)の二種類が存して

いる。更に前者は、咬合部の形状で細分され、後者も沈線の数（単線・複線）や渦巻く方向で差異が存し、1類ではX字状の浮文が入り組む構成、2類ではX字状の浮文が横位に連続する構成が通例となる。

また装飾鉢では、頸部文様帯や体部文様帯に施され、丁寧に磨かれ、地文を有する例は稀であるが、体部の磨消文様として、C字文が配される例も認められる（図46-11・18）。

C字文は入組三叉文で指摘したように、陰刻部を基本的な意匠とした構成から、陽刻部の形状を基本とした構成への変化として捉えられ、大洞BC1式～BC2式では、上・下端に截痕列を巡らす例も多く認められる。陽刻部を意識した構成への変化は、頸部・体部文様帯の狭小化に連動した在り方であると想定される。

（2）大洞B1新式のC字文

C字文は対向する棘状の陰刻と、渦巻状の沈線の交互配置に特徴付けられるが、入り組む構成のC字文1類は、既に大洞B1新式に認めることができる。

図37a・b-1は、新潟県中野遺跡出土の台付鉢である。口端には、頂部に刺突を加えた円形の張り出しを持った突起が配され、口頸部文様帯は口端と頸部下端の区画沈線から伸びた弧線が入り組む。I文様帯が消失し、縄文地文が認められることから、晩期IIa文様帯への過渡の様相を呈している。II文様帯は上下の区画沈線から伸びた弧線が、円文を大きく巻き込む構成で、棘状の陰刻が弧線に沿って付加される。従って、棘状陰刻の頂点是对向せずはずれており、X字状の浮文は作出されない。

図37a・b-2は、山形県宮の前遺跡出土の台付浅鉢である。体部は無文であるが、高台付け根直下の凸彎部に、5単位の大きな円形の透かしとそれを上下から巻き込む弧線、更に上下で対向する棘状陰刻が交互に配され、末端が入り組むX字状の浮文が描出される。X字状浮文の交点（棘状陰刻の中間）には、瘤状突起が付された部分もある。無文であるが、高台の付け根に凸彎状の張り出しを持つことから、当該期に位置付けられるであろう。

図37a・b-3は、宮城県沢上貝塚から出土した大型の装飾深鉢A類である。口端は緩い波状縁を呈し、波底部と波頂部をそれぞれ一つおきに結ぶ二重の弧線文（弧線間は縄文地文）が配され、波頂部直下には棘状の陰刻が

加えられる。頸部文様帯は、円形刺突を上下から巻き込む二重の弧線と、対向する棘状陰刻の交互配置で構成され、一方の弧線間には縄文地文が施される。

上記した3例とも、大洞B1新式に比定されるが、東北北半の遺跡から出土したものである。このことは、C字文の遡源が該域にある可能性を暗示しており、大洞B2式になって北半域に波及したことが想定される。従って、C字文の古の様相を持つ例を東北北半に求めることはできないように思われる。但し、岩手県泉屋遺跡例（図23-2）のように、棘状陰刻と円文乃至は楕円文を交互に配置した構成は、散見される。

当該期のC字文は、棘状陰刻に主体はなく、円文又は円形刺突を中心とした構成にあり、それを上下から大きく取り巻く弧線が特徴となる。飽くまで、棘状陰刻は副次的であり、X字状の浮文は強く意識されていないように窺える。

（3）大洞B2式のC字文

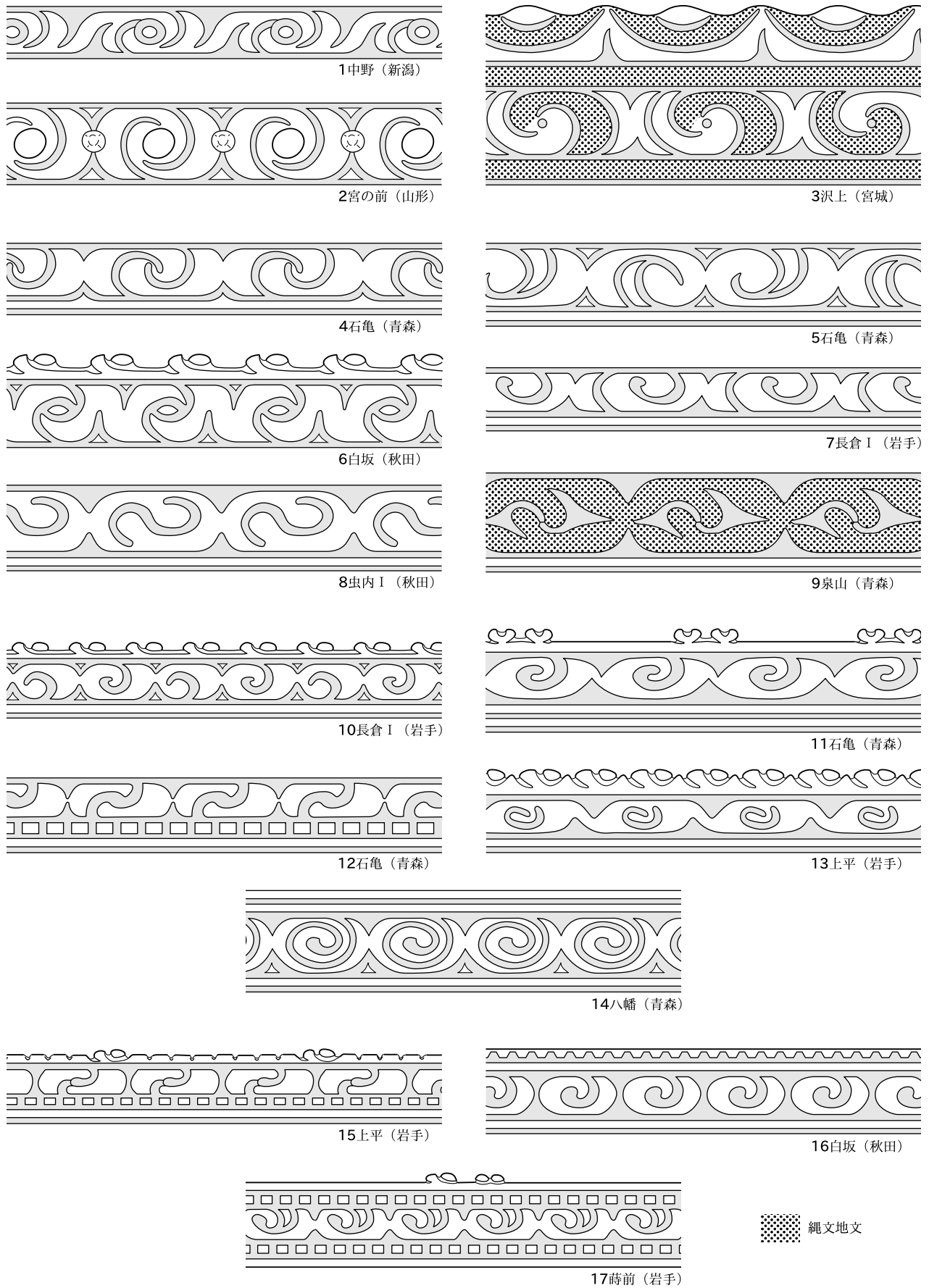
大洞B1新式のC字文は、円文を中心に上下の区画線から伸びた弧線に特徴付けられる。この点を考慮に入れるならば、上下で入り組む構成図が、古の様相と見なされるであろう。

図37a・b-4は、先にIIa文様帯に鉤爪状モチーフを有する例として、大洞B2新式に位置付けた浅鉢である。II文様帯に上下で大きく入り組む弧線と棘状陰刻が、交互に配される。陽刻部の占める割合が高く、幅広のX字状の浮文が作出される。

図37a・b-5はB類の台付浅鉢で、IIa文様帯に両端の開いた魚眼状三叉文4a類、II文様帯には棘状陰刻の左右に複線構成の渦巻文が、上下逆方向からそれぞれ施される。口頸部の魚眼状三叉文は、4の鉤爪状モチーフに酷似しており、大洞B2新式に比定されよう。

図37a・b-6は、村田章人氏が羊歯状文の施文原則を踏襲した実例として挙げた装飾鉢である（村田2000）。IIa文様帯には、4と同様に上下で大きく入り組む弧線と、棘状陰刻が交互に配されており、咬合部は楕円形を呈している。口端にはB突起4a類が配され、新しい様相を帯びているが、C字文は先行型式（1～3）の形跡を留めている。

図37a・b-7はB類の装飾鉢で、II文様帯は上端の区画線から伸びたJ字状の短沈線と、左側を包み込む上下



1～3：大洞B1新式、4～9：大洞B2式、10～14：大洞BC1式、15～17：大洞BC2式

図37a C字文の種類と変遷模式図

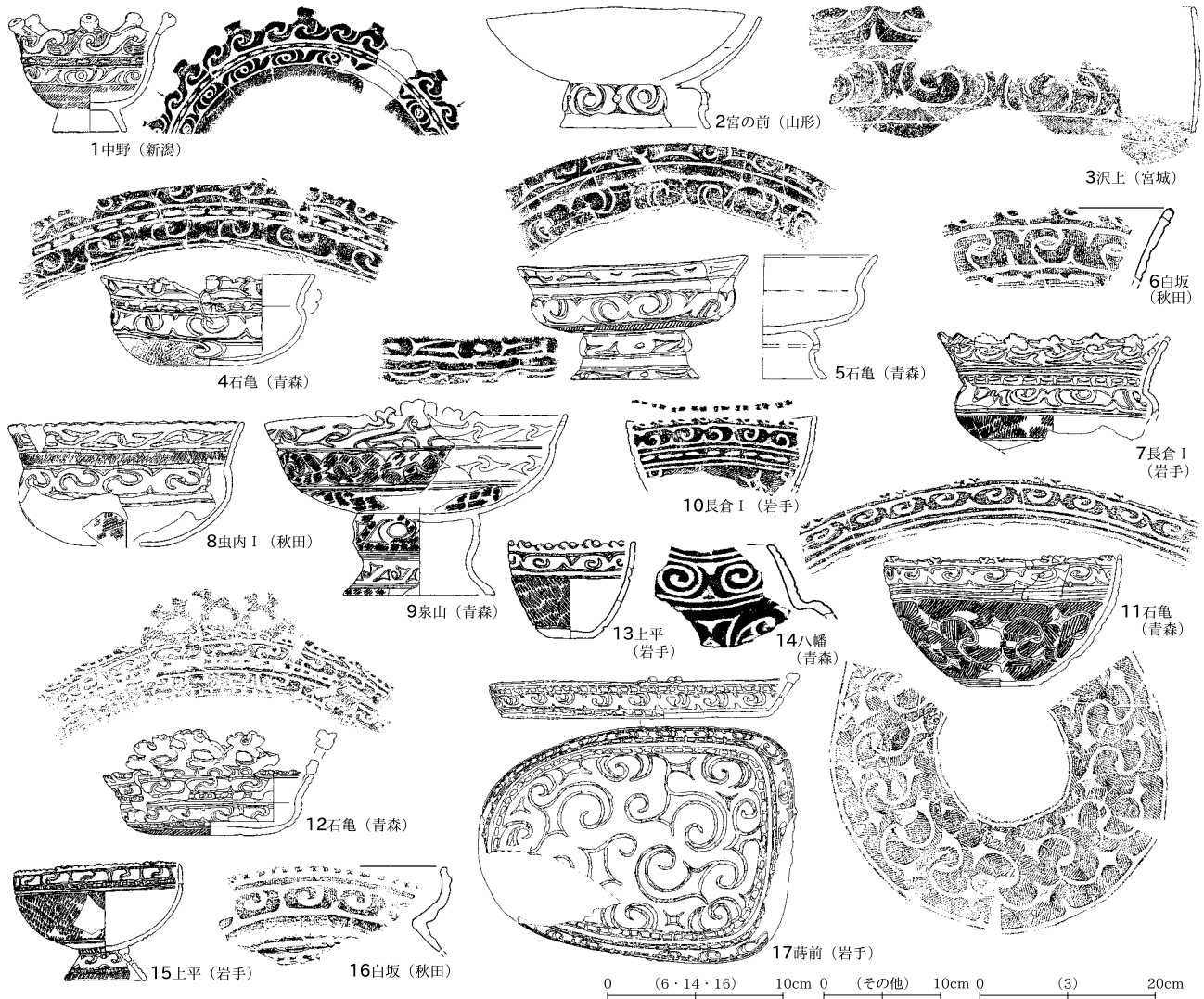


図37b C字文土器集成図

端の区画沈線に連結した弧線、更に棘状陰刻が交互に配され、浮文はX字状の左下端のみ渦巻く構図となる。口端には連続した三山状突起が配され、突起間は平坦に削平され、Ⅱa文様帯には主軸線が密着した入組三叉文2b類が施されており、新しい様相を窺わせる。

図37a・b-8はB類の装飾鉢で、Ⅱ文様帯は上下で対向した棘状陰刻と、上下から巻き込み反転する弧線が交互に配されるが、弧線の末端は区画沈線に連結せず、遊離したZ字状の陰刻となる。口端は篋状工具で刻まれた小波状縁で、Ⅱa文様帯に入組三叉文1c類が施され、屈折部直上には縄文帯が圍繞されることから、古の様相を有している。

図37a・b-9は、口頸部が屈折したB類の台付浅鉢で、体部文様帯には上下で対向した棘状陰刻と、入組三叉文1c類が交互に配され、縄文地文を有するが、陰刻の文様のみで構成されるため、磨消文様には至っていない。口

端には、正面性を持った突起に副次的なB突起が配されることから、大洞B2新式に比定されるが、突起直下の穿孔は、前記したように珊瑚状突起との緊密性を窺わせる。類似した文様は、図22-9にも指摘される。

当該期には、先行型式の系譜を引く、上下で大きく入り組む弧線の構成が看取されるが、円文や円形刺突を巻き込むだけではなく、入り組む構成が多くなる。また、渦巻文も現出するが、複線構成が基本であり、上下逆方向から交互に渦巻く例は、円文を巻き込む系譜を引くもので、文様帯の狭小化に呼応した在り方と想定される。また、弧線が区画沈線から遊離した文様も認められる。

（4）大洞BC1式のC字文

C字文の盛行期に相当するが、文様の狭小化に伴い、陽刻部を強調した構成が看取され、截痕列を伴う例も現出する。

図37a・b-10・11はA類の装飾鉢で、単沈線による渦巻

文と棘状陰刻が、交互に配された例である。10は上下交互、11は上端からのJ字状の短沈線で構成される。10の口端にはB突起4a類、11の口端にはB突起2b類が配され、いずれも体部に菱形を基調とする磨消文様（後述の「Ⅲ文様帯」）が施される。

図37a・b-12は珊瑚状突起を配した浅鉢で、Ⅱa・Ⅱ文様帯とも、上下から伸びた弧線が反転している。先行型式である4からの発展が想定され、下端には截痕列が巡らされる。

図37a・b-13はA類の装飾鉢で、区画沈線から遊離したJ字状の沈線が施される。B突起3c類が連続的に配されているため、大洞BC1式に位置付けたが、8・9との近似性から、大洞B2新式に位置する可能性も否定できない。

図37a・b-14は、馬淵川・新井田川流域の注口土器に特有の渦巻文である。上端の区画線から伸びた渦巻文と棘状陰刻が交互に配され、細身のX字状の浮文が作出される。強く渦を巻く構成で、注口土器B類（2段構成）の頸部文様帯に施される（図51-27）。精巧な造作の注口土器で、赤色漆塗りの優品である場合が多い（小林2003）。

当該期のC字文では、陽刻部が幅狭く描出されるようになる。羊歯状文の施文原則とも同調しており、陰刻により陽刻部の形状を一定に保つ意識が、強く働いている。入り組みを持つC字文1類では咬合部が反転する例、渦を巻く同2類では単沈線の構成が多数を占めるが、前者では4・6に類似した入り組む構成、後者でも複線構成（図21-10、図23-10、図21-27）も認められる。また、注口土器の頸部・肩部文様帯にも、C字文が取り込まれるようになる。

（5）大洞BC2式のC字文

大洞BC2式では、文様帯の狭小化が顕著となり、C字文も繁縷となる。

図37a・b-15は口頸部が直上する台付鉢で、C字文1類に相当するが、先行型式（12）と同様に咬合部は反転しており、また文様帯の上下幅の縮小に連動して、棘状陰刻は連結する。

図37a・b-16は注口土器A類（3段構成）の口縁部で、J字状の単沈線が施されるが、文様帯の退縮に伴って、棘状陰刻の連結が認められる。

図37a・b-17は皿形の体部文様であるが、棘状陰刻は

連結せず、渦巻文も5の系譜を引く複線構成となる。但し、上端からの一方向のみで構成される。

当該期のC字文は、文様の繁縷化が顕著で、棘状陰刻が連結したり、J字状の単沈線も一方向のみとなる例が多く、同一の浮文が連続的に展開する傾向が看取される。羊歯状文と同様に、三種の施文原則が強く作用したことを窺わせており、特に、口縁部が短く外折した台付鉢の新生Ⅱc文様帯に、顕著に認められる（図47-2・6）。なお、棘状陰刻の連結化は、既到大洞BC1式の段階に認めることができる（図18-7、図21-10、図22-31、図24-27）。

（6）小 結

C字文は、大洞B1新式～BC2式まで認められており、長期にわたった文様要素として、特記されるものである。

上下端の区画線から弧線が伸びて入り組むC字文1類と、一方の区画沈線から伸びた沈線が渦を巻くC字文2類に大別される。その遡源は東北南半に求められるが、当初は、円文を上下から大きく巻き込む構成の1類を特徴とし、棘状陰刻は副次的な存在に過ぎなかった。大洞B2式では、入り組む構成や2類の渦巻文が現出し、X字状の浮文が意識されるようになる。大洞BC1式では、文様帯の狭小化に連動して、文様の繁縷化が進行して、陽刻部は幅狭に作出され、単位数も増加し、注口土器にも取り込まれる。大洞BC2式では、更に繁縷化が進行して、棘状陰刻の連結が顕著となり、同一の浮文が連続的に展開する傾向にある。

村田章人氏は、秋田県白坂遺跡例（図37a・b-6）を基に、「X字文」（筆者のC字文）が羊歯状文の三つの施文原則を遵守することで、「X」の形状が一定の単位性を有することを解説した（村田2000）。同氏が指摘したように、C字文には、「連結原則」・「等間隔配置原則」・「陽刻部形状の保持原則」が働いているが、その萌芽は大洞B2式の段階にあり、大洞BC2式のC字文に最も顕著に現れる。

上記したように、C字文は概ね系統立った変遷が想定される。しかし、入組三叉文や羊歯状文ほど多用されなかったため、型式学的な分析は進展しておらず、また長期にわたった文様要素から、型式区分に困難が生じていた。筆者は文様帯の狭小化との関連から、C字文の変遷

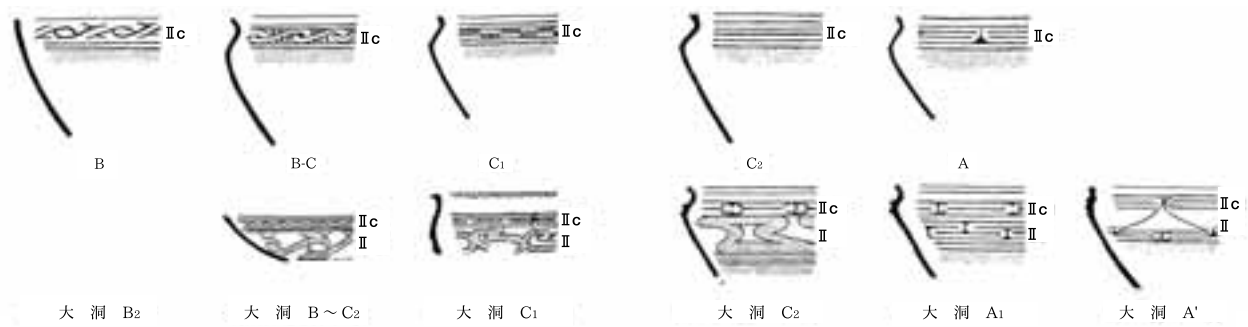


図38 頸部文様帯と体部文様帯の重畳を示す模式図（山内1964 a）
土器の終末」の中で、整備された系統観が示されている⁵⁹⁾
（山内1930）。

を想定したが、飽くまで大要を提示したに過ぎず、他の属性との組み合わせから、型式判別が求められよう。

C字文の文様構成は、注口土器の巴状文様や、装飾鉢・装飾壺の体部の菱形文を基調とした磨消文様との、類似性が指摘される。注口土器の巴状文様は全周展開せずに単位性を有するが、後者の磨消文様は上下幅の広い文様帯内の全周展開を前提とする。いずれも、三角形の陰刻又は菱形の頂点が対向して配され、一端から伸びた沈線が渦を巻くか又は入り組む構成となる。曲田 I 遺跡では注口土器（図17-1・2）が前者、装飾壺（図16-1・3・5）が後者の典型例となり、林謙作氏は、筆者のC字文とこれ等の文様を合わせて、「c字文」（林1993）と呼称している。確かに、これ等の文様との近縁性は認められる。しかしこれ等の文様には、筆者が指摘したC字文のような、陽刻部の形状を一定に保つ「等間隔配置原則」は作用しておらず、磨消部の文様に主体があり、差異が存している。

E 文様帯の系統について

図11・12では、曲田 I 遺跡 E Ⅲ-011住居跡の装飾深鉢・鉢形土器を文様帯の構成毎に配列してみた。その結果、4種類の文様帯構成に類型化され、Ⅱa・Ⅱc・Ⅱの各文様帯の存在を指摘することができた。

以下では、これ等の文様帯が、後期末葉～晩期前葉にかけて、どのような経過を経て成立に至ったのか、またその後、どのような消長を辿ったのか、幾つかの考察を加えてみたい。

（1）山内清男氏の晩期文様帯

文様帯の概念は、山内清男氏の研究が基本となる。山内氏の文様帯の概念は、1929年発表の「関東東北に於ける繊維土器」（山内1928）の中の「第一次文様帯」を初出とするが、亀ヶ岡式土器の装飾・文様帯の区分については、翌30年に発表された「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式

1930年時点での大洞B・BC式 亀ヶ岡式土器の内、多数を占める鉢類（大洞BC式～同A式）は、通常三つの装飾・文様帯（口部装飾帯、頸部文様帯、体部文様帯）の重畳によって構成され、それぞれに系統的な変化が指摘されている。後二者は上下を水平な沈線で区画され、帯状をなすのが通例であり、「少なくとも3系統に分かれた帯状の単元の存在」（西脇1995, p.65）が明確にされたことになる。

山内氏は、亀ヶ岡式土器の文様帯の重畳関係と文様の一般法則について、著名な模式図（図38）を用いて解説した。即ち、上段の頸部文様帯（Ⅰ）のみの鉢形と、下段の頸部文様帯（Ⅰ）と体部文様帯（Ⅱ）が重畳する鉢形に区分され、それぞれの系列毎に、系統的变化が解説された。1930年の時点では、文様帯に対してⅠとⅡの記号が付与されたが、この記号は亀ヶ岡式土器の範囲内で完結していた。これに対し前出の「第一次文様帯」は、縄文土器に通徹した文様帯原理が考慮されており、相前後して示された概念であったが、両者では異なった用法がなされていたことになる。

山内氏の1930年時点での頸部文様帯（Ⅰ）の内容は、以下の通りである。

頸部又は頸の下半に存し、下限は常に、上限も多くは横溝によって限られ帯状をなし、その幅は体部文様帯よりも狭い。体部文様帯と重畳して加えられる場合もあるが、単独に加えられることが多く、縄紋が施されないことが一般であって、突起が配置される場合もある。大洞BC中間型式（同BC式）では、真に文様を形成するのが常で、所謂羊歯状紋がこれに相当する。

体部文様帯（Ⅱ）の内容は、以下の通りである。

体部全面又は上半に加えられ、上下限を1～3条の横

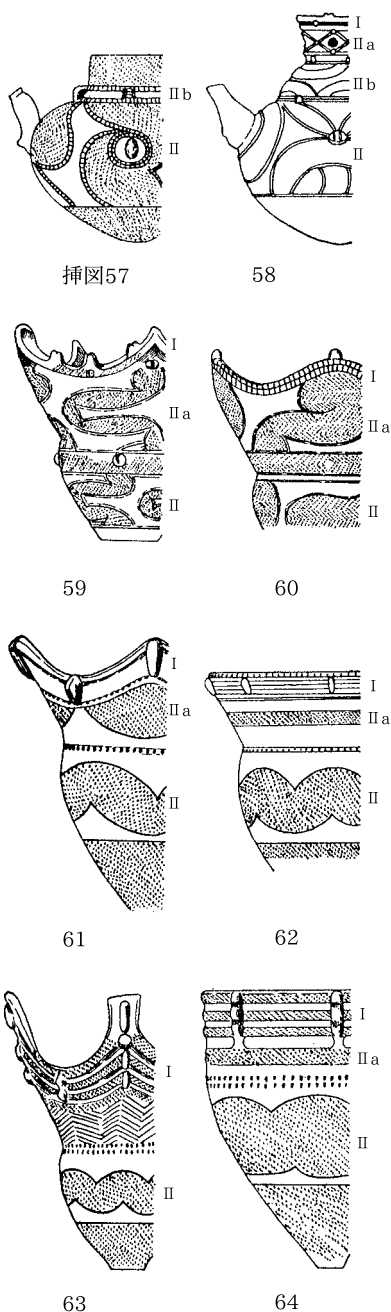
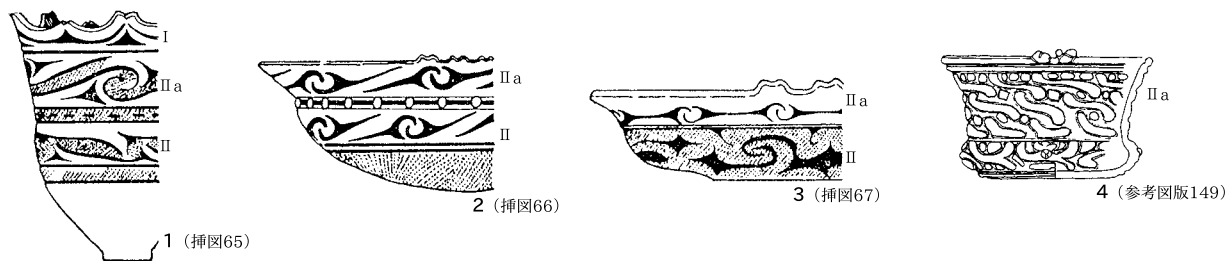


図39 後期文様帯の模式図 (山内1964a) によって限られ、上限は屢々口端に露出している。大洞B式の口端は薄く、疎大な截痕が普通で、口内の溝は皆無である。

大洞BC式中間の型式(同BC式)には、頸部と体部文



1: 小豆沢(東京)、2: 雨滝(岩手)、3: 遺跡名不詳、4: 雨滝(岩手)

図40 後期文様帯の模式図 (山内1964a)

溝によって限られ、正しく帯をなしている。大洞BC中間の型式(同BC式)及び大洞C旧型式(同C1式)では、曲線的な磨消縄紋が主であり、磨消された器面は屢々深く彫去され、雲形文等で構成される。同じ手法・内容の文様が、縄紋面ではなく無紋面に加えられることも少数ある。

大洞B式の装飾鉢は、後続型式のような頸部及び体部の文様帯の区分が明らかでない点に特徴がある。口頸部の文様は、縄紋のない滑沢のある面に加えられ、内容は曲線的で、下限は水平な溝に

様帯の重量が現出する。口端は厚いものが稀で、疎大な截痕が継続するが、B形突起様の突起が横に列をなす突起列が少数見られ、口内の溝も少ない。同型式には、口外側の頸部文様帯の直上又は狭い無文帯を隔てて、頸部文様帯と同手法の文様帯が加えられることがある。この口外側の文様帯の上限は、口に露出し、文様の一部が口の突起に続く場合がある。また、頸部文様帯が同様の状態を示すことがある⁶⁰⁾。

上記したように、大洞B式の文様帯には、後続する型式のような体部文様帯の重量が認められず、模型図でも空白とされている⁶¹⁾。更に、大洞B式の口頸部文様帯は、口端に露出する特徴を有し、同BC式にも継承される。

「文様帯系統論」における後期文様帯 山内氏は、1964年に刊行された『日本原始美術 1 縄文式土器』の「文様帯系統論」中で、縄文土器に通徹した文様帯原理を解説した(山内1964a)。その中で、1930年時点の頸部文様帯(I)を「II c 文様帯」、体部文様帯(II)を「II 文様帯」と改称し、後期文様帯としてのII c 文様帯を初めて明示した。

「文様帯系統論」では、II c 文様帯は体部文様帯が上下二分されることで、晩期になって新たに成立した文様帯と位置付けられた。II c 文様帯は幅狭く、主に口頸部に位置し、初め文様をなしていたが(大洞B・BC式)、横線化し、頸部・肩部の隆線化(大洞C2・A・A'式)への変遷を辿っており、特に最初頭の大洞B式では、頸部と体部の文様帯の区分は明かでなく、また最終末の大洞A'式では、この区分が失われる。

II 文様帯は、後期の体部文様帯を継承しており、大洞B・BC式では縄文のない文様も時にはあるが、大洞C式においては曲線的な磨消縄文となり、大洞A・A'式では横線化の傾向を示す。

山内氏は、後期文様帯としてのII c 文様帯を指摘し、

模型図の記号をⅠからⅡcへと変更した(図38)。しかし内容においては、従前の説明が繰り返されたのみで、Ⅱc文様帯の明確な定義が示されることはなかった。

また晩期においても、Ⅱa文様帯の存在が指摘された。Ⅱa文様帯は後期半ばに、頸胴部界の屈折した器形の出現に呼応して、Ⅱ文様帯が分立することで生じ、東北地方の縄文後期後半を特徴付けた文様帯であるが、晩期までの残存が図示された(図39・40)。図示資料で判ずる限りでは、屈折点の有無以外に、Ⅱc文様帯との差異を見出すことができず、山内氏はⅡc文様帯と「後期半に生じたⅡaの系統との判別は困難」(山内1964a, p.158)であると指摘した。

筆者は前述したように、両文様帯の判別の基準を器形に求めているが、山内氏は文様帯が、「器形の変化等を消去」(山内1964b, p.178)した普遍的な概念であることを指摘しており、筆者の理解は、山内氏の真意からは逸脱していると言わなければならない。しかし、器形以外に両文様帯の差異を説明することは、困難であろう。

『日本先史土器の縄紋』の「Ⅲ文様帯」 1964年に発表された「文様帯系統論」に先だって、1961年3月に京都大学に提出された学位論文『日本先史土器の縄紋』(山内1979)の中に、晩期の文様帯として、異なった名称が存していた⁶²⁾。

同書では、後期以前の口頸部は「Ⅰ紋様帯」、体部は「Ⅱ紋様帯」と、後年の「文様帯系統論」と同様の記号が付与されていたが、中・後期のⅠ紋様帯が退化し、口縁装飾と化したものには「Ⅰ⁰」、後期中頃に生じた頸部紋様帯については「Ⅱ⁰」の記号が付与されていた(図41-1)。

また晩期では、屈折しないA類の深鉢の頸部文様帯(図41-2)や、口縁部が短く外折した大洞C2式の羽状縄文の鉢形の頸部文様帯に対して「Ⅱ」の記号、体部文様帯に対しては「Ⅲ」の記号が付与されており、従前の「Ⅱ紋様帯」が、晩期になって「Ⅱ」と「Ⅲ」に分裂したことが指摘された。特に「Ⅲ」は、大洞C2式の壺形土器の肩部(体上半部)の文様に例示されたが、鉢類の体部にも通じた文様帯であった。

上記から、1961年の時点で山内氏が、縄文土器の文様帯を3系統に分かつ構想を抱いていたことが明かとなる。後年の「文様帯系統論」では、ⅠとⅡの二帯の文様

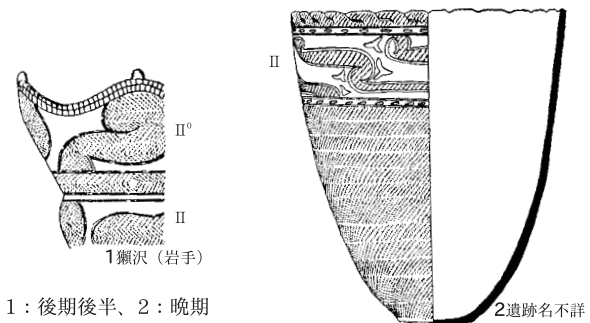


図41 『日本先史土器の縄紋』における文様帯

帯とⅡから派生した副次的な文様帯から、縄文土器の系統的な変化が解説された。しかしその数年前には、後に撤回された「Ⅲ文様帯」という異なった概念が存していたことは、注目すべきであろう⁶³⁾。

「Ⅲ文様帯」を巡る動静については、既に西脇対名夫氏の詳細な検討がある(西脇1995)。西脇氏は、「後期の体部文様帯は晩期の頸部文様帯と相同であり、晩期の体部文様帯は新たに発達した別のもの」(西脇 前掲, p.72)と見なしたのが、山内氏の初期の構想であったと指摘した。即ち「Ⅲ文様帯」は、鉢類の最下位の文様帯が新たに追加されたもので、その上位の頸部文様帯と共に、後期Ⅱの系統にあり、晩期になって分裂した文様帯ということになる。記号から判ずる限りでは、晩期の頸部文様帯Ⅱが、後期Ⅱの直系にあると見なされていたと言えるであろう。ところが後年、「Ⅲ文様帯」は否定され、寧ろ後期と晩期の体部文様帯が、直系の相同関係として捉え直され、晩期の頸部文様帯がⅡcとして、Ⅱから分化した副次的な文様帯に変更された(表4)。

上記した山内氏の見解の変更を西脇氏は、「Ⅲ文様帯の撤回という事件」と意義づけ、その変更の理由として、亀ヶ岡式土器の壺形の文様帯に対する逡巡を指摘している。即ち、『日本原始美術』編集に際して、「大洞Bには體部文様帯の發達が不完全」(山内1932, p.52)とは見なし難い、体部文様帯の発達した大洞B式の壺形に遭遇して、「体部文様帯は後期の壺に見られるような発達した形のまま何らかの経路で大洞Bに継続しており(Ⅱ)、む

表4 山内清男氏の亀ヶ岡式土器文様帯記号の変遷

	1930年	1961年	1964年
頸部文様帯		→	c
体部文様帯		→	

しろ晩期に入ってから次第に硬直すること、後期と晩期の間で文様帯の重量が変化するのは専ら頸部文様帯の新生によること(Ⅱc)、の2点について山内の判断が固まり(西脇 前掲, p.74)、Ⅲ文様帯の撤去に至ったのであろうと推測した。

西脇氏は、山内氏が晩期初頭の頃に、体部文様帯の衰退する一時期の介在を考えていたと指摘する。「(前略)この時期に古い体部文様帯は消滅するか晩期の頸部文様帯への変貌を遂げ、のち改めて体部文様の発達が起こる、というのが山内氏の元来の見通しであったろう」(西脇 前掲, p.73)。山内氏は1930年代の時点で、大洞B式の体部文様帯の未発達を指摘しており、恐らくこの推測は正しいであろう。しかし、山内氏の文様帯の普遍性に関する信念、即ち「土器装飾の表面的な変化を消去して本質的な不変、年代を超えた一貫性を訴えようとした」(西脇 前掲, p.80)からこそ、変更せざる得なかったと類推した。今となっては、その経緯を明らかにすべくもないが、十分傾聴に値すると言えるであろう。

筆者は、後期後葉瘤付土器から晩期亀ヶ岡式土器への磨消文様の系統性を考えた場合、山内氏の設定した「Ⅲ文様帯」が、有効な概念であったと考えている。晩期初頭の装飾壺には、入組帯状文を基調とした磨消文様が認められるが、大洞B2式では菱形・矩形基調の磨消文様が現出し、装飾鉢の体部にも取り込まれる。文様が施された部位を見ると、後期からの系統が考えられる。しかし、後期末の壺形土器は、縄文壺・無文壺が一般的であり、装飾壺の系統性は不明瞭なのが実情である。少なくとも菱形・矩形基調の体部の磨消文様は、晩期になって新たに生成したと見た方が妥当であるように思われる。

従って、山内氏の模型図(図38)下段の体部文様帯には、後期に連なる「Ⅱ」の記号を付与すべきではなかったというのが、筆者の理解である。当然、図40-3の体部文様帯にも該当する。しかし、この点を明確にするには、壺形土器の磨消文様の詳細な跡づけが求められることから、稿を改めて論じる必要がある。

以下では、鉢類の体部文様帯を二分する必要から、菱形・矩形基調の磨消文様について、「Ⅲ文様帯」の呼称を用いることにしたい。

(2) 今村啓爾氏による亀ヶ岡式土器の文様帯

亀ヶ岡式土器の文様帯の研究は、山内清男氏の当該土

器研究の土台をなすものであったが、山内氏の論考以外に、亀ヶ岡土器の文様帯を取り上げた研究は極めて少ないのが実情である。それは、山内氏の文様帯に対する解説があまりにも簡素であったため、真意をはかりかねたことによるところが大であろう。そのような中で、最も意欲的な研究を表したのが、今村啓爾氏である(今村 1983・94)。

今村氏は文様帯の系統的变化を論じる中で、器種と文様帯の関係を時間的に辿れる事例として、亀ヶ岡式土器を解説した(図42)。同氏は山内氏の文様帯記号に従って、文様帯の系統性を器種毎に図示したが、山内氏が指摘した体部文様帯が再び上下に二分された例を、多帯化の著しい大洞B式の装飾鉢(図42-45)に見立て、その中間の文様帯が、後期深鉢のⅡ文様帯の系統を引き、また下段の文様帯は、壺のⅡ文様帯が転移したと解釈して、前者をⅡc、後者をⅡ文様帯と位置付けた。

その他にも、器種毎の文様帯の変化の概要が解説された。しかし、意味深長な系統図の割には、説明が簡素なため、筆者には作図の意図を十分理解できたとは言い難く、ここでは後期後葉から晩期初頭のつながりについて、幾つかの問題点を指摘するに留めたい。

一つ目には、後期後葉と晩期初頭の時間幅に関する問題である。後期後葉に配置された土器は、瘤付土器の初期(瘤付土器第Ⅰ～Ⅱ段階)の資料に限られており、大洞B式と対比するには、後期末葉の段階が欠落している。後期末葉には、注口土器や壺形の無文化が顕著であり、それぞれの文様帯を直接対比するには、無理があるように思われる。また、大洞B式に配置された型式内容にも問題があろう。1の香炉形土器は大洞B1新式、7の注口土器は「過渡段階」、21の広口壺と45の装飾鉢は大洞BC1式に位置付けられるものであり、型式の内容にも出入りが存する。一方大洞BC式は、同BC2式に相当する内容に限られている。文様帯の時間的な推移を追究するには、型式細分を厳密にすることが求められる。

二つ目には、体部文様帯の理解に関する問題である。今村氏は山内氏の記号に従って解説したが、ⅡaやⅡの用法が適切であったのか問題となる。52の頸部文様帯にⅡaの記号が付与されているが、Ⅱaは屈折した器形の頸部文様帯であり、山内氏の「学位論文」では、口頸部が直上した深鉢の頸部の文様帯に対しては、Ⅱの記号が付

与されていた（図41-2）。また図42-45・49の体部文様にⅡcの記号が付与されているが、筆者はⅡと見なしており、今村氏並びに山内氏がⅡとした体部の磨消文様は、晩期になって新たに生成した文様帯「Ⅲ」である、と理解している。

亀ヶ岡式土器全般を見通した文様帯の研究は、今村氏において存在せず、多様な型式内容が明確にされた今日においてもなお示唆に富む内容であり、学ぶべき点は少なくない。しかし、土器型式の編年研究の進展に伴い、再考を要する資料が存しており、また山内氏の「学位論文」の内容が、あまり考慮されなかった点に、問題を残している。

（3）晩期文様帯としてのⅡc文様帯

山内清男氏は、Ⅱc文様帯を晩期文様帯として大洞B式～A式までの一貫した在り方を図示しており、その成立を以て亀ヶ岡式土器の確立と見る研究者も存している（林1996）。しかし、山内氏自身Ⅱc文様帯を明確に規定した訳ではなかった。従って、「Ⅱc文様帯が、いつ・どのようなかたちで成立するのか、あきらかでない」（林ほか1995, p.42）との指摘もなされている。晩期文様帯としてのⅡcとは、どのように定義付けられるのか、以下では筆者の理解を明示して行きたい。

「学位論文」における「Ⅲ文様帯」の再評価を試みた西脇対名夫氏は、山内氏の模型図資料（図38）に対して、「（前略）頸部文様帯は、上段の土器と下段の土器の間でほぼ同じである」（西脇1995, p.67）と指摘した。確かに大洞BC式では、文様要素として同じ羊歯状文1類が施されている。しかし器形を見た場合、筆者には重大な差異が存しているように思われる。即ち、下段は屈折せずに立ち上がる器形であるのに対し、上段は口縁部が外折している。この差異については、既に藤村東男氏（藤村1980）の指摘があるが、これまであまり注意されることがなかったように見受けられる⁶⁴⁾。

筆者は、亀ヶ岡式土器の頸部文様帯に、二様の形態が存していたと考えている。即ち、口縁部が直上した器形の頸部文様帯と、口縁部が短く外折した器形の頸部文様帯の存在である。山内氏の模型図（図38）では、大洞B式と同BC式下段の2例が前者に、

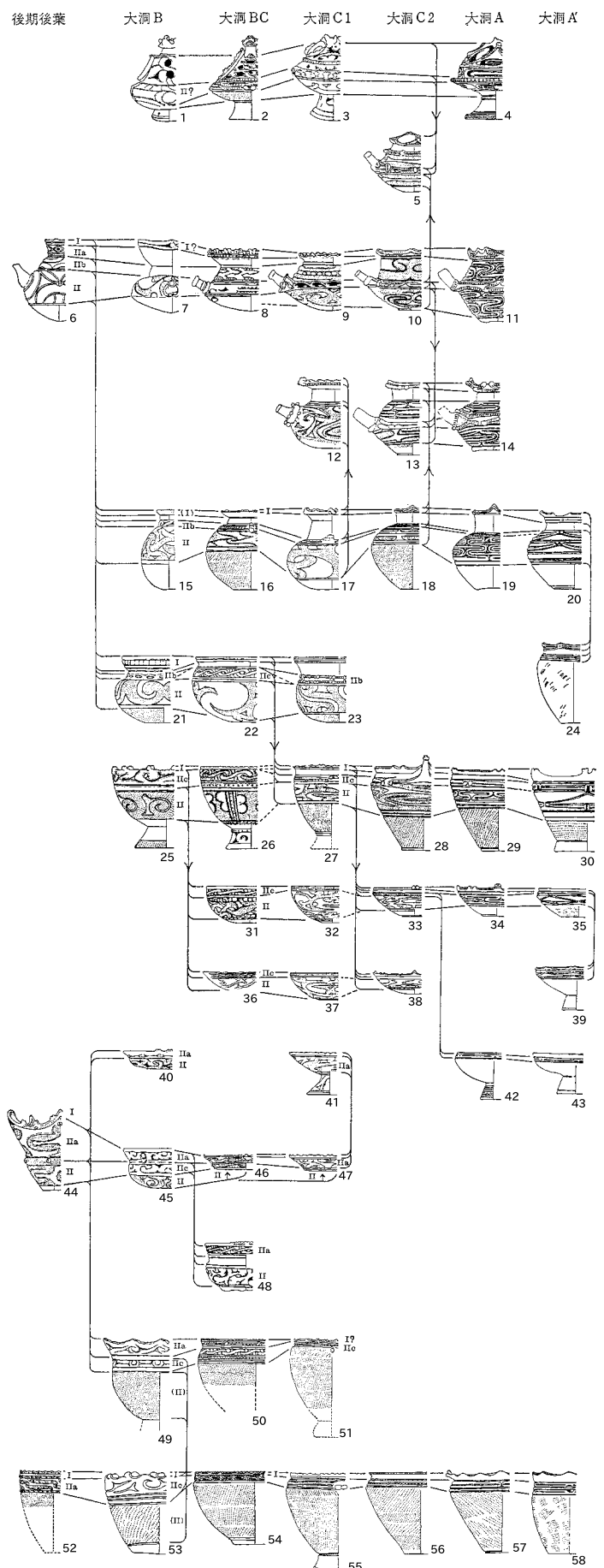


図42 器形別に見た亀ヶ岡式土器の文様帯の系統関係（今村1983）

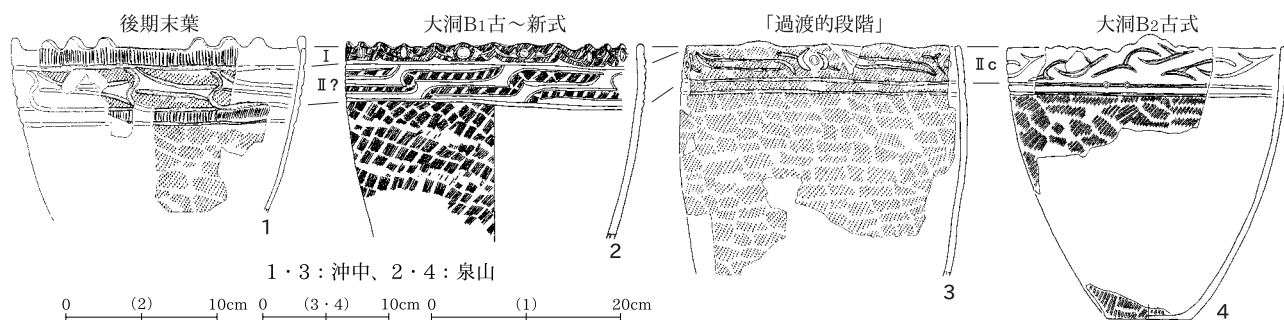


図43 「旧Ⅱc文様帯」の成立過程

大洞A'式を除くその他が後者に相当する。曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡では、後者の器形が殆ど存在しない(図11・12)。後者の器形が、入組三叉文や祖型的羊歯状文施文の鉢類に見られず、定型的な羊歯状文に顕著であることから、それが新しい様相であることが示唆される。その成立過程については後述するが、大洞BC式を細分する上での指標となる可能性が想定される。筆者は、大洞B式と共通した前者を**旧Ⅱc文様帯**、大洞BC式に新たに生成したと見られる後者を**新生Ⅱc文様帯**と呼称し、時期差を持った文様帯として識別したいと考える。

以下では、それぞれの成立過程について検討を加えてみたい。

「旧Ⅱc文様帯」の成立 Ⅱc文様帯の成立を考える上で、山内氏の大洞B式に対する口頸部文様の記述が鍵となる(山内1930)。先に記した部分と重複するが、その内容を列記すると、以下の通りである。

- ①文様は縄紋のない、滑沢のある面に加えられる。
- ②内容は曲線的で、所謂入組文の一部が相当する。
- ③上限は屢々口端に露出している。

この内①と③の定義が、重要であろう。即ち、①は口頸部文様帯に縄文地文がなく、研磨調整の行き届いていることを意味している。また、③は口端の区画が無くなり、頸部の文様が口端に露出することになる。更に、②の「所謂入組文」は、模型図に示されたように、単位文様化した入組三叉文に相当する。後期文様帯から晩期文様帯への変化を考究するならば、口頸部からのⅠ文様帯と縄文地文の消失、更に入組三叉文主体の文様構成の確立が、Ⅱc文様帯成立の必要条件となるであろう。従って旧Ⅱc文様帯の成立は、Ⅰ文様帯の衰退と一体の関係にあると見なされる。

図43は、後期末葉～大洞B2古式までの、装飾深鉢A類を配列したものである。いずれも、馬淵川中流域の挾

点遺跡である青森県三戸町泉山遺跡と同沖中遺跡出土の資料である⁶⁵⁾。これ等の資料を用いて、装飾深鉢A類の後期文様帯から晩期文様帯への変化を解説してみたい。

1～4は、後期末葉～大洞B2古式の装飾深鉢である。筆者は、当該期を「後期末→大洞B1古式→同B1新式→「過渡的段階」→大洞B2古式」の5階梯に区分している(小林2003)が、図43では大洞B1古式と同B1新式を包括して、4階梯としている。

1は、後期末葉に位置付けられる。ⅠとⅡ文様帯⁶⁶⁾で構成され、Ⅰ文様帯には篋刻み目、Ⅱ文様帯には2段の入組帯状文(縄文地文)が施され、下端は篋刻み目帯で画される。口端の山形突起は後期末葉の特徴であり、入組帯状文の描線の上端と下端が区画沈線と接着した例は、東北北半に屢々認められる。

2は、大洞B1古～新式に位置付けられる。口端は小波状縁をなし、Ⅰ文様帯は縄文地文を有するが、魚眼状三叉文が施される。Ⅰ文様帯の文様化は、大洞B1式に顕在化しており、魚眼状三叉文の末端は波頂部に向かって八字状を呈し、その直下に棘状陰刻が加えられ、Ⅰ文様帯の意匠は、口端形態の規制を受けている。Ⅱ文様帯には、左傾の2段の入組帯状文が施される。

3は、口端が平縁であるが、緩い小波状の高まりを有し、口縁上端の区画沈線がなく、Ⅰ文様帯が消失している。口頸部には、魚眼状三叉文と単段の入組帯状文が交互に施され、縄文地文を有する。Ⅰ文様帯の消失は、「過渡的段階」に顕在化しており、口頸部の文様は、後期のⅡ文様帯の入組帯状文の系譜を引くものであろう。口頸部に縄文地文を有する点で、Ⅱc文様帯の成立とは認め難いが、その過渡的な様相を示す例と言えるであろう。Ⅰ文様帯が消失し、入組帯状文が口端に露出した装飾深鉢の例は、「過渡的段階」の基準資料である、曲田Ⅰ遺跡

GⅣ-014住居跡にも認められる（鈴木隆英1985）。

4は、大洞B2古式に位置付けられる。口端は三山状突起と小波状縁で構成され、口頸部には入組三叉文2a類が施される。文様は口端に露出しており、縄文のない滑沢のある面に加えられており、Ⅱc文様帯の成立と見なすことができる。

上記から、旧Ⅱc文様帯は、後期の頸部文様帯（Ⅱ）の系譜を引いており、Ⅰ文様帯が消失し、頸部文様帯が口端に露出し、縄文地文を失うことで成立したと見なすことができるであろう。文様モチーフは入組帯状文から三叉文へと主体が転換するが、入組帯状文の系統にある頸部の文様が、そのまま継承された例（図43-3）も見られる。但し、単位文様化した入組三叉文は、Ⅰ文様帯の文様要素を引き継いだと見なせるものであろう。

山内清男氏は、Ⅱc文様帯が体部文様帯が上下二分することで生じたと指摘した（山内1964a）。しかし、上記した筆者の考察では、体部文様帯の分立した経過は認められない。分立したと見なすからには、その初期の段階にⅡcのみの構成が存するのは、奇異と言わざるを得ず、本来ならば、Ⅱ文様帯の重畳がなければならないであろう。さもないと、晩期文様帯としてⅡc文様帯を特化してしまう必要がある。その点で、晩期の頸部文様帯を後期Ⅱの直系と見なした「学位論文」の見解の方が、筆者には説得的であったように思われる。

旧Ⅱc文様帯は、大洞B2古式で確立し、同BC2式まで認めることができる。しかし大洞C1式では、椀形のみに継承され、以降消滅の経過を辿る。

「**新生Ⅱc文様帯**」の成立 新生Ⅱc文様帯は、口縁部が短く外折して、屈折部の直下に施された頸部文様帯である。前記したように、曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡には殆ど見出すことができず、大洞BC1式には一般的でなかったことが予察される。

同様の器形は、東北北半の入組三叉文や祖型的な羊歯状文を施した鉢類にも認められない。一方、定型的な羊歯状文（截痕列を含む）やC字文を施文した鉢類に顕著に認められることから、新しい様相であることを窺わせる。新生Ⅱc文様帯は、上端が必ず区画される点に特徴があり、下閉じ区画は存在しない。口縁部上端を区画する意識が強まって現出した器形である、と言うことができるであろう。

上記した文様帯が、大洞BC式の段階に新たに生成したと見なすならば、その出自を従来の文様帯（旧Ⅱc又はⅡa文様帯）に求めると、以下の四案が推定される。

- ①旧Ⅱc文様帯の口唇部の外折化
- ②Ⅱa文様帯の下垂化
- ③Ⅱa文様帯の狭小化に伴うⅡ文様帯からの転換
- ④東北南部の「外傾頸部縄文帯型」からの影響

新生Ⅱc文様帯の生成に当たっては、文様帯の上・下端を画した両閉じ区画が原則となるが、図44を用いて、その生成過程を解説したい。なおここでは、北上川上・中流域～馬淵川中流域の資料を主に扱っている。

上記した四案の内、最も可能性が高いのは、①であろう。図44-1は、口端にB突起3c類を連続的に配し、直上した旧Ⅱc文様帯に、羊歯状文2類が施される。この口部装飾帯が外折することで、新生Ⅱc文様帯に転換したことが想定される（図44-5）。その場合、屈折部直下の体部上半は内彎することになり、口縁部の外折化は、口部装飾帯の発達とも無関係ではない。旧Ⅱc文様帯が、新生Ⅱcに転換したと捉えた見解であるが、図44-1は、当然外折しない4にも継承される。

次に、②について考えてみたい。図44-2は、Ⅱa文様帯を有する台付鉢であるが、このⅡa文様帯が下垂して、口部装飾帯直下で屈折した器形に変化することで生成したと見るものである。Ⅱa文様帯は、大洞B2式～BC1式に盛行しており、大洞BC1式では比較的幅広の頸部文様帯が形成され、体部も丸味を持つ例が多い。頸部が狭小となり、屈折部直下が張り出し、彎曲が強まり、文様帯の上下幅が圧縮されることで、成立に至ったと想定される。しかし、この間の事情を物語る資料は、確認できない。

③は、ⅡaとⅡ文様帯を重畳させたB類の鉢類の内、Ⅱa文様帯が退縮することで、ⅡがⅡc文様帯に転換したと見るものである。曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡にも、この間の事情を示唆する例（図12-83）が認められ、口縁直下に截痕列を巡らした新生Ⅱc文様帯には、この系列が存した可能性が想定される。ⅡaとⅡ文様帯の重畳は、大洞BC2式（図44-6）にも継承されるが、数量的にはかなり少なくなる。

④の「外傾頸部縄文帯型」とは、村田章人氏によって設定された類型である（村田1992・93）。外傾する頸部を

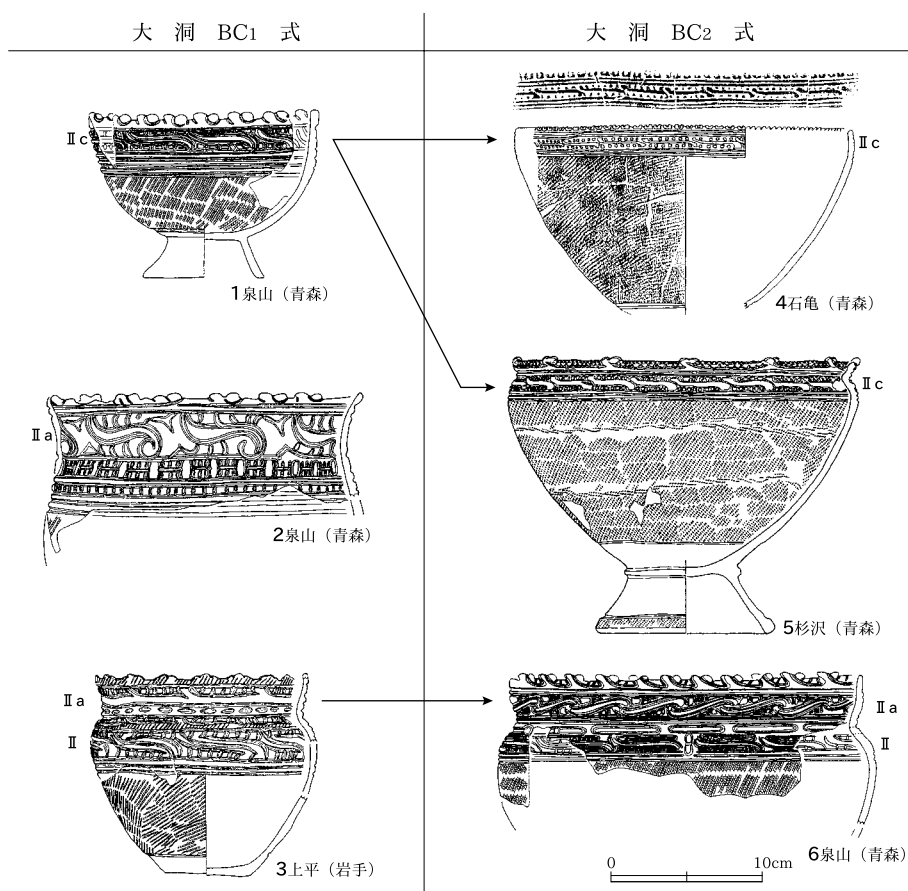


図44 「新生 IIc 文様帯」の成立過程

今村啓爾氏の系統図(図42)から、筆者の新生IIc文様帯の成立を見てみると、①と③の双方の案が採られていることが窺える(今村1983)。図42-49→50の変遷を見てみると、IIa文様帯の退縮する③の過程が図示されている。また、図42-53→54の変遷では、54の口縁部は直上するものの、大洞C1式の55との系統性を考慮すると、口縁部が外折する①の過程が図示されたと見なされよう。今村氏の解説では、IIc文様帯の器形の変異に注意は及んでいないが、大洞C1式の「二溝間の截痕」を施した半精製の台付鉢に対して、二通りの系列が想定されており、筆者の理解と共通している。

新生IIc文様帯は、口部裝飾帯と頸部文様帯が完全に分離した

持ち、そこに縄文地文が施され、括れ部直下の肩部に文様帯を有する鉢形土器で、文様帯に三叉文系又は入組文系のモチーフが展開する。この類型が東南北部(福島県域)において、安行式の影響を受けて大洞B2式段階に成立し、関東以西の鉢形土器の展開にも、大きな影響を与えたことが、想定されている。また、東東北半にも口唇部直下に縄文帯を有する土器は認められるが、器形全体における文様帯の構成は、「外傾頸部縄文帯型」とは異なり、系統的にも一連のものとは考えられないことが、同氏によって指摘されている。従って、新生IIc文様帯の生成とは無関係であった、と見なせるであろう。

新生IIc文様帯は、口縁部が短く外折し、体部の上端が内彎した器形に特徴付けられる。幅広の口頸部が退縮し、丸味を帯びた体部の上端が、張り出すように変化したと捉えたのが、③の案である。また口縁部が直上した器形から、頸部がやや内傾し、口縁部が外折した器形への変化として捉えたのが、①の案である。図44-5のように口縁部が単に外折したのみの例は①の案、口部裝飾帯直下に截痕列を巡らした例(図47-1・2)は、③の案の可能性が高いように思われる。

文様帯の成立を意味する。旧IIc文様帯では、文様が口端に屢々露出していたが、新生IIc文様帯では、上端が画され、狭小な文様帯が形成される。この文様帯は大洞BC2式に顕在化し、以降横線化・隆線化の経過を辿る。旧IIc文様帯が、大洞C1式の碗形に辛うじて継承された傍系であったのに対し、大洞BC2式に顕在化した新生IIc文様帯は、同A式まで連綿と受け継がれており、後者が亀ヶ岡式土器に通徹した主流の文様帯であった、と行うことができるであろう。

口縁部が短く外折した在り方は、口内の沈線の出自とも一体の関係にある。山内氏は、口内の沈線が大洞B式では皆無、大洞BC・C1式には少ないことを指摘している。口縁部が外折したことで、口縁内側に稜や段が形成され、上向きの面が作出されたため、沈線を圍繞する環境が整ったと言えるであろう。

以上、IIc文様帯の二様性を指摘してきた。旧IIc文様帯が大洞B2式に確立し、同C1式まで継承されたのに対し、新生IIc文様帯は大洞BC1式に生成し、同BC2式以降顕著となる。従って、新生IIc文様帯の一般化が、大洞BC1式と同BC2式を区分する上での指針と見なせる

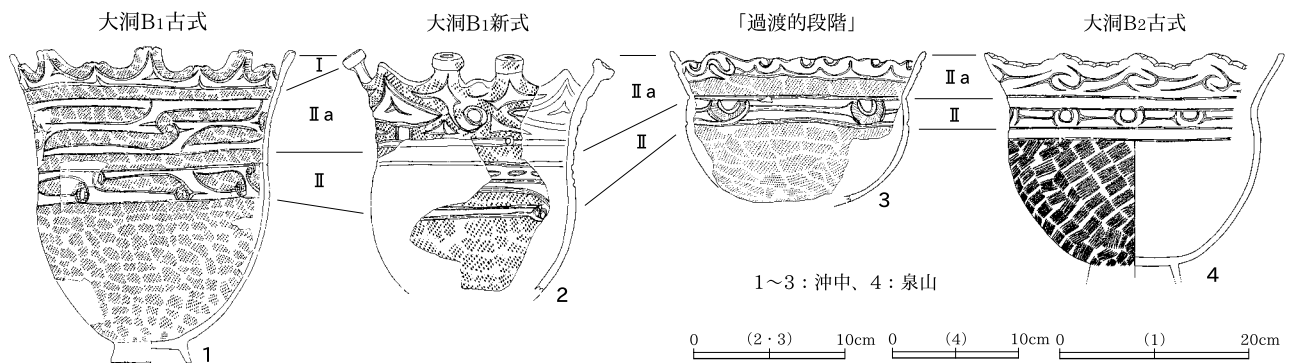


図45 晩期 IIa文様帯の成立過程

ことが、想定されよう。

（4）晩期文様帯としてのIIa文様帯

IIa文様帯は、屈折する器形の（口）頸部に配された文様帯である。後期以来の系統にあり、大洞BC2式までの存在が確認できる⁶⁷⁾。文様帯を構成する文様要素は、殆どIIc文様帯と一致しており、その差異は器形のみに求めざるを得ない。山内清男氏が、IIcと「IIaとの判別は困難」（山内1964a）と吐露した背景を、筆者はこのように理解している。

山内氏が図示したIIa文様帯（図40）は、いずれも体部文様帯を重畳した構成である。屈折した器形で、体部文様帯を持たない鉢類の（口）頸部文様帯が、IIa文様帯に相当するのか判然としないが、筆者はIIa文様帯の単帯構成を容認している（図12）。

晩期IIa文様帯の成立 後期半ばに成立したIIa文様帯は、後期後葉瘤付土器に特に発達を遂げる。後期後葉では、I・IIa・II文様帯の三帯構成が基本となる（小林1999）。瘤付土器第II段階（金剛寺1式期）にII文様帯を欠落した装飾深鉢が現出し、盛行するが、後期末葉には再び三帯構成が主体となって、晩期へと至る。その後の展開については、図45を用いて解説したい。

図45は、晩期初頭大洞B1古式～晩期前葉大洞B2古式の台付の装飾深鉢・鉢形土器B類を配列したものであるが、図43と同様に青森県泉山遺跡と同沖中遺跡の資料である。

1は、晩期初頭大洞B1古式に位置付けられ、後期以来のI・IIa・II文様帯の三帯で構成される。I文様帯は文様と化しており、台形状突起の直下が八字状に磨消され、方向の異なる棘状陰刻が交互に加えられる。IIa文様帯には左傾の2段の入組帯状文、II文様帯には単段の右傾の入組帯状文が施され、入組帯状文の連繋部や終点

部に、三叉状の陰刻が加えられる。底部は、高台化しつつあることを窺わせる。

2は、大洞B1新式に位置付けられ、IとIIa文様帯が融合した例である。先行型式までは、IとIIa文様帯の境界は、横帯区画で厳然と区分されていたが、当該期では融合化が進行して、区分が曖昧となり、晩期IIa文様帯への過渡的な様相を示す傾向にある。2の口端には、頂部に刺突を加えた円形の張り出しを持った一対の大型突起と、山形突起が交互に配され、前者の直下には円文を囲った魚眼状三叉文、後者の直下には三角形区画が施され、縄文地文を有する。口頸部の文様は、口端の形態に規制を受けており、主にI文様帯の文様要素が展開するように窺える。II文様帯には単段の右傾の入組帯状文が施されており、口頸部文様帯とは異なるモチーフで構成される。体部下半は丸味が強まっていることから、高台も高くなりつつあることが想定される。

3は、「過渡的段階」に位置付けられ、口頸部は弧線文を伴う小波状縁をなしており、連弧線の直下に縄文地文が施される。弧線文自体はI文様帯の残影と受け取られるが、頸部は縄文地文のみであり、口頸部文様帯として一体のIIa文様帯として捉えられよう。縄文地文を有する点では、まだ晩期文様帯の成立とは見なし難い。「過渡的段階」は、前記したように、曲田I遺跡GⅣ-014住居跡出土の装飾鉢（図20b-4）が基準となっており、3も同様の様相を呈している。3の体部文様帯は、半円を囲って両端の向き合う魚眼状三叉文で構成され、半円文には縄文地文が残存する。体部は丸味が強く、低平化の過程にある。

4は、大洞B2古式に位置付けられる。口端は三山状突起と小波状縁で構成され、口頸部には入組三叉文2a類が施される。文様は口端に露出し、縄文のない滑沢の

ある面に加えられており、晩期Ⅱa文様帯の成立と見なすことができる。Ⅱ文様帯は3の魚眼状三叉文の系統にあり、縄文地文はなく、Ⅱ文様帯の縄文地文の消失が、Ⅱa文様帯と同一歩調で進行したことを窺わせる。

上記から、晩期Ⅱa文様帯は、後期の頸部文様帯(Ⅱa)の系譜を引いており、Ⅰ文様帯が消失し、頸部文様帯が口端に露出し、縄文地文を失うことで成立したと見なすことができるであろう。位置としては、後期以来のⅡa文様帯の部位を占めているが、文様要素は入組帯状文から三叉文へと主体が転換しており、Ⅰ文様帯の文様要素に取って代わったことが想定される。従って、旧Ⅱc文様帯と同様の変遷を歩んだことが指摘される。その意味で、Ⅱcと「Ⅱaとの判別は困難」(山内 前掲)と言わなければならない。

大洞BC1式以降のⅡa文様帯 晩期Ⅱa文様帯は、大洞B2式～BC1式に盛行する。Ⅱ文様帯を重畳した例もあるが、Ⅱaのみの単帯構成も存在する。大洞B2式の前者では、両文様帯とも入組三叉文で構成された例が多く、Ⅱ文様帯は横帯で狭く画され、Ⅱa文様帯と同様に縄文地文は消失する傾向にある。

大洞BC1式では、Ⅱa文様帯に祖型的な羊歯状文を施した例が多く認められる。Ⅱa文様帯の上下幅は比較的広く、体部は丸味を持った台付鉢が目に付く(図22-25～28、図32-17・20・22・30)。

ところが大洞BC2式になると、Ⅱa文様帯で構成された鉢類は、極めて少数となる。その背景には、前記したようにⅡa文様帯が退縮することで、Ⅱ文様帯が新生Ⅱc文様帯へ転換したことも想定されよう。また台付鉢は、口縁部が短く外折して、体部上端が強く張り出す器形へと変化しており、各文様帯が狭小となる傾向にある。大洞BC2式のⅡa文様帯は、Ⅱ文様帯を重畳させた二帯構成(図44-6)に、ほぼ限られており、Ⅱa文様帯の単独構成は、大洞BC1式までの特徴となる。その意味で、大洞BC1式は先行する同B2式と共に、Ⅱa文様帯が発達した段階として位置付けられる。また大洞C1式には、Ⅱa文様帯は直接継承されない⁽⁶⁸⁾。

なお、単帯のⅡa文様帯で構成された大洞BC2式は、秋田県梨ノ木塚遺跡S K88土坑⁽⁶⁹⁾、大洞C1式では同県戸平川遺跡S K58(高橋・伊藤2000)から出土しており、地域的な残存が指摘される。

(5) 磨消文様で構成された体部文様帯

山内清男氏は、大洞B式における体部文様帯の未発達を指摘したが、著名な模型図(図38)でも、同式の下段は空白とされている(山内1930)。しかし、山内氏が未発達と見なした体部文様帯は、屈折しないA類の装飾鉢であり、屈折したB類については、後年模式図(図40-2・3)が提示されている(山内1964a)。即ち、大洞B式に体部文様帯が認められないのは、Ⅱc文様帯の場合であり、Ⅱa文様帯には体部文様帯が重畳する。

山内氏の模式図(図40)を見てみると、筆者には体部文様帯に二様の形態が存するように思われる。縄文地文を持たない例(図40-2)と、矩形基調の磨消文様の例(図40-3)である。両例には、同一の記号「Ⅱ」が付与されているが、筆者は前者が「Ⅱ」、後者が「Ⅲ」とすべきであったと理解している。その理由は、今村啓爾氏が解説した通りである(今村1983)。

今村氏は多帯化した図42-45の装飾鉢について、中間の文様帯は後期の体部文様帯(Ⅱ)の系統にあり、下段の文様帯が壺形の体部文様帯が転移したと解釈した。後期末の深鉢に由来するⅡと壺のⅡとを区別したことになるが、付与された記号に問題を残すものの、筆者も概ね賛同している。

晩期文様帯としてのⅡcやⅡaは、前記したように、文様帯内の縄文地文が消失することで成立に至るが、Ⅱ文様帯も歩調を合わせると考えられる。従って、口頸部の晩期Ⅱa文様帯の確立と同時に、体部文様帯からも縄文地文が消失する。図40-2は、前記したⅡの状況を示しており、3の矩形基調の磨消文様は、壺形の体部文様帯からの転移を窺わせる。上記の理解から、筆者は3の磨消文様を「Ⅲ文様帯」として、別段に扱うべきであったと考える。

それでは、大洞B2式における体部文様帯の磨消文様とは、どのような内容であったのであろうか。以下で指摘してみたい。

晩期初頭の装飾壺には、入組帯状文を基調とした磨消文様が認められる。三叉文を基調とした文様も、この系譜を引くものであろう。大洞B2式になると、菱形・矩形基調の磨消文様が現出する。この文様が装飾鉢の体部文様帯に取り込まれた、と見なすことができよう。

図46は、口頸部に入組三叉文、体部に磨消文様を施し



図46 (口) 頸部の入組三叉文と体部磨消文様との重畳

た装飾鉢（浅鉢含む）の集成図である。1～8はⅡc文様帯と「Ⅲ文様帯」、9～19はⅡa文様帯と「Ⅲ文様帯」が重畳している。

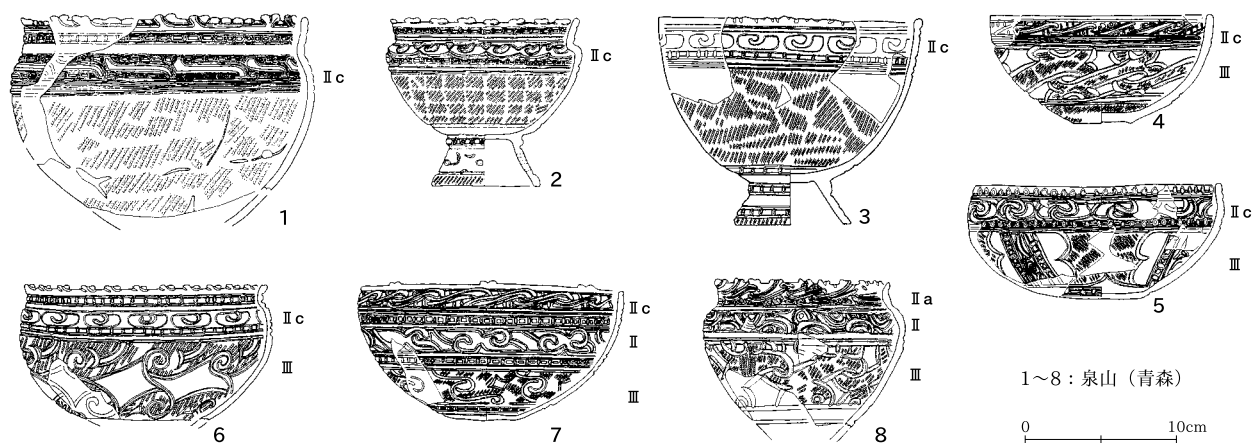
1～8は、Ⅱc文様帯に入組三叉文1b・2b類、体部文様帯に菱形・矩形基調の磨消文様が施される。1の口端は篋状工具の刻みによる小波状縁（漣状縁）で、古の様相を留めている。2・3は口縁部が区画され、2はB突起2b類、3はB突起3c類が連続的に配される。4・7は同一個体で、口端にはB突起3c類が配され、入組三叉文には短沈線が付加され、上段の三叉文の末端は口部の装飾に関与している。5は楕円形を呈した丸底の浅鉢で、口端に正面性を有する一対のB突起、更にその両脇にも副次的な突起が配される。三叉文は左側上端から下方に渦を巻く構成で、三叉文の背向する主軸線は近接しており、一部に山形の沈線が付加される⁷⁰⁾。8は入組三叉文1b類で、上段の三叉文の末端に矩形モチーフが付加され、横S字状の陽刻部を意識した構成となる。

口端形態及び口頸部文様から、1は大洞B2式に相当するであろう。体部は菱形基調の磨消文様で、菱形の一端が渦巻く構成となる。6も同様と思われ、矩形文様の

両端が渦巻く構成となる。その他は、大洞BC1式に比定されよう。2の体部文様は、菱形の一端が入り組む構成、3は菱形文と鉤爪状区画・半円文を交互に配した構成、5は矩形の両端が逆方向に渦巻く構成となる。

以上、Ⅱc文様帯に入組三叉文を施し、体部に磨消文様を持つ例を渉猟したが、図示できたのは僅か8例と極めて少ない。この他に、曲田I遺跡例（図12-86）と八幡遺跡例（図26-4）が加わる。このことから装飾鉢A類では、入組三叉文と体部の磨消文様の緊密性の弱さが指摘されよう。それは、体部の磨消文様が大洞BC1式以降に顕在化したことと無関係ではなかろう。しかし、大洞B2式に位置付けられる例（図46-1・6）も、僅かであるが存している。いずれも南三陸沿岸（大船渡湾）に位置する遺跡であることから、他地域に先駆け、該域で生成した可能性も考えられる。明確な口頸部文様は持たないが、林謙作氏が「Ⅲ文様帯」の萌芽が認められる。

9～19は、頸胴部界が屈折した装飾鉢B類で、Ⅱa文様帯に入組三叉文又は魚眼状三叉文、体部に磨消文様が施

図47 大洞BC₂式装飾鉢・浅鉢における文様帯構成の多様性

された例である。B類は、後期以来の文様帯構成を継承しており、体部文様帯は顕著に認められるが、磨消文様の資料となると、類例は多くはない。

9の体部文様帯は、魚眼状三叉文で構成される。三叉文や円文は幅広に描出され、区画内が磨り消されるが、厳密には「Ⅲ文様帯」とは見なし難い。10の体部文様帯は、入り組む矩形文様で構成される。大洞B2式の磨消文様には、横長の矩形区画が屢々見受けられる。上記の2例は、大洞B2式に位置付けられよう。

11～19の体部文様を見てみると、渦巻く菱形・矩形文様 (12・15・19)、入り組む菱形・矩形文様 (14・16・17)、対向した菱形と楕円の交互文様 (13)、C字文 (11・18) 等が認められる。これ等の内、12・13・18・19が大洞B2新式、15・16・17が大洞BC1式に位置付けられるであろう。

11は、Ⅱa・Ⅱ・「Ⅲ」の三帯構成をなす。「Ⅲ」はC字文で構成されており、壺形の肩部文様の転移とは見なし難い。しかしⅡa・Ⅱは、既存の文様帯の系統と見なすことができ、最下段は新たに生成した文様帯と捉えた方が妥当であろう。このような文様帯の多帯化は、大洞BC1式に顕在化し、後述するように同BC2式に継承されるが、11のⅡ・Ⅱaは、入組三叉文2b類で構成されており、大洞B2新式を初現とする可能性も考えられる。

(口) 頸部文様帯が、上下限が区画され、狭小化に傾くのは反対に、体部の磨消文様は、上下幅の広い文様帯として展開する。大洞B2式までは、狭小な体部文様帯(Ⅱ)の下端に「ノ字文」が施され、体部下半の縄文地文に陥入した構成をなしていたが、体部の磨消文様は、「ノ字文」の衰退と歩調を合わせたかのように台頭しており、

前者が後者にとって代わったことも想定されよう (小林2004)。

曲田I遺跡EⅢ-011住居跡には、体部文様帯の磨消縄文が3例認められる。装飾鉢が2例 (図12-86・88)、丸底浅鉢が1例 (図15-14) であるが、いずれも菱形基調の文様で、一端が入り組む類型 (図12-88、図15-14) と渦巻く類型 (図12-82) である。図12-86は、Ⅱc文様帯に入組三叉文2a類が施されるが、口端にB突起2b類が配されており、大洞BC1式に位置付けられる可能性が高い。

山内氏の大洞B式に体部文様帯の未発達 の指摘を受けて、入組三叉文に伴う体部の磨消文様を概観してきた。菱形・矩形基調の磨消文様で構成された体部文様帯は、後期の直接の系統にはなく、晩期になって新たに生成した文様帯と位置付けられ、筆者は後期の系統にある体部文様帯と識別するため、「Ⅲ文様帯」の呼称を用いてきた。「Ⅲ文様帯」は、大洞B2式に生成するが、顕在化するのと同BC1式であり、以降大洞A式まで継承される。当初は菱形・矩形を基調とした磨消文様が通例であり、一端が入り組んだり、渦巻く構成となる。壺形の肩部文様が転移した可能性が高く、モチーフは大きく変化することなく、大洞BC2式まで継承される。

しかし大洞BC1式では、菱形文の末端が上下端の区画線に接着し開いた五角形の区画が現出する (図50-8)。また入り組む類型では、大洞BC2式にK字文系や大腿骨文系のポジ文様が形成されるようになる (図47-4・8)。山内氏は雲形文等の曲線的な磨消縄文が、通常大洞BC・C1式の体部文様帯に施文されることを指摘しており (山内1930)、「Ⅲ文様帯」は晩期に通徹した文様

帯であったことが指摘されよう。

（6）大洞BC2式における文様帯構成の多様性

大洞BC式において、文様帯の多帯化の現象が認められることを指摘してきた。取り分け、大洞BC2式に顕著となるが、その多様性について、馬淵川中流域の拠点遺跡である青森県泉山遺跡出土の装飾鉢・浅鉢を基に、観察してみたい。

図47が、泉山遺跡から出土した大洞BC2式の文様帯構成のバリエーションである。

1～3は、Ⅱc文様帯のみで構成されるが、1・2が新生Ⅱc文様帯、3が旧Ⅱc文様帯である。1は、口部装飾帯直下に截痕列が巡らされ、屈折部が無文帯を呈し、外折部がやや幅広となり、Ⅱa文様帯の退縮した様相を窺わせる。2も同様に、口部装飾帯直下に截痕列が圍繞される。新生Ⅱc文様帯には、上記したように、外折した口縁部や屈折部に截痕列を巡らすものと、図44-5のように、口部装飾帯直下が外折した二様の形態が存しているが、前者は、Ⅱa文様帯との判別が困難な場合も想定される。

4・5は椀形で、旧Ⅱc文様帯と磨消文様の体部文様帯で構成される。4は頸部に羊歯状文1類、体部に大腿骨文が施されるが、体部の文様は先行型式の菱形・矩形基調の磨消文様由来のものである。5は頸部にC字文、体部に該期特有の縦位区画の磨消文様が施される。いずれも体部は、「Ⅲ文様帯」に相当する。

6は、新生Ⅱc文様帯と体部文様帯で構成される。体部は、「Ⅲ文様帯」に相当する。

7は椀形で、旧Ⅱc文様帯と二分された体部文様帯で構成される。体部文様帯の内、上部はⅡ文様帯、下部は「Ⅲ文様帯」に相当する。

8は、Ⅱa文様帯と二分された体部文様帯で構成される。口頸部は口部の装飾と一体化しており、体部文様帯の内、上部はⅡ文様帯、下部は「Ⅲ文様帯」に相当する。

上記以外では、Ⅱa文様帯とⅡ文様帯で構成された例（図44-6）も存しており、泉山遺跡の頸部と体部文様帯を重畳した例には、5種類のバリエーションが存している。その他に、泉山遺跡には見出せないが、Ⅱa文様帯と「Ⅲ文様帯」で構成された例も散見される。

このように文様帯の多帯化は、大洞BC2式に顕著となり、器形に応じて異なった姿を呈することになる。し

かしそれ以降、多帯化は衰退の過程を辿っており、特に体部文様を二分した構成（図47-7・8）は、大洞C1式には殆ど見出せず、山内氏の模型図（図38）にあるように、頸部文様帯と体部文様帯の重畳（図47-4～6）に収斂されることが、予察される。

（7）小 結

本節の目的は、山内清男氏の系統観を細部にわたって検証することにあった。晩期の文様帯には、（口）頸部文様帯としてのⅡcとⅡa、体部文様帯としてのⅡと「Ⅲ」が存しており、系統的な変遷が看取される。

Ⅱc文様帯は、縄文のない滑沢のある面に加えられた文様帯で、直上する器形の（口）頸部文様帯（旧Ⅱc文様帯）と、口縁部が短く外折した頸部文様帯（新生Ⅱc文様帯）の、二様の形態が存している。その内新生Ⅱc文様帯の盛行が、大洞BC1式と同BC2式を識別する上での指針になることを指摘してきた。新生Ⅱc文様帯は、既然大洞BC1式段階に成立していたと見なされるが、それが一般化したのが、大洞BC2式の段階に相当する。その消長は、旧Ⅱc文様帯が大洞C1式で消滅したのに対し、新生Ⅱc文様帯は大洞A式まで連綿と継承されており、後者が亀ヶ岡式土器に通徹した文様帯であったことが指摘されよう。

晩期Ⅱa文様帯は、後期の系譜を引くものであるが、縄文のない滑沢のある面に加えられた文様帯である。文様モチーフはⅡcと同様であり、屈折部の有無のみが差異となる。大洞B2・BC1式を特徴付けるが、同BC2式では少数となり、同C1式以降姿を消す。

また、矩形・菱形を基調とした体部の磨消文様として、「Ⅲ文様帯」の意義を確認してきた。体部の磨消文様は、後期装飾深鉢のⅡ文様帯の直系にあるのではなく、大洞B2式に新たに生成したと見なされ、同BC1式以降に盛行する。その成立期に当たる大洞B2新式～BC1式では、矩形・菱形を基調とした磨消文様が主体となるが、後続型式の大腿骨文・雲形文等の曲線的な磨消縄文へと継承される。

以上、文様帯の在り方・重畳から、型式区分の見通しを考察してきた。文様帯の構成は、型式を区分する上で、厳密な指標とはなり得ないかもしれない。しかし、系統立った変遷が想定されることから、有力な指標として位置付けられることを確認した次第である。

F 曲田 I 遺跡出土土器の編年的位置について

これまでの検討を踏まえて、曲田 I 遺跡 E Ⅲ-011 住居跡から出土した装飾深鉢・鉢形土器と浅鉢形土器について、編年的位置を明示して行きたい。

(1) 装飾深鉢・鉢形土器の編年的位置

当該住居跡から出土し、報告された装飾深鉢・鉢形土器(108点)の内、筆者が図示した資料は、94点である(図11~13)。

入組三叉文系の土器 (口) 頸部文様帯に入組三叉文を施文した装飾深鉢・鉢形土器は、48点出土している。その他に、羊歯状文と C 字文を共有した土器が、各 1 点ずつ含まれている。入組三叉文施文の土器は、いずれも入組三叉文 1c・2a・2b 類で占められており、古の様相である 1a 類は一切認められない。

当該住居跡には、八幡遺跡(図26)で指摘した、伸長化・平行化・密着化した大洞 BC 1 式に特徴的な入組三叉文は、見出すことができない。しかし図12-65・66は、背向する主軸線が近接し、水平化しており、関連を持つ可能性も否定できない。

羊歯状文と入組三叉文を共有した事例として著名な図12-85の体部の入組三叉文 1b 類は、三叉文が水平化しており、Z 字状の陽刻部を意識した構成と見て取れなくもない。図11-35と図12-84は、祖型的な羊歯状文 1 類で構成される。35の口端には B 突起 2b 類、84には B 突起 4a 類が配されており、いずれも大洞 BC 1 式に比定されよう。

体部文様帯に菱形基調の磨消文様を施した図12-86は、口端が B 突起 2b 類に近似した構成となっている。口頸部は接着しない入組三叉文 2a 類が施されるが、Ⅱc と「Ⅲ文様帯」の重畳は、大洞 BC 1 式に顕在化しており、本例も同 BC 1 式に位置する可能性を有している。

入組三叉文系の土器の口端形態には、三山状突起が顕著に見られ、漣状縁・小波状縁が多数を占める。上記の口端形態は、古の様相と見なすことができ、当該住居跡出土の羊歯状文施文の土器には、あまり認められない。口端に縄文帯を巡らす例は、3 例確認できる(図12-62・65・66)。C 字文や羊歯状文施文の土器にも、それぞれ 1 例ずつ存しており(図11-37、図12-85)、大洞 B 2 式~BC 1 式に認められる。後期以来の I 文様帯の残影と捉えるならば、古の様相と見なせるが、大洞 B2 新式~BC1

式になって、口端を画する意識が再び強まったとの解釈も可能であろう。

装飾鉢 B 類の体部文様帯の下端には、「ノ字文」が施される(図12-77・78)。いずれも、体部文様帯が半円を囲う魚眼状三叉文 4 類で構成さる。魚眼状三叉文 4 類を伴う「ノ字文」は、大洞 BC 1 式にも存するが、同 B 2 新式に顕著であり、筆者は 77・78 を大洞 B 2 新式に位置付けている(小林2004)。

図11-1 は、口頸部文様帯に縄文地文を有し、文様帯の下端が 2 条の沈線で画され、口端に三山状突起を有する点で、古の様相を帯びている。須藤隆氏は、当該住居跡に晩期初頭大洞 B 1 式の資料の存在を指摘した(須藤1996a) が、本例を指示したのかもしれない。筆者は、大洞 B 2 式の範疇に含まれるものと推察している。

以上を纏めると、当該住居跡出土の入組三叉文施文の鉢類の多くは、大洞 B 2 新式に位置付けられることになろう。しかし、三叉文の特徴や口端形態・文様帯構成から、一部は大洞 BC 1 式に相当すると判断される。

羊歯状文系の土器 羊歯状文を施文した装飾深鉢・鉢形土器は、32点出土している。羊歯状文は大洞 BC 1 式に成立するので、いずれも大洞 BC 式の範囲にある。当該住居跡の羊歯状文の特徴は、末端の咬み合わない羊歯状文 2 類が卓越し、末端の咬み合う羊歯状文 1 類が 2 例と僅少である点にある。

羊歯状文 1 類(図11-35、図12-84)については、入組三叉文でも言及したが、三叉文に短沈線が付加され、三叉文の一端と同化し、入組三叉文から羊歯状文 1 類への過渡的な様相を呈している。従って、大洞 BC 1 式に位置付けられる。

羊歯状文 2 類に比定される資料は、12点存在する。その内、定型的と言えるのは 6 例(図11-45・48・51、図12-73・82・85)、更に村田章人氏の施文原則(村田2000)を遵守した例となると、僅か 3 例(図11-48・51、図12-82)に過ぎず、殆どが変則的な羊歯状文であると言わざるを得ない。

図11-11・50・52、図12-72・73・85は、祖型的な羊歯状文と見なされる。陰刻が細く、連結原則が弱く、珠文状の陽刻部の形状も不揃いであり、羊歯状文の施文原則が遵守されず、定型的な羊歯状文には至っていない。定型的と見なした羊歯状文においても、図11-51は主軸

線の終点部の珠文が分離しておらず、また図12-82は、該域に特有の「中鉢」（林1993）に相当することから、大洞BC 1 式に比定されよう。

図11-9・10・12は、「羊歯状文手代森型」に相当する。当該文様は大洞BC 1 式期に確立するが、盛行するのは同BC 2 式期である。地域的に限定された文様であるが、当該住居跡例は刻まれた陰刻が細く、陽刻部が大きく作出されることから、大洞BC 1 式に相当すると判断される。

図12-83のⅡ文様帯には、彎曲部に特有の羊歯状文が施されている。当該文様も大洞BC 1 式に確立し、同BC 2 式の注口土器に盛行するが、83は陽刻部が大きく作出されており、同BC 1 式に位置付けられるであろう。

截痕列を巡らせた資料には、陽刻部が大きく作出された例が多く認められる（図11-7・8・40~42、図12-74・87）。また、羊歯状文2類の上端のみを描出した鍵状の陽刻部からなる例も、同様である（図11-49、図12-83）。陽刻部形状の保持原則が弱く、大洞BC 1 式に比定されると判断される。

体部に磨消縄文を施した図12-88は、体部文様が繁縷化しており、方形基調の磨消部が連結した構成となっている。八幡遺跡（図26-4・8・9）で指摘したように、体部文様の繁縷化は、大洞BC 1 式の特徴である。図12-87の体部の双頭渦文は、大洞B 2 新式の連弧文の系統にあり（図19-21・22）、同じく大洞BC 1 式に位置付けられる（小林2004）。

なお、羊歯状文系の土器の口端には、珠紋縁やB突起4b類が卓越しており、B突起3c類（図11-49）や4a類（図12-84）も認められる。

このように見てくると、当該住居跡出土の羊歯状文系の装飾深鉢・鉢形土器の内、大洞BC 2 式に位置付けられる資料は、極めて少ないことになる。注口土器には、大洞BC 2 式が指摘されている（図17-3）。しかし、主要器種である鉢類には見出せず、殆どが大洞BC 1 式に比定される。珠文状の陽刻部が細かく作出された図11-43・44は、大洞BC 2 式の可能性も否めないが、底部直上の無文帯の区画線は1条のみであり、古相の様相を留めている。

当該住居跡出土の羊歯状文系の土器には、Ⅱa文様帯の発達が顕著であり、口縁部が短く外折した新生Ⅱc文

様帯は認められない。新生Ⅱc文様帯の欠如は、当該資料の多くが大洞BC 1 式に含まれる可能性を暗示している、と言えるであろう。

C字文系の土器 C字文施文の装飾鉢は、9点出土している。C字文は、上下からの入り組みや複線構成が、古相の様相と見なされる。図11-36、図12-69・70・80が該当するが、この内80は、入組三叉文が同居しており、大洞B 2 新式に位置するであろう。36にはB突起2b類、69には連続的な三山状突起2b類、70にはB突起4a類が配され、新しい様相を帯びており、大洞BC 1 式に相当する可能性も考えられる。

大洞BC 1 式に比定されるのは、図11-37・38である。37は、上下の区画線から伸びた弧線が反転したC字文で構成され、38は、口端にB突起4a類が連続的に配される。

図12-71は、珊瑚状突起が配される。珊瑚状突起は大洞B 2 新式~BC 1 式に盛行するが、本例の口端にはB突起が連続的に配されており、大洞BC 1 式に相当すると思われる。

その他の土器 上記以外の文様では、入組带状文・弧線文・横S字状文・点列文等が認められるが、いずれも少数でしかない。

入組带状文（図13-90）は古相の様相であり、三山状突起との結び付きが強く、大洞B 2 式に位置付けられる。縄文地文を持たない崩れた入組带状文の台付鉢は、秋田県内の米代川流域に顕著であり（図22-22~24）、本例もその関連が想定される。

二重の弧線文（図13-93）は、「弧線文を伴う小波状縁」との関連が想定される。当該文様は、大洞BC 1 式には継承されないことから、同B 2 新式に比定されるであろう。

横S字状の陰刻文は、2例出土している（図13-91・92）。羊歯状文1類の主軸線が陰刻で表現されたと見るならば、大洞BC 1 式に比定される。しかし、入組三叉文の主軸線と見なすことも可能である。また、文様が口端に露出し、古相の突起（B突起1類）が配され、屈折部に点列を巡らす等、大洞B 2 式の様相も留めており、ここでは判断を保留しておきたい。

点列帯を有する装飾深鉢（図11-13）は、新生Ⅱc文様帯を構成する唯一の資料である。文様帯を重視するな

らば大洞BC 2 式に相当するが、同式には点列帯で構成された土器は少なく、同BC 1 式に相当すると考えられる。本例から、新生Ⅱ c 文様帯が大洞BC 1 式に生成していたと推察されるが、まだ主体的位置は占めていなかったことが窺える。

底部直上の無文帯 当該住居跡では、装飾鉢の底部直上の無文帯の上端区画が、1 条の沈線で構成された例が殆どである。底部の区画は大洞 B 2 式になって生成し、同 B C 2 式まで継承されるが、口縁部が短く外折した新生Ⅱ c 文様帯の例を見てみると、底部の区画線は2 条の沈線を囲繞した例が多く、また截痕列となる例も散見される(図22-33)。従って、平行沈線や截痕列による区画、また高台付け根の截痕列や文様を有する例は、大洞 B C 2 式に位置付けられると考えられる(図22-34、図37b-15、図47-2・3、図49-4)。明確な指針ではないが、型式区分の目安としては有用であろう。

「中鉢」について 「中鉢」は、口径と器高がほぼ等しい平底の装飾鉢として、曲田Ⅰ遺跡に特徴的であることが、林謙作氏によって指摘されている(林1993)。具体的には、B 類の図12-62・76・80・82が相当するが、A 類にも認められるという。

口径と器高がほぼ等しいB 類の装飾鉢は、北上川中・上流域～馬淵川・新井田川流域の、大洞B 2 新式～BC 1 式に散見される(図22-29、図30-10、図32-12・13・23・29)。Ⅱ a 文様帯のみと、Ⅱ 文様帯を重畳させた、二様の構成が存している。祖型的な羊歯状文を施した装飾鉢B 類が顕著であり、林氏が指摘したように、該域に特有の器種類型として、特記されるものであろう⁷¹⁾。

小 結 以上、装飾深鉢・鉢形土器の編年の位置について言及してきた。検討した限りでは、大洞B 2 新式～BC 1 式に比定される資料が多く、時間幅の限られた資料であると言えるであろう。但し入組三叉文系の土器には、大洞B 2 新式と同BC 1 式のいずれに位置するのか、判然としない例も多く存しており、筆者は入組三叉文系の主体は大洞B 2 新式にある、と理解している。一方羊歯状文系の土器では、大洞BC 1 式に位置付けられる例が殆どであり、C 字文系は大洞B 2 新式と同BC 1 式とにそれぞれ位置付けられる。

(2) 浅鉢形土器の編年の位置

浅鉢形土器は、一部の無文を除いて全て加飾されてお

り、装飾鉢との関連性が極め強い。当該住居跡から出土し、報告された資料は、18点である(図15)。

平底浅鉢 平底浅鉢は、いずれも頸部界で屈折して、口頸部が外反して立ち上がる器形で、三叉文系の文様が卓越し、その他に祖型的な羊歯状文(図15-6)や菱形文様(図15-3)の例が存在する。

当該住居跡からは、珊瑚状突起を配した浅鉢が2 例出土している。4 は二山珊瑚状突起で、口頸部の入組三叉文から大洞B 2 新式に位置付けられる。3 は三山珊瑚状突起で、背向した弧線文と菱形文が交互に配される。口端のB 突起は大振りで、三山状突起も一部配される。B 突起中央の窪みに菱形の一端が露出したり、また三山状突起に逆J 字状の短沈線が付加された構成は、大洞B 2 新式に顕在化することから、本例も同様の位置付けが可能と思われる。

1 は、正面性を表徴する3 個のB 突起で構成される。中心的な突起の両脇に副次的な突起を配する構成は、大洞B 2 新式に顕在化するが、1 の入組三叉文は、突起直下の縁取りの沈線を兼ね、口部の装飾に関与していることから、大洞BC 1 式に位置する可能性が想定される。

2 は、Ⅱ a とⅡ 文様帯に魚眼状三叉文4 類が施される。Ⅱ a は三叉文の末端が接着しない4 a 類、Ⅱ は接着した4 b 類であるが、大洞B 2 新式に盛行する文様であり、同式に位置付けられる。屈折部には縦長のB 突起が付されており、その初出となるものである。

5 は、明瞭な屈折部を持たない器形であるが、口頸部文様帯はⅡ a に相当する。平縁で入組三叉文2 a 類が施されており、大洞B 2 式に位置付けられる。

6 は、体部が強く内彎した底径の大きな浅鉢で、頸部文様帯は祖型的な羊歯状文で構成される。羊歯状文は同一方向の鍵の手状の沈線が2 段ずらして施されており、沈線の上段のみに縦位の短沈線が加えられる。同一方向の鉤爪状の区画が、2 段配された様相を呈しており、村田氏の施文原則は遵守されていない。祖型的な羊歯状文から、大洞BC 1 式に位置付けられる。

台付浅鉢 台付浅鉢は、7 点出土している。その内6 点が、二帯の構成で、台付の装飾鉢に近似しており、分類は微妙と言わざるを得ない。三叉文系の文様が卓越するが、羊歯状文(図15-7)とC 字文(図15-10・13)も存在する。

10～12は、台付の装飾鉢に近似した例で、口端には三山状突起とB突起が交互に配され、高台付け根の直下に凸彎部が発達する。10のⅡa文様帯には、上下で交互に渦巻くC字文2類が施され、渦巻文は複線で構成される。11の体部文様下端には、「ノ字文」と関連を有する巴状文様が施される（小林2004）。3例とも大洞B2新式に位置付けられるが、11の口内には沈線が圍繞されており、その初出となるものである。但し山内清男氏は、大洞B2新式に口内の沈線は存在しないと裁断を下しており（山内1930）、同氏の定義に拠るならば、11は大洞B2式ではないことになろう。

8・9のⅡaとⅡ文様帯には、背向する主軸線が近接した入組三叉文が施されている。8については保留するが、9は口端のB突起（2a類）が連続的に配されており、大洞BC1式に位置付けられるであろう。

7はⅡa文様帯のみで構成され、羊歯状文2類が施される。口端にはB突起4a類が配され、内彎著しい体部の作出から、大洞BC1式に比定されよう。

13は、Ⅱa文様帯と体部の「Ⅲ文様帯」に、C字文2類が施される。Ⅱa文様帯には上方からJ字状に渦巻く文様、「Ⅲ文様帯」には上下から伸びた複線構成の渦巻文が施されるが、渦巻文の起点は上下交互とはならない。口端には、珊瑚状突起に関連を持つ粘土紐が貼付される。恐らく、大洞BC1式に位置付けられるであろう。

10～12に見られる高台の膨らみは、壺形（注口土器）のⅡb文様帯（図39-58）との相関性が推定される。大洞B2新式～BC1式の壺形の頸部には、凸彎部が発達する（図16-1）が、同時期の台付鉢や浅鉢では、高台付け根の直下の膨らみも顕著となる（図12-77）。高台には円形の透かしが穿たれ、入組三叉文や魚眼状三叉文の施された例が多く、大洞BC1式にも継承されるが、同式の壺形の凸彎部にも、陰刻文様の三叉文が残存する。壺形の頸部と肩部の境界、台付鉢の底部と高台部の境界といった強く屈折した部位に接した凸彎部の在り方は、相似の関係だけでは説明できない、製作者側に共通した意識が働いていたことを窺わせる。

丸底浅鉢 丸底の浅鉢の内、文様が明確なものは、2点に過ぎない。

15は、口頸部文様帯が入組三叉文2a類で構成され、口端が小波状縁をなすことから、大洞B2新式に比定さ

れよう。

14の口頸部は、菱形文と背向した弧線文の交互文様、体部は菱形基調の入り組む磨消文様で構成される。底部は作出されず、体部文様帯の下限は存在しない。大洞B2新式か同BC1式かは判然としないが、体部文様が底部全面に及んでいることから、恐らく後者と思われる。

小 結 浅鉢も装飾深鉢・鉢形土器と同様に、大洞B2新式～BC1式に位置付けられ、同BC2式に比定される例は認められない。平底浅鉢にはⅡa文様帯のみの構成、台付浅鉢にはⅡa文様帯とⅡ文様帯の重量が、一般的である。

縦長のB突起は、括れを持つ器形との相関性が強く、大洞B2新式の浅鉢に現出するが、その遡源は、晩期初頭の横位穿孔の瘤状突起（図24-21）に求められるであろう。また口内の沈線においても、大洞B2新式の浅鉢が初現となる。

以上のように、大洞BC2式に顕在化する属性が、他の器種に先駆けて、大洞B2新式の浅鉢に現出していることは、特記すべきことであろう。

G 関連する周辺遺跡との比較

これまでの検討を踏まえて、曲田I遺跡の他の遺構内出土の資料や、馬淵川下流域と北上川上流域の関連する遺跡の一括性の高い資料について、幾つかの比較を試みてみたい。

（1）曲田I遺跡HⅣ-012住居跡（図48）

曲田I遺跡HⅣ-012住居跡は、晩期集落の東端に位置しており、EⅢ-011住居跡からは東方80mの位置関係にある（図2）。前述したように小型（径2.6m）の円形の竪穴住居跡で、壁高は20cmを測る。入組三叉文を施した台付の装飾深鉢（図48-1）が、炉跡に埋設されていたことから、住居跡は大洞B2式期に営まれ、廃絶されたことが想定される。

出土遺物は、大洞B2式～C1式の土器が大半を占めるが、縄文中期の土器片も少量含まれており、その他に岩版・石棒・磨製石斧・円盤状石製品・石鎌・石匙・石錐等も出土している。遺物は埋土上層から多数出土しているが、出土位置が明確なのは、炉跡出土の台付装飾深鉢（図48-1）に限られ、他の遺物の出土位置を跡づけることは困難である。

図48-1～26が、報告書に掲載された実測図資料の抜

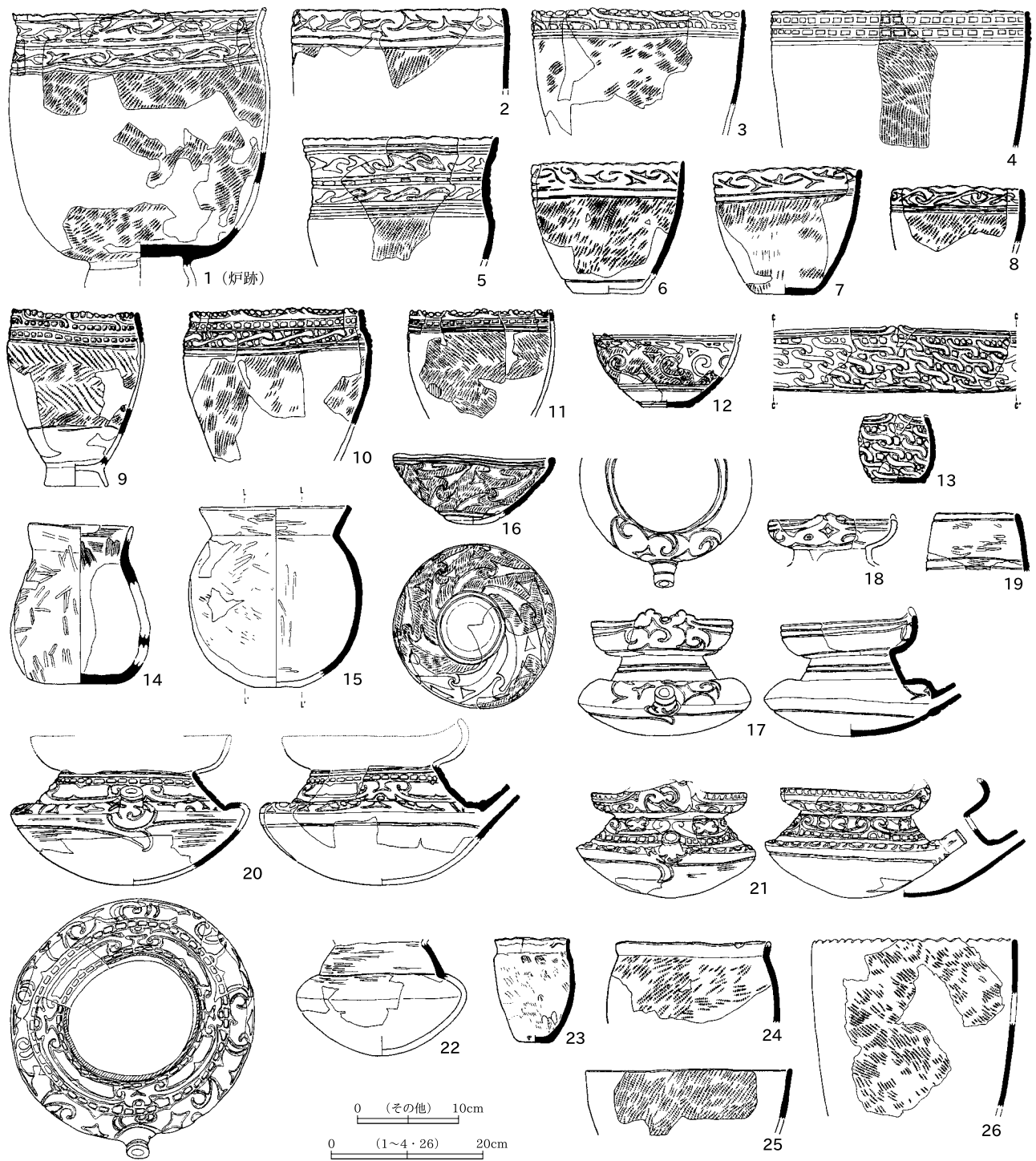


図48 曲田 遺跡H -012住居跡出土土器(抜粋)

粹であるが、装飾深鉢（1～5）、装飾鉢（6～13）、壺形（14・15）、椀形（16）、注口土器（17～22）、粗製深鉢・鉢（23～26）で構成される。

図示資料では、入組三又文施文の装飾深鉢・鉢（1・2・6～8）が大洞B2式、羊歯状文施文の装飾深鉢・鉢（3・4・9～11・13）が同BC式に位置付けられる。注口土器では、22が大洞B1新式～B2古式、17～19が同B2式、20が同BC1式、21が同BC2式にそれぞれ相

当し、椀形の16は、大洞BC2式に位置付けられる。

上記したようにHⅣ-012住居跡は、大洞B2式～BC2式(破片資料では大洞C1式)までの資料が含まれており、EⅢ-011住居跡に近似した様相と考えられる。但し、EⅢ-011住居跡が大洞B2新式～BC1式に限られるのに対し、HⅣ-012住居跡には大洞BC2式や同C1式も含まれており、廃棄場所としての時間幅が長期にわたっていた点で、差異が認められる。

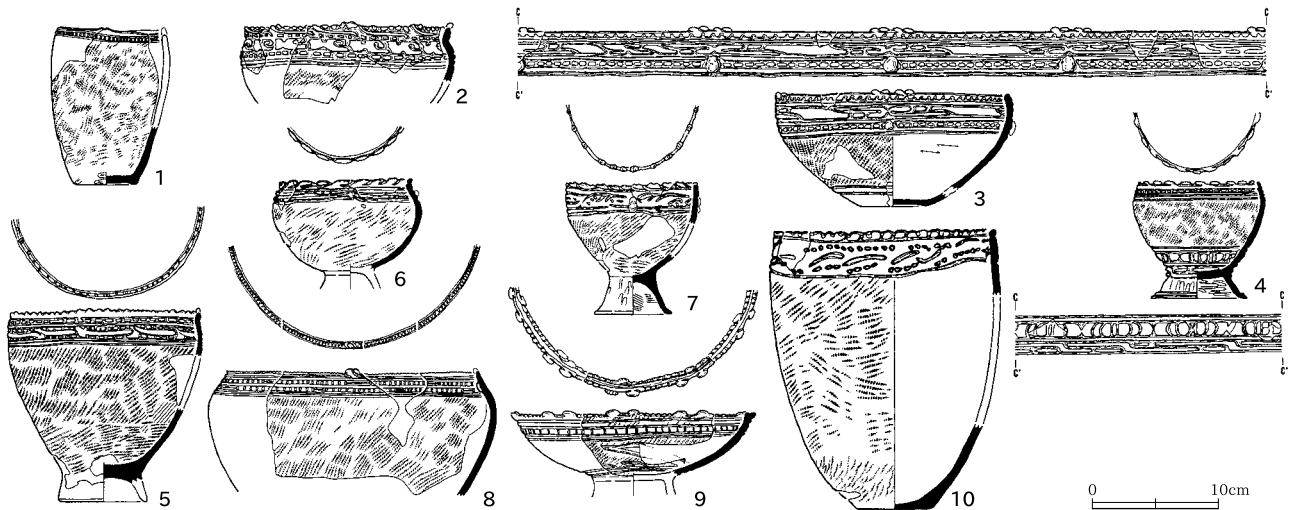


図49 曲田 遺跡F Ⅲ-0116住居跡出土土器（抜粋）

（2）曲田Ⅰ遺跡FⅢ-0116住居跡（図49）

曲田Ⅰ遺跡FⅢ-0116住居跡は、晩期集落の中央南寄り、EⅢ-011住居跡の南東方35mに位置している（図2）。住居跡の東側半分が削平されているが、EⅢ-011住居跡と同様にやや大型の住居跡（径5.9m）であったと想定されており、壁高は65cmを測る。

埋土からは、大洞B1古式～C1式の土器が多数出土したが、床面に接するところから図49-1・8が出土しており、下部の埋土中に新期の遺物が多く含まれる傾向が、指摘されている。

図示資料は、報告書掲載資料の内、羊歯状文や截痕列を施した装飾深鉢・鉢の実測図資料を抜粋したものである。いずれもⅡc文様帯の上下幅が狭まっており、口縁部が短く外折し（図49-2・5・6）、口上端に溝が巡らされ（9）、口端が細かく刻まれ（5・8）、内外面に陰刻を施した突起列が配される（4・6）等、大洞C1式に連なる新しい様相が窺える。当該住居跡には、大洞BC1式に相当する資料は一切認められず、EⅢ-011住居跡に後続する大洞BC2式の纏まった事例として、特記されるものであろう⁷²⁾。

（3）青森県福地村坵渡遺跡第1号竪穴（図50）

^{ごみわたり}
坵渡遺跡は、青森県三戸郡福地村大字坵渡に所在する晩期前半期の大規模遺跡である。馬淵川下流域の小支流を南に約1.5km 溯った右岸段丘上（高位段丘面）に位置しており、曲田Ⅰ遺跡とは、同じ馬淵川水系の源流部（曲田Ⅰ遺跡）と下流部（坵渡遺跡）の位置関係にある。発掘調査は学術調査として、1995年青森県立郷土館により9日間にわたって実施された（工藤ほか1997）。

第1号竪穴は、長径3m以上の円形乃至は楕円形の平面形を呈するが、遺構の南東側半分が調査されただけで、完掘には至らなかった。竪穴住居跡と推測されているが、炉跡や柱穴は未検出で、大きさの割に掘り込みが深く、壁の形状が不明瞭な部分も存することから、「竪穴」に区分されている。また、フラスコ状土坑や溝跡が重複関係にあるが、両者とも上面が、第1号竪穴に切られている。

遺物は、第1号竪穴内中位に皿状に堆積した2層（黒色土）から多く出土した。竪穴が埋没する過程で、堆積土中に形成された捨て場跡と考えられ、特に遺構の中央部に希薄で、南東壁寄りに濃密で厚い堆積が認められたことから、遺構の南東側から主に廃棄されたと推測されている。出土遺物は、大洞B式～BC式の土器が大半を占めるが、縄文後期の土器片も少量含まれている。その他に、土偶破片（4点）・円盤状土製品（29点）・耳飾（1点）・石鏃（13点）・石錐（2点）・石匙（2点）・磨製石斧（2点）・円盤状石製品（2点）等も出土しているが、特に円盤状土製品と石鏃が際立っている。

図50-1～26は、第1号竪穴2層から出土した土器資料の内、出土状況の跡づけが可能な実測図資料のみを抽出したものである。いずれも2層からの出土であるが、3層出土も若干含まれている⁷³⁾。器種は装飾鉢（5～9・16）、粗製深鉢・鉢（15・17）、浅鉢（10・11）、壺（12～14・18～26）、注口土器（1～4）で構成される。その他に、図50からは省かれたが、装飾深鉢や片口土器等も含まれている⁷⁴⁾。

図示資料では、入組三叉文が施された台付浅鉢（10・

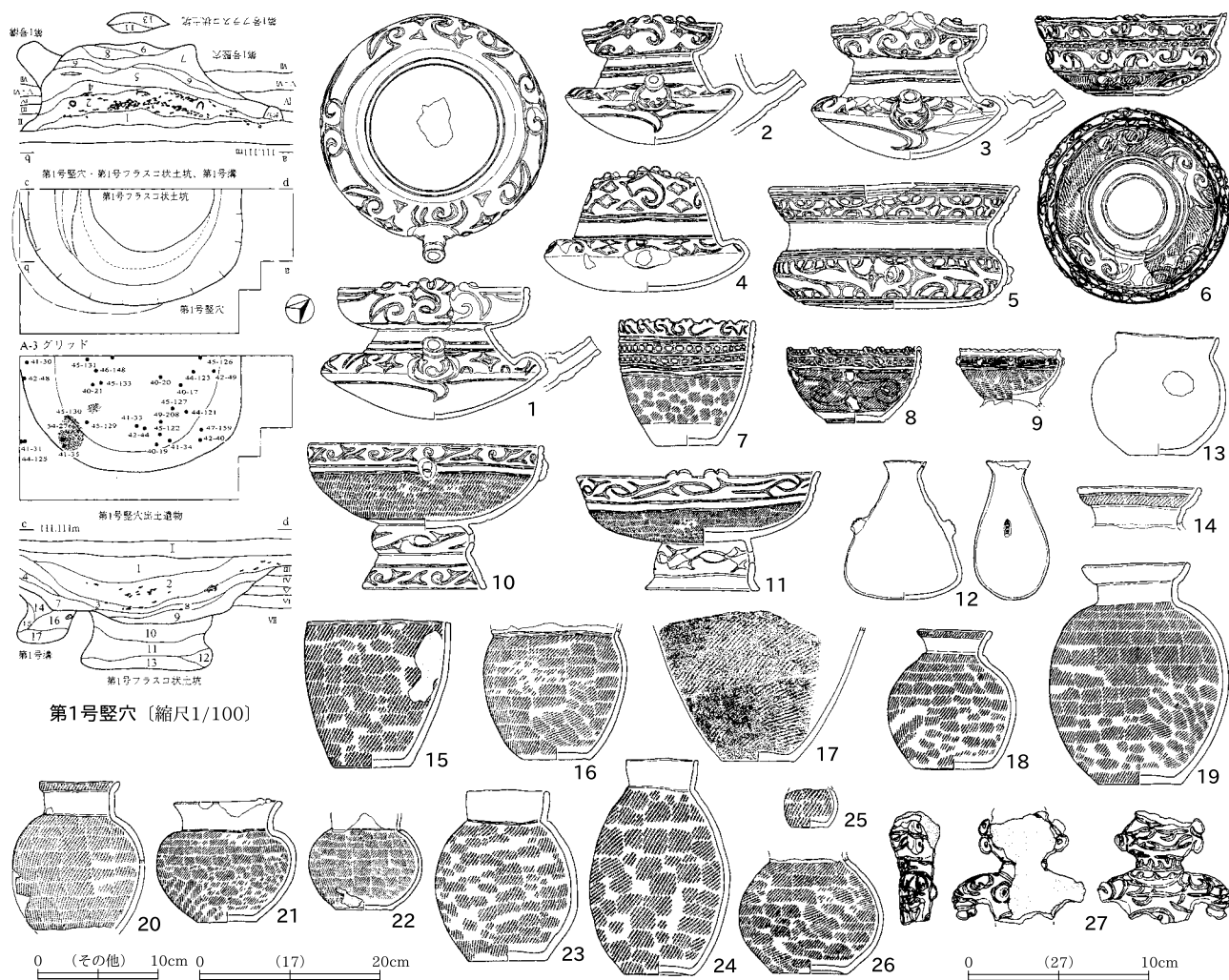


図50 青森県福地村坵渡遺跡第1号竪穴出土土器(抜粋)(工藤ほか1997)

11) や、頸部文様帯を持たない注口土器A類(1～3)が、大洞B2新式に位置付けられる⁷⁵⁾のに対し、羊歯状文が施された裝飾鉢(5・7・8)は、大洞BC1式に比定されるであろう。8は、先に指摘した羊歯状文手代森型1類に類似した構成である。C字文が3段に構成され、文様帯の多帯化が顕著な6も、大洞BC1式に比定されると思われるが、口縁部が短く外折した9は、同BC2式に含まれる可能性が高い。壺形(12～14・18～26)の型式区分は判然としないが、無文壺が少なく、縄文壺が多数を占めており、また小型の縄文壺(18・20～23・25・26)が卓越する点で、曲田I遺跡EⅢ-011住居跡とは、様相を異にしている。

図50-27は中実の遮光器土偶で、体下半部を欠損し、正面が剥離しているが、頸部の刻み目の加え方から、大洞BC1式に位置付けられる。

坵渡遺跡第1号竪穴出土の資料は、筆者の理解では大洞BC2式を若干含むものの、殆どが大洞B2新式と同

BC1式に帰属される資料と評価される。その点で、曲田I遺跡EⅢ-011住居例に最も近似した事例と言えるであろう。入組三叉文施文と羊歯状文施文の土器が、「互いに入り混じった状態で出土」しており、当該遺構について、報告者である工藤大氏は、大洞B式と同BC式の混在性を指摘している。

坵渡遺跡第1号竪穴の文様の比率を個体数の多い鉢形土器類(精製・半精製)で見ると、大洞B式(三叉文)が39%(40個体)であるのに対し、大洞BC式(羊歯状文ほか)が62%(63個体)となり、2:3の割合で後者が卓越する(工藤ほか 前掲)。一方、曲田I遺跡の両者の比率は5:3と、三叉文系が多数を占めており(表1)、型式区分を文様の出現頻度に求める須藤隆氏の所説(須藤1992)に従うならば、曲田I遺跡よりも坵渡遺跡の方が、新しい様相を指示していると思なされるであろう。しかし、報告者が指摘したように、当該資料は混在である可能性が極めて高く、筆者は曲田I遺跡と同様に、大洞B2



1～13 捨て場出土土器群 32～41 捨て場Ⅱ層④出土土器群

図51 青森県八戸市八幡遺跡捨て場出土土器（抜粋）（須藤1992）

新式～BC1式の限られた時間幅の廃棄資料と評価している。

(4) 青森県八戸市八幡遺跡捨て場 (図51)

八幡^{やわた}遺跡は、青森県八戸市大字八幡字館の下に所在する晩期前半期の大規模遺跡である。馬淵川河口から9km溯った右岸の低位段丘に立地しており、丁度馬淵川に沿って八戸低地が開ける谷口部に相当する。曲田I遺跡とは、同じ馬淵川水系の源流部と下流部の関係にあり、馬淵川を溯った南西方4.5kmには、前記した坨渡遺跡、台地を挟んだ東方5kmには、著名な是川中居遺跡が位置している。発掘調査は、八戸市教育委員会により1987年に実施され、堅穴住居跡2棟(後期末～晩期前葉)と土坑墓4基、その他に「捨て場」が検出されている(藤田ほか1987)。

捨て場は、川に向かって傾く緩斜面に、南北13m、東西15mの楕円形の範囲で形成されていた。土質は黒色シルト(Ⅱ層)で、層厚は20～45cmを測り、下位には焼土ブロック層(Ⅱ④)が、5cmの厚さで堆積していた。付近からは炉跡2基、また包含層直下からは第7号堅穴住居跡が検出されている。

遺物としては、縄文後期後葉～晩期中葉(大洞C2式)の土器(製塩土器を含む)や、石器(石鏃・石錐・石匙・石鏃・磨製石斧・凹石等)、土製品(土偶・円盤状土製品・土玉・耳飾等)、石製品(有孔石製品・石剣・岩版・環状石製品・軽石製石製品)、骨角器、動物遺存体等が出土したが、土器は大洞B式と同BC式が多数を占めている。

調査では、堆積土の最も厚い部分(G29グリッド杭)を中心に、3m四方の範囲が、10cm毎に掘り下げられた。その結果、五つの人為的な層位として遺物を取り上げられたが、層序による型式的な差異は見出せず、大洞B式と同BC式は混在した状況にあったことが報告されている⁷⁶⁾。

捨て場から出土した土器については、多少の混在を認めながらも、一括性を指摘する研究者が大勢であり、曲田I遺跡EⅢ-011住居跡と同様の位置付けがなされている。即ち須藤隆氏は大洞B2式(須藤1992)、林謙作氏と金子昭彦氏は大洞BC1式(林1993、金子1992a)に比定しており、鈴木加津子氏は大洞BC1式3細別の基準資料(鈴木加津子1993)に位置付けている。筆者の見

解は、既に図26に明示したが、大洞B2新式～BC1式を主体とした混在資料と理解している。

図51は、須藤隆氏が紹介した捨て場から出土した土器の一部であり、図51-32～41は下位の焼土ブロック層(Ⅱ④)から出土したものである(須藤1992)。報告書では、捨て場から出土した土器が破片を含めて723点報告されている(藤田ほか 前掲)。器種は装飾深鉢(2・3)、装飾鉢(4～10・16～21・23・25・29・32～36)、粗製深鉢(1)、浅鉢(11～15・22・24・37・38)、壺(30・31・39)、注口土器(26～28・40・41)等で構成され、その他の器種としては、図51から省かれたが、粗製鉢と皿形も含まれている⁷⁷⁾。

図示資料では、入組三叉文が施された装飾深鉢・鉢(2・3・6?・7?・10?・16～18・32・34)が、大洞B2新式に比定されるのに対し、同じ入組三叉文でも、4・5・8・14?・15・20・23・35・36は、大洞BC1式に比定されよう。C字文が施された装飾鉢・浅鉢では、21・37が大洞B2新式に相当するが、29は伸長した三叉文の在り方から大洞BC1式の可能性が高い⁷⁸⁾。また羊歯状文施文の例には、口縁部が短く外折した新生Ⅱc文様帯は認められず、いずれも大洞BC1式に相当すると判断され、15や38は祖型的な羊歯状文の様相を留めている。注口土器では、41が大洞B2古式、26が大洞B2新式、28・40が大洞BC1式に、それぞれ比定される。27は、馬淵川・新井田川流域の大洞BC1式に特有の注口土器である(小林2003)。

以上見てきたように、図示資料は大洞B2古式～大洞BC1式の内容を示しており、殆どが大洞B2新式～BC1式に相当すると考えられる。報告書所収の資料には、大洞BC2式も含まれているが、主体は曲田I遺跡に近似した内容であり、筆者は限られた時間幅の混在資料と位置付け、報告書の見解を支持している。

(5) 岩手県玉山村前田遺跡1号堅穴住居跡 (図52・53)

前田遺跡は、岩手県岩手郡玉山村馬場字前田に所在する北上川上流域の晩期前半期の拠点遺跡である。北上山系姫神山(標高1123.8m)の西北麓の丘陵緩斜面(標高325m)に立地しており、1987～89年の3次にわたって、東北大学文学部考古学研究室より発掘調査が実施された。調査では、堅穴住居跡が3棟検出されたが、その内1号堅穴住居跡からは、後期末葉～晩期前葉の土器型式

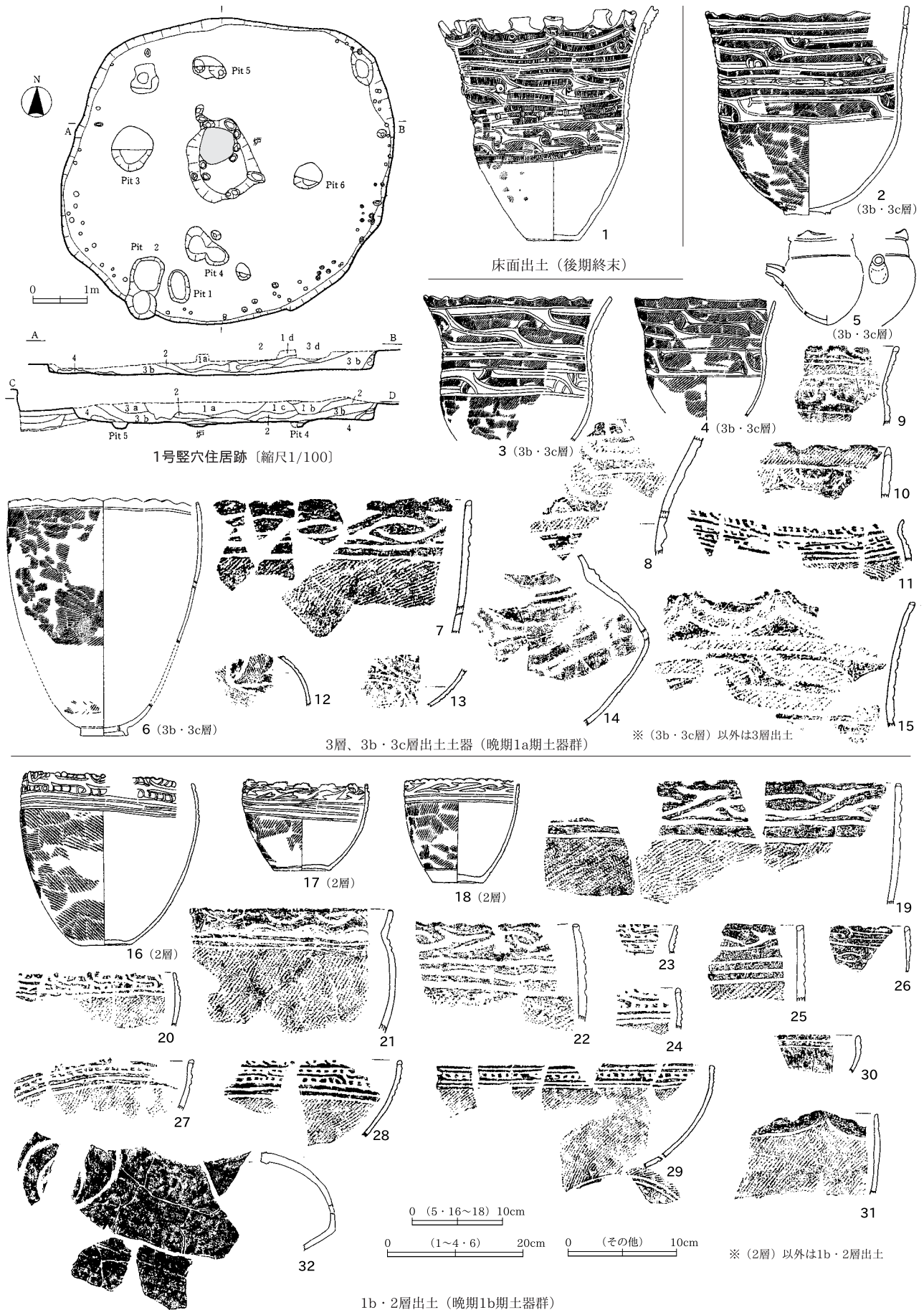
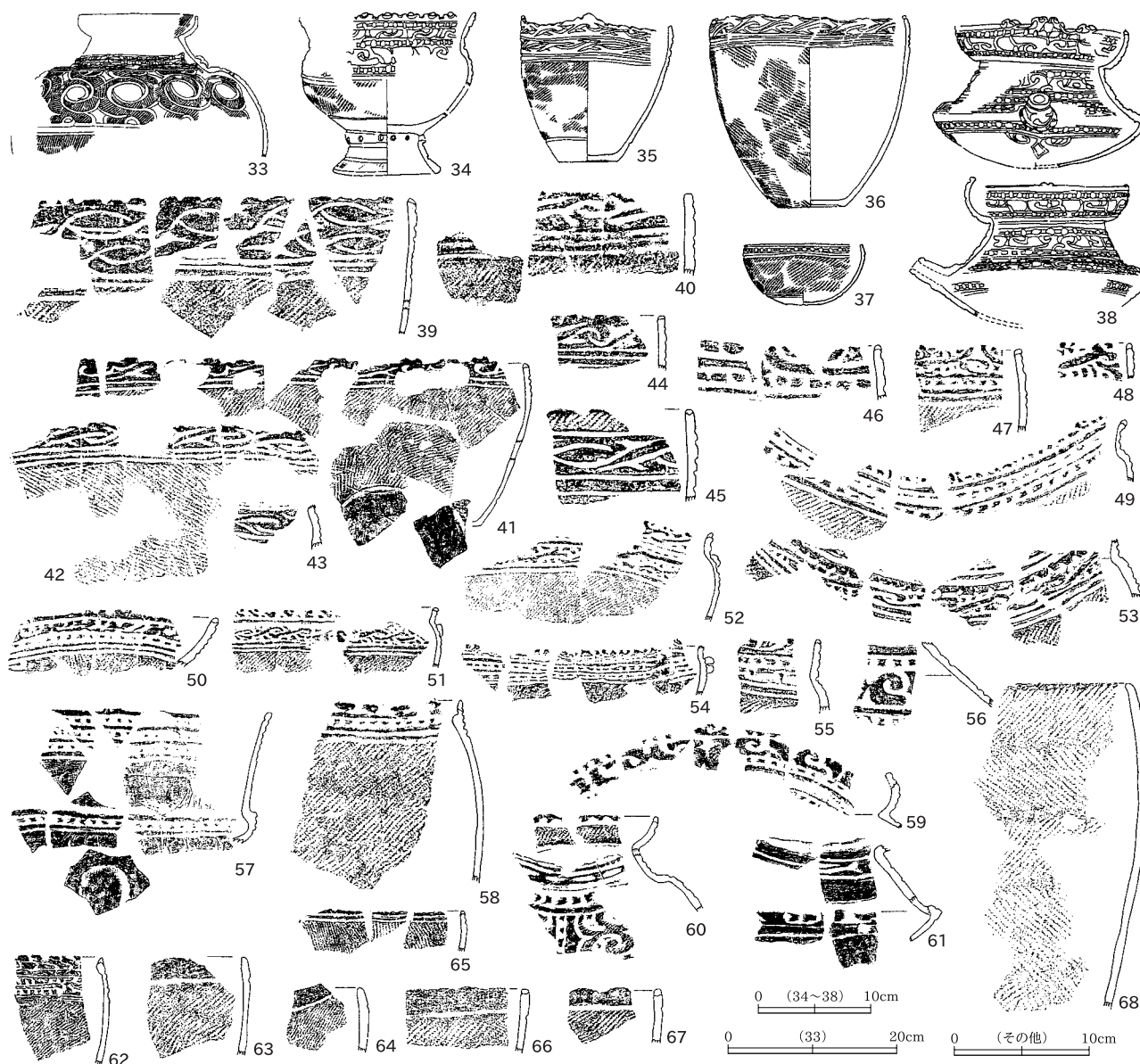


図52 岩手県玉山村前田遺跡 1号竪穴住居跡出土土器（1）（須藤1992）



1a層出土（晩期2期土器群）

図53 岩手県玉山村前田遺跡1号竪穴住居跡出土土器（2）（須藤1992）

の変遷が層位的に捉えられ、須藤隆氏によってその概要が報告されている（須藤1992・2003）。

1号竪穴住居跡は、曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡とほぼ同規模のやや大型の住居跡で、長径6.5m、短径5.9mを測る（図52）。壁高は最も残りのよい南壁で40cm、最も浅い北壁で15cmで、埋土は1a、1b、1c、2、3a、3b、3c、4層の8枚の層に区分されており、3bと4層が床面を覆い、その直上に1c、2、3a層、更に1a、1b層が皿状に堆積している⁷⁹⁾。住居跡は、床面出土の土器（図52-1）から、後期終末に営まれ廃絶されたと想定されている。

住居跡から出土した土器は、総数で68点掲載されているが、須藤氏は層位的な出土状況から土器を4群に区分

している。即ち、床面出土の屈曲部を持つ装飾深鉢（図52-1）が、後期終末の宮戸Ⅲb式に比定され、その直上の3層、3b・3c層から出土した土器（図52-2～15）が晩期1a期土器群（大洞B1式）、1b・2層から出土した土器（図52-16～32）が晩期1b期土器群（大洞B2式）、1a層から出土した土器（図53-33～68）が晩期2期土器群（大洞BC式）に、それぞれ位置付けられている。

図示資料で判ずる限りでは、層位的出土状況から、後期終末→大洞B1式→大洞B2式→大洞BC式、と捉えた須藤氏の変遷観は、概ね首肯できるものである。しかし、層位毎の土器を細部にわたって観察するならば、混在と思われる資料を指摘することも可能である。

例えば、晩期1a期（大洞B1式）とされた3層、3b・3c層では、入組三叉文施文の図52-7は大洞B2式、口縁部が短く外折した11は同BC2式に比定される資料であり、9も弧線文を伴う小波状縁の在り方から、「過渡的段階」又は大洞B2古式に含まれると考えられる。晩期1b期（大洞B2式）とされた1b・2層では、入組三叉文施文の土器（図52-17～19・22・25・26）は大洞B2式、羊歯状文施文の土器（16・20・23・24・27～29）は大洞BC式に、比定されるであろう。中でも16・20は、祖型的な羊歯状文で構成されており、同BC1式に位置付けられる。晩期2期とされた1a層は、大洞BC2式が主体であるが、大洞B2式（図53-35・36・39～45）や同BC1式（34・46・48）、更には同C1式（58・65）を認めることができる⁸⁰⁾。なお図53-47は、羊歯状文手代森型1類に相当する例であろう。

須藤氏は、詳細な出土位置の記録から、層位的所見を型式区分の指標と見なしている。取り分け1b・2層の在り方（図52-16～32）を論拠に、入組三叉文と羊歯状文の併存の可能性を指摘した。しかし、出土状況が重視された一方で、型式学的な検討は十分とは認め難いように思われる。筆者は、1b・2層を大洞B2式～BC2式の混在資料と見なしており、同B1式を包含する埋土下位（3b・3c層）以外の堆積層については、型式変化を暗示するものの、型式区分の有力な根拠にはなり得ないと理解している。従って、前田遺跡の出土状況を当該期通有の事象と捉えることには、賛同しかねる。

前田遺跡1号竪穴住居跡は、後期終末～大洞C1式までの資料が含まれており、曲田I遺跡EⅢ-011住居跡よりも時間幅を有すると考えられる。しかし、ほぼ同じ規模の住居跡に形成された廃棄場所として、極めて類似した様相を呈しており、興味深い事例と言わなければならない。

6 結 語

以上、曲田I遺跡EⅢ-011住居跡出土土器について、多岐にわたって型式学的な検討を加えてきた。僅か1棟の住居跡出土の資料を考察してきたに過ぎないが、混在資料であるとの前提に立って、関連する特徴的な属性の消長を型式学的に跡づけることで、大洞B・BC式の型式細分について、多くの知見を得ることができたように

思われる。

曲田I遺跡EⅢ-011住居跡出土土器は、大洞B2新式～BC1式の限られた時間幅の混在資料であるというのが、筆者の結論である。このことを明確にするため、装飾深鉢・鉢形土器を中心に、口端形態（弧線文を伴う小波状縁・B突起・三山状突起・珊瑚状突起）や口頸部文様（入組三叉文・羊歯状文・C字文）、文様帯構成の変遷過程を詳細に跡づけることで、型式区分の可能性を考察してきた。それぞれの要旨については、各節毎に纏めているので、ここでは再論しないが、梗概は表5に表示した通りである。従前の大洞B式と同BC式を繋ぐ過渡的段階としての大洞BC1式の設定は、十分妥当性を持つものであり、このことは取りも直さず、「雨滝式」（芹沢1960）を否定的に捉えたことを意味する。

これまで当該資料については、一括性を重視し、大洞BC1式に位置付けた、林謙作氏の詳細な研究が存していた（林1993）。しかし筆者は、大洞B2新式～BC1式の混在資料であるとの前提から、全く異なる結論を引き出すことになった。即ち、入組三叉文と羊歯状文の併存は認めるとしても、土器を構成する各属性には、系統的な変遷が看取されており、その変化を時間差として捉えることが可能である。従って、当該住居跡の入組三叉文を施した装飾鉢の多くは、大洞B2新式に帰属され、同BC1式では入組三叉文の比率は低く、羊歯状文が主体を占めると考えられる。

また林氏は、大洞BC1式期の馬淵川流域に入組三叉文が多く残存することから、当該域の保守性を示唆している。当該域における羊歯状文の成立は、極めてスムーズに辿ることができ、少なくとも末端の咬み合わない羊歯状文2類については、当該域で成立した可能性が高いように判断される。しかし、入組三叉文が併存することも確かである。

一方須藤隆氏は、当該資料を大洞B2式期に位置付けることで、羊歯状文の存在から馬淵川流域の先進性を示唆している。仙北湖沼地帯に位置する宮城県中沢目貝塚では、層的事例から中沢目貝塚3群土器（大洞BC式相当）に、三叉文と羊歯状文が共存したことが指摘されている（須藤1984）。しかし中沢目貝塚3群土器には、特定の器種に限って入組三叉文が継承されるだけで、寧ろ羊歯状文の土器が圧倒的多数を占めている。また、先行

表5 亀ヶ岡式土器前半期の各属性の消長

	各 属 性	大洞B1古式	大洞B1新式	大洞B2古式	大洞B2新式	大洞BC1式	大洞BC2式	大洞C1式
口 端 形 態	弧線文を伴う小波状縁	(縄文地文有り)		(縄文地文無し)		(珠紋縁に同化?)		
	三山状突起	-----		-----		(装飾化)		
	B突起3c・3d類					(突起列)		
	B突起2b・4a類			(?)		(突起列)		
	B突起4b類					-----		
	珊瑚状突起			-----		-----		
(口) 頸 部 文 様	魚眼状三叉文			(4類)		(高台透かし)		
	入組三叉文	-----		(1b・1c・2a・2b類)		(注口部直下)		
	羊歯状文1類					(祖型的) (定型的)		
	羊歯状文2類					(祖型的) (定型的)		
	C 字 文	(1類のみ)		(1・2類)		(棘状陰刻の連結)		
文 様 帯 構 成	文様帯	(文様化)	(頸部文様帯と融合)		(口部装飾帯)			
	旧 c文様帯	(文様帯と融合)		(縄文地文の消失)				(枕形のみ)
	新生 c文様帯					(口縁部の外折化) (羊歯状文)		(二溝間の載痕)
	a文様帯	(文様帯有り)	(文様帯と融合)	(縄文地文の消失)		-----		(?)
	「文様帯」					(菱形・矩形磨消文様)		(所謂大腿骨文・雲形文)

たように、同遺跡の他の住居跡のみならず、東北北半部の八幡・埵渡・前田遺跡でも追認されている。複数遺跡で確認された点を重視するならば、筆者の考える大洞B2新式と同BC1式相当の土器は、伴出するのが通例であり、両型式の区分は不可能との結論を導出することも可能であり、また「雨滝式」の例証となるものであろう。これ等の資料を大洞B2式（晩期1b期）に位置付ける須藤隆氏や、大洞BC1式に位置付ける林謙作氏の見解は、このような出土状況に力点が置かれ、両氏の型式学的検討の前提となっている。

上記した状況を容認するならば、筆者のこれまでの考察は徒労に帰することになる。しかし一括性の前提を取り払って、型式学的な検討を加えることも、決して無駄ではないということは、本稿の中で詳述してきた通りである。

また、入組三叉文と羊歯状文が共伴した遺跡出土の事例を検討してみると、筆者の考える土器型式の幅に差異が存しており、混在の可能性も否定できないように思われる。筆者は廃絶された住居跡の窪みが、儀礼・祭祀に関わる廃棄の場所として、幾度にもわたって使用され続けた営為の結果が、曲田I遺跡EⅢ-011住居跡や埵渡遺跡第1号竪穴、前田遺跡1号竪穴住居跡のような在り方を示したのではないかと推察している。

一方では、特定器種に文様が先行し、また残存した可能性も否定できない。特に入組三叉文は特定の器種や部位に残存することは明白である。土器が器種毎に作り分けられ、また使い分けられていたとすれば、各器種が保有される時間が異なることも想定される（品川2003）。各属性の消長を見極めることの困難さを露呈したが、単一の属性のみで型式を区分するのではなく、複数の属性を組み合わせで分析することが、強く求められる。本稿で提示した各属性の消長は、そのための基礎的な作業の一部に過ぎないことになろう。

これまでの検討を踏まえて、亀ヶ岡式土器の特徴を簡潔に言い表すならば、以下の4点に集約されよう。

①精粗二様の土器の製作

②多様な器種構成

③精巧な造作と、闊達で華美な文様の発達

④各属性の系統的な変遷

上記した特徴を、晩期前半の土器（大洞B1古式～C1

式）に限って見てみたい。

①にある粗製土器は、装飾性に乏しい深鉢・鉢に適用され、数量的には圧倒的に多い。晩期全般を通して、粗製深鉢が日常的な器種として多量に製作・使用されており、施文原体や口端・底部の作出手法から、地域的差異も認められる。一方、精製土器は比率的に少なく、実用的な器種ではなかったと判断される。また、縄文施文のみの壺を「粗製壺」に含めたり、体部文様帯を欠く台付鉢等を「半精製土器」に含める場合もあるが、山内清男氏の模型図（図38）に示されたように、半精製土器は大洞BC2式以降に顕在化する。

②の器種構成は、深鉢・鉢（台付を含む）・浅鉢（台付を含む）・椀・皿・壺・注口土器・香炉形土器が、通例である。型式によって構成要素の比率に変動が見られるが、上記した構成は、注口土器が器種として独立した大洞B1新式にはほぼ確立する（小林2003）。椀形は、大洞BC2式になって新たに加わる器種であり、同C1式に盛行する。また片口土器も、大洞BC2式に明確化する。

また装飾土器の内、主要器種が型式毎に変化していることも、特徴として指摘される。晩期前半期を通しては、注口土器（大洞B2古式以降）が一貫して主導的位置を占めるが、大洞B1古式では装飾深鉢、大洞B1新式では装飾深鉢・鉢・浅鉢、大洞B2式～BC1式では装飾鉢・浅鉢・装飾壺、大洞BC2式では装飾鉢・浅鉢・装飾壺、大洞C1式では装飾鉢・浅鉢・椀形が、主要器種（いずれも台付を含む）に加わっており、深鉢→鉢→浅鉢・椀形、と時期を追う毎に、主要器種の低平化の過程が看取される。

③については、精製土器に適用される。土質緻密、薄手で一般に小形に傾き、器面の調整は縄文のない部分においては甚だ良好で、通常滑沢に富んでいる（山内1930）。文様は闊達と形容されるが、施文手法は規則性を有しており、複数の文様要素で構成される場合も少なくなく、文様の組み合わせは型式毎に異なっている。大洞B2式では、入組三叉文が口頸部の主要な文様、同BC式では、羊歯状文が（口）頸部の主要な文様、同C1式では、雲形文等の磨消文様が体部の主要な文様として発達する。体部の曲線的な磨消縄文を構成する半肉彫り的手法は、大洞BC2式～C1式に盛行するが、母体とな

る菱形・矩形の磨消文様は、大洞B2式に晩期の体部文様帯として現出し、同BC1式に継承される。

④の系統的な変化は、装飾帯・文様帯だけではなく、種々の属性の消長にも関わっている。亀ヶ岡式土器は多様な属性から構成されており、それぞれに生成・変遷・消滅の過程が看取され、複数型式にわたって存続するのが通例である。一つの属性が、単一の型式を区分するメルクマールとはなり得ず、複数の属性の組み合わせから型式の判別が求められる。筆者は上記した理解に立って、種々の属性の消長の跡づけを試みてきた(表5)が、属性同士の対応関係や特定器種との結び付きといった規則性の追求が、重要な検討課題と考えている。亀ヶ岡式土器の系統性を持った変遷観は、山内清男氏の当該土器研究の根幹であり、今日においても編年研究の要件となっている。

7 おわりに

本稿では、曲田I遺跡EⅢ-011住居跡の資料を基に、大洞BC1式設定の妥当性を検討してきた。特徴的な属性に対する詳細な検討の結果、大洞BC1式設定の可能性が俄然高まったように感じられる。しかし具体的内容については、未だ推測の域を出ない点が数多く存しており、検討すべき課題は山積している。

取り分け、大洞B2式と同BC1式の三叉文施文の土器、大洞BC1式と同BC2式の羊歯状文施文の土器をどのように規定するのか、明確な回答を提示したとはいえない。また、多くの属性を東北北半の自律的展開を前提として説明してきた。しかし、東北南半を含む他地域との交渉関係については、全く手付かずの状態にあり、地域間の詳細な検討は、今後の研究に委ねることになるであろう。

筆者にとって、晩期前葉大洞B・BC式を巡る編年研究は、まだ緒に就いたばかりでしかないが、曲田I遺跡の報告書が刊行されて20年が経過して、「曲田ショック」に対する自分なりの回答を、漸く提示することができたように思われる。本稿が、当該期研究の深化に寄与し得たのか、それとも混乱を助長しただけなのか、諸賢の御

批判を仰ぐことになるが、筆者の示した型式学的検討が、全く無駄ではなかったと受け止めて頂けるものと念ずる次第である。

最後に、本稿を契機として、「雨滝式」を巡る論議が再燃し、意義のある土器論が交わされ、当該期研究が更に進展することを切望して、搁筆したい。

謝 辞

亀ヶ岡式土器研究の全般にわたり、林謙作先生、須藤隆先生、高橋龍三郎先生には、多大なるご指導を賜りました。特に、林先生の大洞B2・BC1式の型式分析や文様帯構成の研究からは、啓発を受けた部分が少なくなく、本稿執筆の契機になったことを明記させていただきます。

また、須藤・高橋両先生には、数々の土器資料について直接ご指導を頂くと共に、型式学的研究を進める上での分析手法について、多くのことを学ばせて頂きました。取り分け、須藤先生には中沢目貝塚における詳細な器種分類と型式学的な検討、高橋先生には亀ヶ岡式土器のネガ文様分析と学史的背景について、多分のご教示を賜りました。

更に、本稿を草するにあたり、下記の方々並びに諸機関からも、様々なご教示・ご助力・ご配慮を賜りました。末筆ながら感謝申し上げます(敬称略・50音順)。

安孫子昭二、石川日出志、江坂輝彌、大塚達朗、岡本東三、葛西勲、金子昭彦、菊池徹夫、工藤竹久、後藤久志、小林克、佐藤静江、佐藤嘉広、鈴木加津子、鈴木克彦、鈴木正博、田中耕作、寺崎秀一郎、土肥孝、戸田哲也、中沢道彦、成田滋彦、成田正彦、西川博孝、村田章人、柳澤清一、渡邊裕之

青森県立郷土館、阿佐ヶ谷先史学研究会、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、慶応義塾大学文学部民族学考古学研究室、八戸市教育委員会、平内町歴史民俗資料館、弘前市教育委員会、山形県埋蔵文化財センター、早稲田大学文学部考古学研究室

(2004年9月30日稿了)

註

- 30) 林謙作氏の「弁状突起」とは、「ゆるやかに立ちあがり頂部がひらき気味になる」といった魚尾状の突起を指しており、直線的に立ち上がる「台形突起」とは区別されている。いずれも、大洞B1式相当の「山井下層式」（林ほか1995）に、顕著に認められる。
- 31) 大洞B1新式（又は「過渡的段階」）の4足底部の例としては、岩手県平泉町泉屋遺跡の浅鉢（濱田ほか2003、第62図351）、秋田県森吉町白坂遺跡の浅鉢（高橋学1994、第43図199）、青森県平賀町石郷遺跡の浅鉢（村越ほか1979、第25図74）、青森県弘前市大森勝山遺跡の無文皿形（弘前市教育委員会蔵、小林実見）等が挙げられる。
- 32) 金子昭彦氏に拠ると、半円形の文様は大洞B2式（新）の段階に補助要素として使われ始め、大洞BC1式に顕著になるという（金子1992a, p.20）。半円形の文様が、高橋龍三郎氏の定義した補助要素（高橋龍三郎1981）に適合するのか疑問を禁じ得ないが、その消長は概ね金子氏の指摘する通りであろう。なお、ネガ文様を構成する3要素（主要素・副要素・補助要素）が出揃う時期は、大洞BC2式期に求められるというのが、筆者の理解である。
- 33) 口縁突起直下に独立した三叉文や棘状の陰刻が施された例は、既に瘤付土器Ⅲ・Ⅳ段階に散見され、必ずしもI文様帯の文様化が、後・晩期を画する指標とはなり得ない（小林1999）。
- 34) 林謙作氏は、三つの高まりからなる突起を「A-B突起」と呼称したが、小波状縁と同じく、三叉文系土器の口端装飾の中では新しい要素と見なし、大洞BC1式の曲田I遺跡EⅢ-011住居跡に、その存在を指摘している。この種の突起は、秋田・新潟方面に発達する傾向があり、北陸地方の御経塚式の「珊瑚状突起」もこの変型で、日本海沿岸の型式との関係の強弱を考慮する必要性も指摘している（林1993, p.259）。
- 35) 藤株遺跡例（図21-3）の実測図では口唇部に縄文地文が表現されていないが、報告書の写真図版では、縄文地文が確認できる（富樫ほか1981、図版45-77）。
- 36) 岩手県盛岡市上平遺跡では、大洞B2新式の三山状突起3a類を配する台付浅鉢（図22-15）が出土している。
- 37) 図22-33は、秋田県増田町梨ノ木塚遺跡SK88から出土した台付浅鉢である。SK88は底径約2mの円形の土坑であるが、埋土下部から土器が纏まって出土しており、11点の復元資料（装飾深鉢1、装飾鉢7、無文鉢1、粗製鉢1、台付浅鉢1）が報告されている（畠山ほか1979）。筆者は、大洞BC2式の一括性の高い資料と評価している。
- 38) （小林2003）では、大洞BC2式の注口土器の正面突起に対して、珊瑚状突起の名称を付与した。それは、林謙作氏の呼称（林ほか1995, p.31）に倣ったものであるが、大洞B2新式～BC1式に盛行する浅鉢等の珊瑚状突起と紛らわしいことから、再考を要するようと思われる。
- 39) 人面を模したと思われる珊瑚状突起の著名な例としては、青森県八戸市是川中居遺跡の浅鉢が挙げられる（八戸市博1985, 31頁17）。曲田I遺跡の図15-4の二つの透かしも眼部を表現した可能性が考えられ、図23-5・6の三つの透かしも、眼部と鼻・口部に見て取れなくもない。
- 40) 水吉VI遺跡縄文第3号堅穴状遺構は、形状や規模から住居跡と考えられるが、炉跡が確認できないため堅穴状遺構に分類されている（濱田ほか1995）。平面形態は4.1m×4.3mの隅丸方形で、床面は硬く締まり、壁高は1.05m～1.2mを測り、壁は緩く立ち上がる。埋土からは多量の土器が出土したが、報告書掲載資料から判ずる限りでは、縄文後期と羊歯状文施文の土器を僅かに含むものの、入組三叉文が主体を占めている。埋土から出土したため、一括性に問題はがあるが、大洞B2古式？の数少ない纏まりとして評価されよう。
- 41) 註30に同じ。
- 42) 埴渡遺跡例（図24-23）の残存部には、珊瑚状突起の痕跡は確認できないが、図示した秋田県玉内遺跡の台付浅鉢（図24-24）や、青森県是川中居遺跡の台付浅鉢（八戸市博1985, 58頁18・19）、秋田県藤株遺跡の台付浅鉢（富樫ほか1981, 第106図90）には、珊瑚状突起を認めることができる。埴渡遺跡例にも、珊瑚状突起が配されていたものと想定される。
- 43) 遮光器土偶頭頂部の橋状化は大洞BC1式に現出し、大洞BC2式～C1式に盛行する（小林2004）。
- 44) 山内清男氏は、三叉文について以下のように記している。「（前略）、その中に三叉文という三角形、角形をした沈刻が加えられている。東北では大洞B1式にその例があり、関東では安行3a式に見られる。この三叉文は関東東北のみならず、中部地方、畿内に至る晩期の開幕を告げるものである」（山内1966, p.8）。
- なお、山内氏の「所謂入組文」（山内1930）とは、杉山寿栄男氏が編集した『日本原始工芸』所収の「入組紋と波状紋」、「入組波状紋」を指示しているものと推察される（杉山編1928a, 文様図版31-33）。これ等の文様には、筆者の「入組三叉文・魚眼状三叉文・波状三叉文」が含まれている。
- 45) 須藤隆氏は、後期最終末の魚眼状三叉文は「窺描円文の中心に円形刺突が施されるのを特徴とする」のに対し、晩期初頭（大洞B1式）には「中心の円形刺突を失った魚眼状三叉文」となることを指摘している（須藤ほか1995, p.222）。晩期にも円文の中心に円形刺突を施した例（図22-1）が存しており、厳密な指標とはならないが、変化の方向性としては首肯できるものであろう。
- 46) 鈴木加津子氏は、八幡遺跡捨て場出土の土器を基に大洞BC1式の三分案を提示しが、その中で図26-2・6・7を「大洞BC1式I期」、図26-4を「大洞BC1式II期」、図26-3・8・9を「大洞BC1式III期」に位置付けている（鈴木加津子1993）。鈴木氏は文様類型を段階的な変化として捉えているが、筆者は文様類型毎の系統性を重視している。
- 47) 仙台湾～宮城県北部（北上川下流域）の遺跡で、大洞BC1式に入組三叉文が施された資料は、中沢目貝塚（須藤1984, 第4図47～49）、長根貝塚（須藤1984, 第12図3）、砂子崎遺跡（須藤1984, 第18図11）、富崎貝塚（後藤・小井川2003）、沼津貝塚（須藤1984, 第14図17）、摺藪遺跡（柳沢ほか1990, 第186図5）等で指摘される。多くは「高坏（C型）」（註50）に相当する資料であるが、三叉文の伸長化・平行化・密着化が顕著で、円文を巻き込む例も散見される。
- 48) この場合の単位文様とは、基本的な単位となる文様要素を機械的に配した在り方を指しており、異なった文様要素を交互に配置した構成から、突起等とは関係なく同一文様要素（ポジ・ネガ文様を問わず）を繰り返し入れ込んだ文様構成へ

の変化として用いている(小林2003, p.42)。従って、藤沼邦彦氏の磨消縄文の分析における単位文様とは、意味合いを異にしている(藤沼1989)。

- 49) 注口土器の注口基部直下の入組三叉文は、大洞B1新式～同BC2式新相の段階まで一貫して施される(図21)。
- 50) 「台付鉢C₂類型」又は「高坏(C₂類型)」(須藤1984)に対しては、中沢目貝塚の報告書で「高坏C1p類」に分類されている(須藤ほか1995)。「高坏C1p類」は口縁部が明瞭に内屈して稜を形成する「C1p類」と、強く内彎し稜を持たない「C1p2類」に二分され、中沢目貝塚の層的事例から、後者から前者への変化が想定されている(須藤ほか1995, p.236)。大洞BC1式～BC2式の仙北湖沼地帯に特徴的な器種であるが、大洞B1式の口縁部に魚眼状三叉文を施した台付浅鉢の系譜を引くものと想定される。
- 51) 芹沢長介氏は文様系統について、以下のように記している。「この羊歯状文は、三叉文の組合せから発展したもののよう^に考えられていた。しかし、三叉文は沈刻文であって、むしろ影の部分なので、影と影とによってあたらしい文様が生ずるということは考えにくい。やはり、後期の壺、土びん、鉢にみられるすりけし縄文のある入組文が扁平化され、しだいに羊歯状文に発展したの^と考えたい」(芹沢1960, p.207)。
- 52) 鈴木克彦氏は、末端の咬み合う羊歯状文をA類として「波状羊歯状文」、咬み合わない羊歯状文をB類として「帯状羊歯状文」、その他をC類として「変型羊歯状文」、退化型式の列点文をD類と呼称している(鈴木克彦1980)。

なお須藤隆氏は、「Z字文」、「K字文」と呼ばれる意匠の差異について、意匠構成の面では両者を区別する必要はないが、「文様上部のS字状に反転する沈線の反りが弱いとZ字文になり、反転がつよくなるとK字文となる」と指摘している(須藤ほか1995, p.50)。
- 53) 須藤隆氏は、宮城県中沢目貝塚や同沼津貝塚の資料を基に、晩期1期新段階(大洞B2式)に「Z字文・羊歯状文の祖型」が成立していたことを指摘している(須藤1984, p.310)。東北中部でも、大洞BC1式期にZ字文が確立していたことは確実であろう。
- 54) 須藤隆氏は羊歯状文2類の成立について、以下のように記している。「2条の区画線の間に、右下りの入組三叉文(c3、4類)を2段にわずかにずらして配置する。そして三叉部からのびる弧線を下段の入組三叉文の末端に連ねる。さらに水平にのびる2本の沈線の上下に短い弧線を3～5個充填し、羊歯の葉のような文様を構成する。沈線で囲まれた部分は丁寧に磨かれ、浮文化する。(以下省略)」(須藤ほか1995, p.50)。しかし、母体となる右下りの入組三叉文の例は極めて少ないのが実情であり、同氏の系統観は説得的とはいえないように思われる。なお図32-35は、須藤氏が想定する矩形モチーフ内に刻み目を加えた例と言えよう。
- 55) 羊歯状文手代森型施文の土器は、曲田I遺跡EⅢ-011住居跡出土の破片資料の中に、もう1点認めることができる(鈴木隆英1985, 第52図311)。なお、秋田県森吉町向様田A遺跡から出土した台付鉢(宇田川ほか2004, 第66図6)や装飾鉢(宇田川ほか2004, 第75図7)にも、類似の文様が確認できるが、詳細は判然としない。
- 56) 大洞BC2式の終末段階では、「2条の沈線間に右上がりの直線的な短沈線を引き、その沈線を境に上下に截痕列を配

するやり方」が認められる。この斜線直線化は、羊歯状文1類の退化形態として捉えられ、大洞C1式では1段乃至は2段の截痕列に変化したと想定されている(高橋龍三郎1991)。一方、羊歯状文2類の終焉は判然としない。恐らく主軸線の下半の表現が省略された1段の截痕列(鍵状の陽刻部と截痕列を交互に配した構成)に収斂され、大洞C1式に継承されたものと想定される。

- 57) 註21に同じ。
- 58) 上端の区画線がなく、三角状の陰刻とその一端から伸びた渦巻文で構成される場合もある(図22-18、図24-26、図51-21・37)。
- 59) 山内清男氏は1958年に刊行された『世界陶磁全集 1 日本古代篇』の図版解説の中で、中期に出現し、後期に続く「第二次文様帯」の存在を指摘している(水野編1958, p.289)。

なお、文様帯の視点から亀ヶ岡式土器を論じた研究は、松本彦七郎氏を嚆矢とする(松本1919)。松本氏は文様帯の呼称を用いていないが、「土器紋様論」の立場から、曲線模様の上退と直線化、縄文の発展と上退化に注目し、文様が年代の進行と共に下から上部に向かって減退する傾向を指摘した。即ち、下から押し上げてくる文様によって、上部の文様が圧迫され、変形・消滅を余儀なくされた^と見なすもので、各帯の発展・減退・消滅の過程から、縄文・弥生土器に通徹した大きな変化の方向性を提示したものと言える。今日の型式区分に照らすならば、合致しない点も認められるが、曲線模様の上方退却の理論は、山内氏の「第一次文様帯」や後年の「I文様帯」の系統観に、強い感化が想定される。
- 60) 「大洞BC中間の型式では口の外側に、そして頸部文様帯の直上又は狭い無文帯を隔てて、頸部文様帯と同手法の文様帯が加えられることがある。この口外側の文様帯の上限は口に露出し、文様の一部が口の突起に続く場合がある。又頸部文様帯が同様の状況を示すことがある。(傍点小林)」(山内1930)。この内、「頸部文様帯と同手法の文様帯」が、羊歯状文を指示しているのであれば、IIa文様帯を解説していることになる。また、「同様の状況」が、「口外側の文様帯の上限は口に露出し、文様の一部が口の突起に続く場合」を指示しているのであれば、旧IIc文様帯を解説していることになる。上記したように1930年の時点で、大洞BC式の鉢類の(口)頸部文様帯が多様であることが、指摘されていた。
- 61) 山内氏は模型図に対し、1932年に以下のコメントを残している。「大洞Bには體部文様帯の發達が不完全で、以降の如く重複して加へた例が乏しい。従つて相當する模型圖を作り得なかつた」(山内1932, p.52)。しかし1939年に合本された『日本遠古之文化』の脚注では、改訂が加えられ、上記の記述は省かれている(山内1939)。
- 1920年代に採集された青森県是川中居遺跡の資料の中に、口頸部に入組三叉文、体部に菱形基調の磨消文様を持つ台付鉢(図42-25、鈴木・林編1981, 33頁78)が存していたが、1930年論文執筆時の山内氏の注意を引いていたのか不明である。なお、同資料の入組三叉文の一部は口端の装飾と一体化し、また体部文様の菱形と三角形の陰刻の一端が連結する等、新しい様相を帯びている。
- 62) 『日本先史土器の縄紋』は、1961年3月31日に京都大学に学位請求論文として提出され、翌年の3月31日に文学博士の学位が授与されたが、同書が公刊されたのは、1979年11月以降

のことである。公表されたのは、『日本原始美術』（1964年刊）よりも後であるが、本稿では1961年までに執筆された論考として扱っている。

- 63) 管見の限りでは、縄文晩期の土器に対し「Ⅲ文様帯」の呼称を用いた研究者として、須藤隆氏と鈴木正博氏を挙げることができる。

須藤隆氏は中沢目貝塚を報告する中で、晩期前葉の土器の文様帯について、以下のように記している。「土器の装飾や文様は、突起、把手や粘土粒の貼付によって飾られる口縁部装飾帯、篋描文や磨消縄文手法のみられる口縁部文様帯（Ⅰ文様帯）、頸部文様帯（Ⅱ文様帯）、体部上半の文様帯（Ⅲ文様帯）に区分される。さらに、体下半まで含め、土器全体に文様帯が繰り広げられる場合もみられる」（須藤ほか1995, p.35）。須藤氏は、山内氏の文様帯とは異なった記号を付したが、須藤氏の「Ⅲ文様帯」とは、山内氏のⅡ文様帯にはほぼ相当する内容であり、器面上端の文様帯から順次番号を付与したように窺える。

鈴木正博氏は、弥生式文様帯としての「Ⅲ文様帯」の萌芽を、浮線文系土器群に伴存する沈線文による文様帯の中に見出し、Ⅱ文様帯に付随した文様から中核的な文様帯への変化の過程に、「Ⅲ文様帯」の生成を指摘している（鈴木正博2003・04）。具体的には、「綾杉文様帯系土器群」や「渦文系特殊壺」に見出されている。

なお、文様帯の番号に対して、山内清男氏の以下の発言が残されている。「（前略）、そうすると大体においては文様帯の番号がみんなⅡでわかりですね。Ⅲ番目の文様があるんじゃないかという人があるんだけどね、それはまあ無さそうです」（山内・平山ほか1971）。

- 64) 山内氏の模型図における形態上の差異については、藤村東男氏が大洞B式上段と大洞B C式下段を除き、いずれも頸部が一段屈曲する鉢形土器であることを指摘している。また同氏は、大洞B式を除き上段に半精製土器、下段に精製土器が示されていることも指摘している（藤村1980）。
- 65) 青森県三戸町に所在する沖中遺跡と泉山遺跡は、馬淵川を挟んで対置した遺跡で、馬淵川河口より約26 遡った熊原川との合流点に位置している。沖中遺跡は馬淵川左岸、泉山遺跡は右岸に位置し、両遺跡は1 弱の位置関係にある。沖中遺跡は後期末葉～大洞B 1新式、泉山遺跡は大洞B 2式～C 1式に主体がある。両遺跡は主体的な時期が異なることから、大洞B 2式を境に前者から後者に主体が移行したもので、一体の遺跡であったことが推察される。時期的には若干遡るが、河川を挟んだ同様の関係は、新井田川流域の風張（1）遺跡と是川中居遺跡にも指摘される。なお熊原川を遡ると、晩期前葉の著名な遺跡である野面平遺跡（合流点より14 上流）と、石亀遺跡（同17 上流）が存している。
- 66) 後期の装飾深鉢A類の頸部文様帯については、山内清男氏の「学位論文」（図41-2）に従って「Ⅱ」と表記する。なお、当該文様帯について今村啓爾氏は、前記したように「Ⅱa」と表記している（図42-52）。
- 67) 山内氏は、大洞B C式の体上部にⅡaの文様を持つ例として、雨滝遺跡例（図40-4）を例示した。
- なお、Ⅱa文様帯の例として図示された瀬沢例（図39-60）の模式図では、屈折部の刻み目帯が省略されている（山内1964a）。また、小豆沢例（図40-1）の模式図の体部文様帯

も、正確さを欠いている。小豆沢例の体部（Ⅱ）文様帯には、横位連繋の入組帯状文が施されるが、本来入組帯状文の上端の主描線は、横Z字状に入り組んでおり、下端は補助的な描線に過ぎない。しかし模式図では、体部の上端と下端の描線が入り組むように表現されている。

- 68) 大洞C 1式の体部に磨消文様を有する台付鉢は、口頸部が外折し無文帯を有する器形（図38-大洞C 1下段、図42-27）が一般的である。しかし、幅広の頸部に文様を施した例も散見され、屈折部に截痕列を巡らせ、Ⅱc文様帯が存する例も認められる。頸部の文様帯は、部位から見ればⅡaに相当するが、Ⅱcの上位に位置することになり、先行型式のⅡaの系譜を引くものであるのかどうかは、判然としない。寧ろ、大洞C 1式に新たに生成した文様帯である可能性が考えられる。

なお今村啓爾氏は、Ⅱa文様帯が大洞C 1式末ないしC 2式の初めまで続くことを指摘している（今村1983, p.145）。同氏は大洞C 1式浅鉢（図42-47）の体部の磨消文様をⅡaと見なしたが、筆者は賛同しない。

- 69) 註37に同じ。
- 70) 左上端から下方に巻き込む入組三叉文2 b類は、秋田県向様田A遺跡に特徴的である。なお同遺跡の大洞B 2式には、口頸部の外折したB類の装飾鉢が多数を占めており、旧Ⅱc文様帯を構成する装飾鉢が少ないといった特徴が指摘される。
- 71) 註23に同じ。
- 72) 青森県三戸町杉沢遺跡（1994年青森県立郷土館調査）では、大洞B C 2式～C 1式の包含層（V層）が検出されている（工藤ほか1997）。同遺跡出土の大洞B C 2式は、曲田I遺跡FⅢ-0116住居跡の内容に近似しており、大洞B C 1式に相当する資料は含まれていない。FⅢ-0116住居跡と同様に、大洞B C 1式と同B C 2式の分離を暗示する遺跡として特記されよう。なお杉沢遺跡は、馬淵川河口より約24km 遡った地点で合流する猿辺川の、約16 上流の左岸段丘に位置している。
- 73) 第1号堅穴3層は、2層直下に堆積した黒褐色土で、図50-8・20が3層から出土している。なお、層厚約40 を測る2層の中央部では、遺物が上下に二分されて取り上げられたが、型式学的に有意な差異は認め難いようである。但し、完形土器や復元土器が下部に多いのに対し、破片資料は上部に多い傾向が看取されたという（工藤ほか1997）。
- 74) 埴渡遺跡の器種構成については、註18参照。
- 75) 図50-4の注口土器B類について、筆者は大洞B C 1式に位置付けている（小林2003, pp.11-12）。それは、肩部文様の全周化と、口頸部と肩部の正面に菱形文が二重に付加されたことを重視したことに基づき、大洞B 2新式に比定したA類（図50-1～3）と同様に位置付けられる公算が高いように思われる。
- 76) 八幡遺跡捨て場出土の土器は、上位からⅡ①・Ⅱ②・Ⅱ③・Ⅱ④・Ⅱ⑤の5層に区分されたが、その内Ⅱ④が焼土ブロック層に相当する。土器は、Ⅱ③・Ⅱ④に最も多く包含されていたが、三叉文・羊歯状文を施した鉢・深鉢は、共に下位になるほど多くなる傾向が指摘されており、層序による型式的な差異は見出せない、と結論づけられている（藤田ほか1988, p.32）。

- 77) 八幡遺跡出土の土器を詳細に分析した林謙作氏は、深鉢45点(粗製36・精製9)、鉢39点(粗製6・精製33)、浅鉢33点(粗製2・精製31)、台付鉢9点、壺28点(粗製15・精製13)、注口土器24点の器種構成を明示している(林1993)。
- 78) 図51-29の装飾鉢は、頸胴部界に屈折部を有し、口頸部が内傾して立ち上がるため、最大径は屈折部直下の体部の上端にある。口径が体部の径を下回ることから、形態的には広口壺に相当する。しかし、文様や文様帯構成は鉢形土器を踏襲しており、ここでは装飾鉢の中に含めている。
- 79) (須藤2003)では、住居跡内に1a、1b、2、3、4層の5枚の堆積層が確認されたと記されており、旧稿(須藤1992)で報告された1c、3a、3b、3c層が削除されている。但し図示された断面図に、大きな変更は認められず、本文中

にも従前の3b、3c層の層位名が用いられており、一貫性を欠いている。

- 80) (須藤2003)では、層位別の土器の分類にも変更が加えられており、床面・4層出土土器群が後期最終末、3c層出土土器群が晩期1a期、3b・2・1層出土土器群が晩期1b・2期に変更されている。なお3b層では晩期1b期、2・1層では晩期2期の土器型式が捉えられると記されているが、旧稿(須藤1992)の3b層は晩期1a期の堆積層であり、整合性が得られていないように思われる。

また、旧稿で提示された土器の出土層位についても変更が認められ、旧稿で2層出土と報告された図52-16が3b層出土、1a層出土と報告された図53-38が1b層出土に変更されている。

図版出典

図1：国土地理院発行1:50,000地形図「荒屋」50%縮小

図2：(鈴木隆英1985) 改変

図3：(須藤2003)

図4：(鈴木隆英1985)

図5：(金子1992a) 改変

図6：(須藤1992)

図7：(鈴木加津子1993) 改変

図8：(林1993)

図11~16：(鈴木隆英1985)

図17：(小林2003)

図18：(鈴木隆英1985)

図19：(林ほか1995)

図20b-1・2：(種市1983)、3：(春日ほか1982)、4・8：(鈴木隆英1985)、5：(岩見ほか1984)、6：(小平ほか1983)、7：(笹森ほか1998)、9・12：(中村1979)、10：(高田ほか1986)、11：(林ほか1995)、13：(似内ほか1995)、14：(小原ほか1990)

図21-1：(林ほか1995)、2：(種市1983)、3：(富樫ほか1981)、4：(宇部ほか2002)、5・8・10・12・15：(工藤ほか1997)、6：(葛西ほか1983)、7・11：(小原ほか1990)、9：(相原1981)、13：(田鎮ほか1986)、14：(渡辺ほか1997)、16：(佐々木ほか1986)

図22-1・16・24：(大野1988)、2：(鈴木隆英1985)、3：(市川ほか1976)、4・13・15・25・29・30：(小原ほか1990)、5・6：(似内ほか1995)、7・26：(高田ほか1986)、8：(谷地ほか1992)、9：(岩見ほか1984)、10：(斉藤1995)、11・31：(須藤1992)、12：(鈴木隆英1985)、14・19・20：(宇部ほか2002)、17：(須藤1984)、18・21：(藤田ほか1988)、22：(富樫ほか1981)、23：(高橋学1994)、27・28・32：(成田ほか1995)、33：(畠山ほか1979)、34：(工藤ほか1997)

図23-1：(種市1983)、2：(濱田ほか2003)、3：(濱田ほか1995)、4：(村越ほか1979)、5：(森2000)、6・9・10・13・15：(星ほか2000)、7：(佐々木ほか1986)、8：小林実測(平内町歴史民俗資料館蔵)、11：(渡辺ほか1997)、12：小林実測(早稲田大学考古学研究室蔵)、14：(谷地ほか1992)、16：(宇田川ほか2004)、

図24-17・20：(鈴木隆英1985)、18：(林ほか1995)、19：(黒坂2003)、21：(山口1995)、22：(宇田川ほか2004)、23・25・27：(工藤ほか1997)、24：(大野1988)、26：(榮ほか1998)

図26：(藤田ほか1988) 改変

図27-1：(黒坂2003)、2・3・6：(山口1995)、4：小林実測

(平内町歴史民俗資料館蔵)、5：(須藤1984)

図28：(安孫子1982)

図30-1・2・15：(鈴木隆英1985)、3：(藤田ほか1988)、4・9：(小原ほか1990)、5：(春日ほか1982)、6・8：(須藤1984)、7・16：(桐生ほか1986)、10：(林ほか1995)、11：(工藤ほか1997)、12：(中村1979)、13：(高橋学1994)、14：(成田ほか1995)

図32-1：(芹沢1960)・(杉山編1928a)、2・12・24：(渡辺ほか1997)、3：(大野1988)、4・9・10：(藤田ほか1988)、5：(杉山編1928a)、6：(八戸市博1985)、7・13・34・36：(須藤1984)、8：(市川ほか1976)、11：(須藤1992)、14：(佐々木ほか1986)、15・16：(榮ほか1998)、17・20・25・28・29・32：(成田ほか1995)、18・22・31・35：(小原ほか1990)、19：(藤村ほか2003)、21・30：(鈴木隆英1985)、23：(林ほか1995)、26：(工藤ほか1997)、27：(杉山編1928b)、33：(似内ほか1995)

図34-1~10：(佐々木ほか1986)、11：(榮ほか1998)、12・13：(成田ほか1995)、14：(工藤ほか1997)、15：(斉藤1995)、16：(野田ほか2000)、17：(東北大1985)、18(須藤1984)

図36-1：(星ほか1998)、2・4・5：(相原1981)、3：(榮ほか1998)、6：(黒坂2003)、7：(谷地ほか1994)、8：(須藤1984)

図37b-1：(北越考古学研究会1997)、2：(山口1995)、3：(関根2002)、4・5・11・12：(渡辺ほか1997)、6・16：(高橋学1994)、7・10：(星ほか2000)、8：(榮ほか1998)、9：(成田ほか1995)、13・15：(小原ほか1990)、14：(藤田ほか1988)、17：(高田ほか1986)

図38・39：(山内1964a)

図40-1~3：(山内1964a)、4：(小田野ほか1982)

図41-1：(山内1964a)、2：(水野編1958)

図42：(今村1983) 改変

図43-1・3：(野田ほか2000)、2：(市川ほか1976)、4：(成田ほか1995)

図44-1・2・6：(成田ほか1995)、3：(小原ほか1990)、4：(渡辺ほか1997)、5：(工藤ほか1997)

図45-1~3：(野田ほか2000)、4：(市川ほか1976)

図46-1：小林実測(慶応義塾大学民族学考古学研究室蔵)、2：(宇部ほか2004)、3(小原ほか1990)、4・7・11・14・17：(成田ほか1995)、5：(宇田川ほか2004)、6・10：(酒井1997)、8：(藤田ほか1988)、9：(高橋学1994)、12：(平井ほか1989)、13・15：(林ほか1995)、16・18：(工藤・小笠原1999)、19：(星ほか2000)

図47：（成田ほか1995）

図50：（工藤ほか1997）改変

図48・49：（鈴木隆英1985）

図51～53：（須藤1992）改変

引用文献

- 相原康二 1981 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－（一関地区 東裏遺跡）』岩手県文化財調査報告書第55集 岩手県教育委員会
- 安孫子昭二 1969 「東北地方における縄文後期後半の土器様式－所謂「コブ付土器」の編年－」『石器時代』第9号 pp.87-104 石器時代文化研究会
- 安孫子昭二 1980 「コブ付土器様式から亀ヶ岡土器様式への変遷過程」『考古風土記』第5号 pp.36-55
- 安孫子昭二 1982 「第五章 縄文時代 後・晩期」『村山市史 別巻一 原始・古代編』村山市史編さん委員会編 pp.399-524 村山市
- 池田淳子 2003 「熊登型石剣について」『三面川流域の考古学』第2号 pp.27-38 奥三面を考える会
- 市川金丸ほか 1976 『泉山遺跡発掘調査報告書－一般県道櫛引上名久井三戸線道路改良工事埋蔵文化財発掘調査－』青森県埋蔵文化財調査報告書第31集 青森県教育委員会
- 今村啓爾 1983 「文様の割りつけと文様帯」『縄文文化の研究 5 縄文土器Ⅲ』pp.124-150 雄山閣
- 今村啓爾 1994 「縄文土器の文様－変化を律するもの－」『日本美術全集 第1巻 原始の造形－縄文・弥生・古墳時代の美術－』pp.160-167 講談社
- 岩見誠夫ほか 1984 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ－柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡－』秋田県文化財調査報告書第105集 秋田県教育委員会
- 宇田川浩一ほか 2004 『向様田A遺跡 遺物編－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ－』秋田県文化財調査報告書第370集 秋田県教育委員会
- 宇部則保ほか 2002 『八戸市内遺跡発掘調査報告 15 是川中居遺跡1』八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集 八戸市教育委員会
- 宇部則保ほか 2004 『八戸市内遺跡発掘調査報告 19 是川中居遺跡3』八戸市埋蔵文化財調査報告書第103集 八戸市教育委員会
- 大塚達朗 1999 「大洞式土器の受容と変容－変容の双方向性について－」『季刊 考古学』第69号（特集縄文時代の東西南北）pp.70-75 雄山閣
- 大野憲司 1988 『玉内遺跡発掘調査報告書－一般国道282号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第171集 秋田県教育委員会
- 大村 裕 1999 「山内考古学の一側面－「山内考古学の見直し」に寄せて－」『考古学研究』第46巻第2号（通巻182号）pp.112-123 考古学研究会
- 小田野哲憲ほか 1982 『岩手の土器－県内出土資料の集成－』岩手県立博物館
- 小原俊巳ほか 1990 『上平遺跡群（上平遺跡）－第4次発掘調査概報（遺構・土器）－』盛岡市教育委員会
- 葛西 勲ほか 1983 『木戸口遺跡発掘調査報告書』平賀町埋蔵文化財報告書第12集 平賀町教育委員会
- 春日信興ほか 1982 『右エ門次郎窪・三合山・石ノ窪遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第69集 青森県教育委員会
- 金子昭彦 1991 「大洞B2式の磨消縄文について（上）－東北地方北部を中心として－」『紀要』pp.1-60 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 1992a 「大洞B2式の磨消縄文について（中）－東北地方北部を中心として－」『紀要』pp.1-44 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 1992b 「「雨滝式」の再検討」『北奥古代文化』第22号 pp.42-60 北奥古代文化研究会
- 金子昭彦 1993 「大洞B2式の磨消縄文について（下）－東北地方北部を中心として－」『紀要』pp.1-51 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2001a 『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史4 同成社
- 金子昭彦 2001b 「岩手県における縄文時代晩期の遺跡 付 代表的な集落遺跡の検討」『紀要』XX pp.11-46 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2001c 「亀ヶ岡文化の住居類型」『亀ヶ岡文化－集落とその実体－ 晩期遺構集成Ⅰ』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集 pp.67-70 日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会
- 金子昭彦 2002 「岩手県における縄文時代晩期の集落跡」『紀要』XXI pp.17-36 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 桐生正一ほか 1986 『湯沢遺跡』滝沢村文化財調査報告書第2集 滝沢村教育委員会
- 工藤 大ほか 1997 『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第40集 青森県立郷土館
- 工藤竹久・小笠原善範 1999 『是川中居遺跡－八戸市縄文学習館建設等に伴う発掘調査報告書－』八戸市埋蔵文化財調査報告書第82集 八戸市教育委員会
- 黒坂雅人 2003 『釜淵C遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集 山形県埋蔵文化財センター
- 小平忠孝ほか 1983 『小井田Ⅳ遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査－』岩手県埋文センター文化財調査報告書第69集 岩手県埋蔵文化財センター
- 後藤勝彦・小井川和夫 2003 『富崎貝塚－北上川中流域の淡水産貝塚の研究－』石越町文化財調査報告書第1集 石越町教育委員会

- 小林圭一 1999 「東北地方 後期(瘤付土器)」『縄文時代』第10号(特集縄文時代文化研究の100年) 第1分冊 pp.149-177 縄文時代文化研究会
- 小林圭一 2001 「最上川流域における縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』第7巻第1号(通巻31号) pp.21-81 山形考古学会
- 小林圭一 2003 「東北北半における縄文晩期前葉の注口土器」『研究紀要』創刊号 pp.1-44 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2004 「大洞B式「ノ字文」の系譜」『先史考古学研究』第9号 pp.84-111 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 斉藤邦雄 1995 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書-国道395号改良工事関連遺跡発掘調査-』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 酒井宗孝 1997 『上鷹生遺跡発掘調査報告書-上鷹生ダム建設関連遺跡発掘調査-』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第253集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 柴一郎ほか 1998 『虫内Ⅰ遺跡-東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XXIII-』秋田県文化財調査報告書第274集 秋田県教育委員会
- 佐々木清文ほか 1986 『手代森遺跡発掘調査報告書-北上川水系大沢川の河川改修工事に伴う事前緊急発掘調査-』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第108集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 笹森一朗ほか 1998 『水吉遺跡-八戸平原開拓建設事業(世増ダム建設)に伴う発掘調査報告-』青森県埋蔵文化財調査報告書第245集 青森県教育委員会
- 品川欣也 2003 「器種と文様,そして機能の相関関係にみる大洞A式土器の変遷過程」『駿台史学』第119号 pp.97-134 駿台史学会
- 柴田陽一郎 2001 『松木台Ⅲ遺跡-日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ-』秋田県文化財調査報告書第326集 秋田県教育委員会
- 杉沢昭太郎ほか 1999 『横間Ⅱ遺跡・谷地田Ⅰ遺跡・有矢野遺跡・有矢野館跡発掘調査報告書-中山間地域総合整備事業関連遺跡発掘調査-』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第303集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 杉山寿栄男編 1928a 『日本原始工芸』(1976年復刻版) 北海道出版企画センター
- 杉山寿栄男編 1928b 『日本原始工芸概説』(1981年復刻版) 北海道出版企画センター
- 鈴木加津子 1993 「真福寺小考-安行式と亀ヶ岡式における編年と分布の推敲-」『埼玉考古』第30号(記念号) pp.15-62 埼玉考古学会
- 鈴木克彦 1980 「亀ヶ岡式土器の羊歯状文に関する考察」『考古風土記』第5号 pp.56-80
- 鈴木克彦 1981 「亀ヶ岡式土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』 pp.216-226 雄山閣
- 鈴木公雄・林謙作編 1981 『縄文土器大成 4 晩期』講談社
- 鈴木隆英 1985 『曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書-東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査-』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第87集 岩手県埋蔵文化財センター
- 鈴木正博 2003 「「遠賀川式」文様帯への型式構え-埼玉における「綾杉文帯系土器群」の位相と「綾杉文様帯系土器群」への「文様帯クロス」-」『埼玉考古』第38号 pp.3-23 埼玉考古学会
- 鈴木正博 2004 「弥生式前期「荒海3式」の型式学的射程-「変形工字文系土器群」の変容に観る新たな文様帯の生成-」『日本考古学協会第70回総会 研究発表要旨』 pp.89-93 日本考古学協会
- 須藤 隆 1984 「北上川流域における晩期前葉の縄文土器」『考古学雑誌』第69巻第3号 pp.265-315 日本考古学会
- 須藤 隆 1992 「東北地方における晩期縄文土器の成立過程」『東北文化論のための先史学歴史学論集』 pp.655-707 加藤稔先生還暦記念会
- 須藤 隆 1996a 「晩期前葉・中葉における亀ヶ岡系土器の波及」『縄紋晩期前葉-中葉の広域編年』平成4年度科学研究費補助(総合A)研究成果報告書 pp.10-15 北海道大学文学部附属北方文化研究施設
- 須藤 隆 1996b 「亀ヶ岡文化の発展と地域性」『日本文化研究所研究報告別巻』第33集(別刷) pp.1-40 (pp.93-132) 東北大学日本文化研究所
- 須藤 隆 1998 「終章」『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』 pp.527-542 纂修社
- 須藤 隆 2003 「東北日本における晩期縄文集落の研究」『東北大学文学研究科研究年報』第52号(別冊) pp.1-59 (pp.30-88) 東北大学大学院文学研究科
- 須藤隆ほか 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚Ⅱ』東北大学文学部考古学研究会
- 関根達人 2002 「沢上貝塚出土晩期縄文土器の再検討」『宮城考古学』第4号 pp.1-27 宮城県考古学会
- 芹沢長介 1960 『石器時代の日本』築地書館
- 芹沢長介編 1982 『東北大学文学部考古学資料図録』東北大学文学部
- 高瀬克範 1999 「東北弥生社会の住居と居住単位」『古代文化』第51巻第9号(通巻第488号) pp.1-18 古代学協会
- 高田和徳ほか 1986 『葦前-岩手県葦前遺跡出土資料の図録-』一戸町文化財調査報告書第17集 一戸町教育委員会
- 高橋忠彦・伊藤攻 2000 『戸平川遺跡-東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXIV-』秋田県文化財調査報告書第294集 秋田県教育委員会
- 高橋 学 1994 『白坂遺跡発掘調査報告書-県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査-』秋田県文化財調査報告書第244集 秋田

県教育委員会

- 高橋龍三郎 1981 「亀ヶ岡式土器の研究－青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について－」『北奥古代文化』第12号 pp.1－51 北奥古代文化研究会
- 高橋龍三郎 1991 「第2節 縄文時代晩期前半の土器」『縄文沼遺跡発掘調査報告書』 pp.101－107 小泊村教育委員会・早稲田大学文学部考古学研究室
- 高橋龍三郎 1999 「東北地方 晩期（亀ヶ岡式）」『縄文時代』第10号（特集縄文時代文化研究の100年）第1分冊 pp.178－196 縄文時代文化研究会
- 高柳圭一 1993 「1992年の縄文時代学界動向 土器型式編年論 晩期」『縄文時代』第4号 pp.160－166 縄文時代文化研究会
- 田鎖壽夫ほか 1986 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第100集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 種市 進 1983 『道地Ⅱ遺跡・道地Ⅲ遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査－』岩手県埋文センター文化財調査報告書第64集 岩手県埋蔵文化財センター
- 種市進ほか 1982 『有矢野遺跡・上の山Ⅹ遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査－』岩手県埋文センター文化財調査報告書第38集 岩手県埋蔵文化財センター
- 種市進ほか 1983 『岩手県安代町上の山Ⅶ遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査－』岩手県埋文センター文化財調査報告書第60集 岩手県埋蔵文化財センター
- 東北大学文学部考古学研究室 1985 「北上川上流域における先史集落の調査－岩手県高梨遺跡発掘調査報告－」『東北大学考古学研究室報告 1』 pp.91－145 東北大学文学部考古学研究室
- 富樫泰時ほか 1981 『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第85集 秋田県教育委員会
- 中村良幸 1979 『小田遺跡発掘調査報告書』大迫町埋蔵文化財報告第4集 大迫町教育委員会
- 成田滋彦ほか 1995 『泉山遺跡－道路改良事業（櫛引・上名久井・三戸線）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』青森県埋蔵文化財調査報告書第181集 青森県教育委員会
- 西脇対名夫 1995 「文様帯系統論ノート」『北海道考古学－北海道考古学の諸問題－』第31輯 pp.65－83 北海道考古学会
- 似内啓邦ほか 1995 『上平遺跡群 猪去館・上平Ⅱ遺跡－平成4・5年度発掘調査概報－』盛岡市教育委員会
- 野田尚志ほか 2000 『沖中遺跡・沖中（2）遺跡発掘調査報告書』三戸町埋蔵文化財調査報告書第1集 三戸町教育委員会
- 畠山憲司ほか 1979 『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第63集 秋田県教育委員会
- 八戸市博物館 1985 『縄文の美－是川中居遺跡出土品図録 土器編－』目で見える八戸の歴史2
- 濱田宏ほか 1995 『水吉Ⅵ遺跡発掘調査報告書－世増ダム関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第219集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 濱田宏ほか 2003 『泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書－一関遊水池事業関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第399集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 林 謙作 1993 「曲田Ⅰと八幡－東北北部晩期前葉の土器－」『論苑考古学』 pp.223－263 坪井清足さんの古稀を祝う会編
- 林 謙作 1996 「回顧と展望－広域編年 1993－1995－」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』平成4年度科学研究費補助（総合A）研究成果報告書 pp.1－9 北海道大学文学部付属北方文化研究施設
- 林謙作ほか 1995 『山井遺跡－縄文晩期の包含層－』一戸町文化財調査報告書第36集 一戸町教育委員会
- 半田純子 1966 「東日本縄文時代晩期前半から後期への移行期にみられる変化についての一考察」『明治大学大学院紀要』第4集 pp.717－727 明治大学
- 平井進ほか 1989 『寺前Ⅰ・Ⅱ遺跡・片地家館跡発掘調査報告書－国道343号改良工事関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第140集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 藤田亮一ほか 1988 『八幡遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第26集 八戸市教育委員会
- 藤沼邦彦 1989 「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』 pp.318－324 小学館
- 藤村茂克ほか 2003 『盛岡市内遺跡群－平成14年度発掘調査概報－』盛岡市教育委員会
- 藤村東男 1980 「大洞諸型式設定に関する二、三の問題」『考古風土記』第5号 pp.19－35
- 北越考古学研究会 1997 「新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究－新発田市中野遺跡の共同資料調査－」『北越考古学』第8号 pp.1－98 北越考古学研究会
- 星 雅之ほか 1998 『本内Ⅱ遺跡発掘調査報告書－東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第271集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 星 雅之ほか 2000 『長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第336集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 松本彦七郎 1919 「宮戸島里浜及び気仙郡瀬沢分塚の土器－特に土器紋様論－」『現代之科学』第7巻5・6号（小林行雄編 1971年刊『論集 日本文化の起源 第1巻 考古学』 pp.199－216 平凡社 所収）
- 水野清一編 1958 『世界陶磁全集 1 日本古代篇』（再版）河出書房新社
- 武藤康弘 2001 「亀ヶ岡文化の集落遺跡の構造」『亀ヶ岡文化－集落とその実体－ 晩期遺構集成Ⅰ』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集 pp.61－66 日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会

- 村越潔ほか 1979 『石郷遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第7集 平賀町教育委員会
- 村田章人 1992 「縄文晩期前葉における大洞、安行式の関係」『シンポジウム 縄文時代後・晩期 安行文化—土器型式と土偶型式の出会い—発表要旨』 pp.18-25 埼玉考古学会・「土偶とその情報」研究会
- 村田章人 1993 「大洞B式と安行3a式の関係についての予察」『埼玉考古』第30号(記念号) pp.63-81 埼玉考古学会
- 村田章人 2000 「羊歯状文の施文原則」『埼玉考古』第35号 pp.32-46 埼玉考古学会
- 森 淳 2000 『滝端遺跡発掘調査報告書—県営南の郷中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—』 階上町教育委員会
- 谷地薫ほか1992 『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—家ノ後遺跡—』秋田県文化財調査報告書第229集 秋田県教育委員会
- 谷地薫ほか 1994 『桂の沢遺跡発掘調査報告書—小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査—』秋田県文化財調査報告書第247集 秋田県教育委員会
- 柳沢和明ほか 1990 『摺萩遺跡』宮城県文化財調査報告書第132集 宮城県教育委員会
- 山口博之 1995 『宮の前遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第19集 山形県埋蔵文化財センター
- 山内清男 1929 「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第1巻第2号 pp.117-146 史前学会
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号 pp.139-157 東京考古学会
- 山内清男 1932 「日本遠古の文化 三 縄紋土器の終末 四」『ドルメン』第1巻第7号 pp.49-53 岡書院
- 山内清男 1939 『日本遠古の文化—補註付・新版—』 先史考古學會
- 山内清男 1964a 「縄文式土器・総論」『日本原始美術 1 縄文式土器』 pp.148-158 講談社
- 山内清男 1964b 「図版解説」『日本原始美術 1 縄文式土器』 pp.174-188 講談社
- 山内清男 1966 「縄紋式研究における茨城県遺跡の役割」『茨城県史研究』第4号 pp.1-12
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会
- 山内清男・平山久夫ほか 1971 「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』第3号(特集縄文時代の配石遺構) pp.59-80 北奥古代文化研究会
- 四井謙吉ほか 1981 『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書—荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡—』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第21集 岩手県埋蔵文化財センター
- 渡辺誠ほか 1997 『青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』古代學研究所研究報告第5輯 古代學協會